45
316ｲ

始

45-316

刷縮補增

集全樗

第五卷

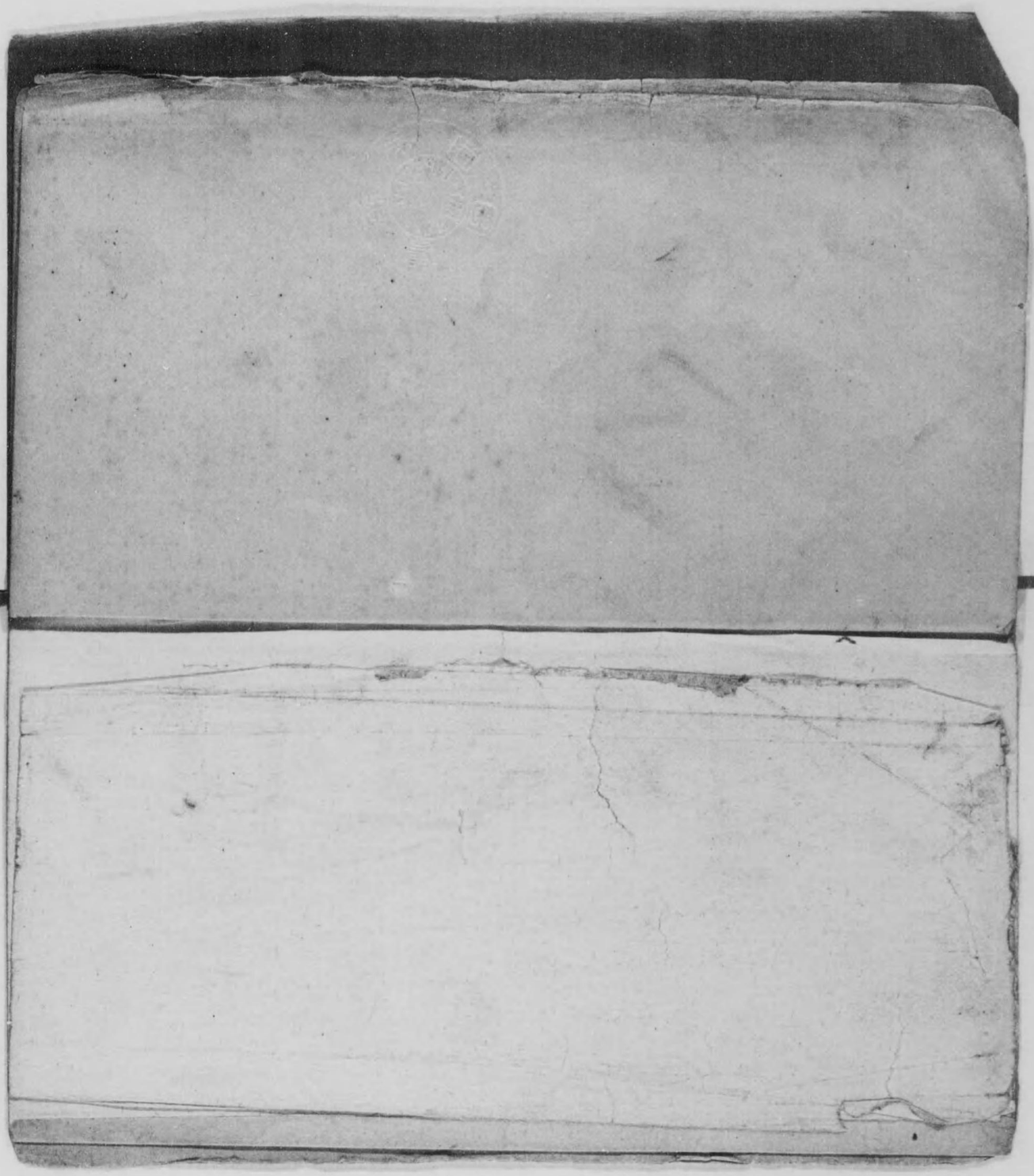
品小及華想

文學博士
高山林次郎遺稿

發兌元
博文館

5. 3. 20
購求

著者小照



著者筆蹟

離別に臨て我妹に贈る

歌二首

想ひ見る涙の雨に濡ひぬる里の社は
如何ぞ命の相ひ一葉を

和子洲に涙を立ひやまば
月は影さへ共に悲しん

遇ひしと書おくこの言葉を
今の京城の博多行ふ夜

著者筆蹟

緒言

縮刷樗牛全集第五卷は、舊刊樗牛全集第五卷より消息と外篇とを削除し、更に新に加へたるものには、明治十九年福島在住時代に起艸したりし小說「春日芳艸之夢」、譯文「淮郎亭の悲哀」全部と、感想及雜篇中に載せたる流砂・愛・樗牛雜記等十餘篇と、及全卷中に登載すべくして漏れたるもの百餘項とを以てせり。其大半は新に發見したる遺稿なりとす。

卷頭の著者小照は、著者が中學時代の撮影にかゝり、筆蹟「離別に臨みて我妹に殘せる歌」は、明治二十五年の夏歸省し、其九月再び仙臺の學舍に赴かんとするとき、近く東京へ嫁ぎ行く妹直子に與へしもの、瀧口入道の草稿は、未亡人杉氏の所藏にかゝる。小說「春日芳艸之夢」

は、福島中學在學中の作にして、著者の少年時代に於ける詞藻を窺ふに足るべく、原本なきを以て同窓中桐確太郎氏が當時謄寫し置きたるものに依る。而して本卷中扉の文字瀧口入道は其の草稿の表紙にして、他は少年時代の日記「光陰誌行」より取れり。

大正五年一月

姉崎嘲風
畔柳芥舟
笹川臨風
藤井愚佛

識

增補縮刷 樗牛全集 第五卷目次

想華及小品

春日芳草之夢（明治十九年作）……一頁
夢見草……一
初篇……四
淮亭郎の悲哀（明治三十四年七月一十月「山形日報」）……四九
第一翰（一千七百七十年五月十日）……四九。第二翰（五月十二日）……五〇。第三翰（五月十三日）……五一。第四翰（五月十五日）……五二。第五翰（五月十七日）……五三。

第六翰(五月二十二日)……五四。第七翰(五月二十六日)……五六。第八翰(五月三十日)……[illegible]。第九翰(六月十九日)……七一。第十翰(六月二十一日)……七二。第十一翰(六月廿九日)……七四。第十二翰(七月六日)……七五。第十三翰(七月八日)……七七。第十四翰(七月十日)……七八。第十五翰(七月十三日)……七九。第十六翰(七月十六日)……八〇。第十七翰(七月十八日)……八一。第十八翰(七月十九日)……八三。第十九翰(七月二十日)……八五。第二十翰(七月二十七日)……八四。第二十一翰(七月三十日)……八八。第二十二翰(八月八日)……八九。第二十三翰(八月十二日)……九〇。第二十四翰(八月十八日)……九九。第二十五翰(八月二十一日)……一〇一。第二十六翰(八月二十二日)……一〇二。第二十七翰(八月二十八日)……一〇三。第二十八翰(八月三十日)……一〇五。第二十九翰(九月三日)……一〇六。第三十翰(九月十日)……一〇六。第三十一翰(十月二十日)……一一四。第三十二翰(十一月十日)……一一六。第三十三翰(十二月二十四日)……一一七。第三十四翰(一千七百七十二年一月八日)……一二〇。第三十五翰(一月二十日)……一二三。第三十六翰(二月十七日)……一二三。第三十七翰。第三十八翰。第三十九翰。第四十翰(八月二十一日)……一二四。第四十一翰(九月三日)……一二五。第四十二翰(九月五日)……一二六。第四十三翰(九月十二日)……一二七。第四十四翰(十月十九日)……一二八。第四十五翰(十月二十七日)……一二九。第四十六翰(同日夕)……第四十七翰(十月三十日)……一二九。第四十八翰(十一月三日)……一三〇。第四十九翰(十一月八日)……一三二。第五十翰(十一月十五日)……一三二。第五十一翰(十一月二十一日)……一三三。第五十二翰(十一月二十二日)……一三四。第五十三翰(十一月二十四日)……一三四。第五十四翰(十一月二十六日)……一三五。第五十五翰(十一月三十日)……一三六。《本文校了の後、圖らずも他に於て此間に入るべき十二月一日、四日、六日の三翰を脱せることを發見せり。第六卷に於て之を補ふべし。讀者時に遡》編者ゲーテ、讀者に告ぐ……一四〇。第五十六翰(十二月十二日)……一四一。第五十七翰(十二月十四日)……一四三。編者ゲーテ、讀者に告ぐ……一四四。第五十八翰……一四七。第五十九翰……一五〇。第六十翰……一五七。第六十一翰……一六四。第六十二翰……一六五。

瀧口入道(明治二十七年一月頃)……一六九

感想

流砂（明治二十三年五月頃）……二七一
吾妹の墓（明治二十四年）……二七五
戀情論（明治二十四年頃）……二七九
故郷論（明治二十三年頃）……二八三
雪中梅（同上）……二八六
今樣三首（同上）……二八六
敦盛……二八七
忠度……二八七
小督……二八八

愛（明治二十五年一月頃）……二八八
傷心錄（明治二十六年六月頃）……二九六
現ならぬ現……二九六
かぎりなき空のあなた……二九七
傷心の魂鬼……二九八
墓中の人……二九九
亡弟良太病中書翰の首に書す（明治二十八年一月）……三〇〇
わがそでの記（明治三十年六月）……三〇一
自殺論（明治三十年十月）……三一九
厚積薄發（同上）……三二五
冷鐵のひゞき（同上）……三二五

送年の辭（明治三十年十二月）……三二六
決するを欲せざる疑問（明治三十一年一月）……三二七
たそがれの辭（明治三十一年一月）……三二八
秋色（明治三十一年十月）……三三五
歳暮（明治三十一年十二月）……三三五
死と永生（明治三十二年八月）……三三七
一飽の時（明治三十二年九月）……三四〇
秋（同上）……三四〇
無題集（明治三十三年秋、明治三十四年一月）……三四一
世と馬（明治三十一年十一月）……三四六

清見寺の鐘聲（明治三十四年五月）……三四七
思ひ出の記（同上）……三五一
乙羽兄を憶ふ（明治三十四年六月）……三五七
無題集（明治三十四年八月）……三六〇
況後錄（明治三十四年十二月）……三六三

雜篇

鳥海山紀行（明治三十四年頃）……三八一
夏季の學生（明治三十一年七月）……三九一
人生と天然（明治三十二年六月）……三九四

海の文藝（六明治三十三年一月）……三九八
清見潟日記（四明治三十四年一月）……四〇五
一　はしがき……四〇五
二　清見潟の今昔……四〇六
三　默思……四〇八
四　興津の宿……四一〇
五　三保の松原……四一三
六　久能山……四一六
七　富士川……四一九
八　惑ひ……四二〇
感慨一束　姉崎嘲風に與ふる書（八明治三十四年一月）……四二二

鄉里の弟を戒むる書（十明治三十四年一二月）……四四七
猶多放言（一明治三十五年一月）……四五三
吾が好む文章（二明治三十五年一月）……四五六
文は人也（四明治三十五年一月）……四六六
斷片（三明治三十五年一三四月頃）……四六七
人と愛情……四六七
疑問……四六七
日蓮上人……四六九
日蓮研究の動機（五明治三十五年一月）……四七一
樗牛雜記（一明治三十五年一月より五月）……四七七

樗牛全集拾遺

詩歌宗教及び道德（明治二十九年五月）……四九七
戰爭は競爭のみ（明治二十九年六月「太陽」）……五〇一
外山博士を憶ふ（明治三十年四月）……五〇二
一　世の鹽……五〇二
二　三河武士の好模型……五〇四
三　博士の天分……五〇六
四　社會的批評家としての博士……五〇八
五　博士の死……五一一
六　博士に對する無上の讒誣……五一二

七　博士の眞摯……五一五
成敗と正義（明治三十年八月「太陽」）……五一六
文明史とは何ぞや（明治三十年九月「太陽」）……五一八
基督教徒の妄想（明治三十年九月「太陽」）……五二七
基神兩教の合一論に就て（同上）……五三〇
罪惡の自覺と國家の利福（同上）……五三一
主義と人物（同上）……五三二
小人、人の美を成さず（同上）……五三三
社會と新聞紙（同上）……五三四
士の德操（明治三十年十一月）……五三六
人道何處に在る（明治三十年十一月）……五三八

學問死活辨（明治三十年十二月「太陽」）……五三九
國樂制定の必要（明治三十一年一月「太陽」）……五四八
死學者（明治三十一年一月「太陽」）……五五〇
自ら傳へよ（同上）……五五一
大和魂と武士道（同上）……五五一
腐蝕せる果物（明治三十一年二月「太陽」）……五五二
國民歌を撰べ（明治三十一年三月「太陽」）……五五三
無定見を誇る學者（同上）……五五四
學者の誤解（同上）……五五五
死學者と守錢奴（明治三十一年三月「太陽」）……五五八
世豈所謂儒服なるものあらむや（同七）……五五九

國學家と古物屋（明治三十一年一月「太陽」）……五五九
ハイネ（明治三十一年三月「太陽」）……五六〇
難者に答ふ（明治三十一年四月「太陽」）……五六〇
讀賣海外騷壇記者に……五六〇
大村西崖に……五六一
綱島梁川に……五六二
實在と空想（明治三十一年三月「太陽」）……五六四
詩歌の誘惑……五六七
ビョルンソンとゾラ（明治三十一年四月「太陽」）……五六九
覆面將に落ちむとす（明治三十一年五月「太陽」）……五六九
江戸ッ兒は忘恩兒か（同上）……五七〇

古を忘るゝの民（明治三十一年十月「太陽」）……五七一
好一對（同上）……五七二
無題（同上）……五七三
統一と分離（同上）……五七四
主義の廣狹（同上）……五七四
欺き易き社會（同上）……五七五
疑問（同上）……五七六
家庭と文學（明治三十一年六月「太陽」）……五七七
彼等と吾人と（同上）……五七八
不得已也（同上）……五七八
西洋畫家に問ふ（同上）……五七九

寧ろ民を愚にせむ乎（明治三十一年九月「太陽」）……五八〇
日本人と能辯（同上）……五八一
大人物と私德（同上）……五八三
少年國……五八四
大人物の生死……五八六
何處まで小人的なる乎（明治三十一年十月「太陽」）……五八七
一刀兩斷の制裁（同上）……五八七
曲學阿世とは何の謂ぞ（同上）……五八八
西鄕南洲の銅像（明治三十一年十月稿）……五八九
近時の銅像（明治三十一年十一月「太陽」）……五九一
大人物の墓……五九三

南洲とハイネ（明治三十一年十二月「太陽」）……五九五
グラハム・ベル氏（明治三十一年十一月「太陽」）……五九五
内村鑑三君に與ふ（明治三十一年十一月）……五九六
逐客康有爲（明治三十一年十二月「太陽」）……六〇四
無趣味の社會（同上）……六〇六
蟬しぐれ（明治三十一年八月「太陽」）……六〇九
本邦哲學界の現勢（明治三十二年二月「太陽」）……六一〇
國民と個人（同上）……六一二
學閥と云ふこと（明治三十二年三月「太陽」）……六一二
蟬しぐれ（明治三十一年八月「太陽」）……六一五
日本主義と大文學（明治三十二年四月「太陽」）……六一六

恐ろしき沈默（明治三十二年六月「太陽」）……六二二
東北の遺利（同上）……六二三
坪内雄藏氏の『倫理教育論』を讀む（明治三十二年五月）……六二五
一　倫理教育の本領に關して吾人と其說を異にす……六二五
二　是の根本の異說より生ずる方案の差異……六三〇
三　坪内氏の教を請ふべき他の條々……六三二
國民の歌（明治三十二年八月「太陽」）……六三六
常識の缺乏（同上）……六三七
時勢と詩人（明治三十二年十月「太陽」）……六三八
板垣氏の奇言（明治三十二年十二月「太陽」）……六四五
青年の時弊（明治三十三年一月一演說）……六四七

新時代に處するの覺悟……六四八
所謂國家主義……六四九
窮屈なる教育制度……六五一
無規律なる社會……六五三
悲憤慷慨……六五七
我が青年の責任……六五八
先生後進（明治三十年九月「太陽」）……六五九
人と天分（明治三十三年三月「演藝」）……六六〇
大家小家（明治三十年九月「太陽」）……六八四
國字改良論（明治三十一年三月「太陽」）……六八五
國字改良會に望む（明治三十一年十月「太陽」）……六八六

本年の二大問題（明治三十三年一月「太陽」）……六八九
國字改良の反對者（明治三十三年二月「太陽」）……六九三
國語調査會（明治三十三年五月「太陽」）……六九六
調査會の通弊……六九七
調査會は須らく多方面なるべし……六九九
板垣伯と福澤氏（明治三十三年六月「太陽」）……七〇一
三田翁の所謂道德（同上）……七〇一
『修身要領』の巡回演說（同上）……七〇三
學風に就て（明治三十三年六月「中學世界」）……七〇四
一　學生と社會……七〇四
二　學生の幅の利く社會は幼稚也……七〇五

三　都會と地方と孰れか學問に益ありや……七〇六
人格の力（明治三十三年七月）……七〇九
卒業生諸子に告ぐるの辭（同上）……七一〇
文藝消息（明治三十四年四月五月六月「太平洋」）……七一四
標準建築（明治三十一年三月）……七二二
嗚呼凡俗改革（明治三十四年七月「太陽」）……七二三
偏狹なる獨逸（明治三十四年七月「太平洋」）……七二七
吾人の預言（明治三十四年十月「太陽」）……七三二
兆民とハイネ（同上）……七三三
天下第一傷心の事（同上）……七三三

一年有半（同上）……七三四
學士の虐遇（同上）……七三四
國家の無情（同上）……七三五
人々自ら悟らざるべからず（同上）……七三五
趣味ある旅行記（同上）……七三六
晩年の平和（同上）……七三六
抑〻是れ何の才子ぞ（同上）……七三七
漫評（同上）……七三八
留學生諸君を送る（明治三十四年十一月）……七四二
新聞小說（明治三十一年三月「太陽」）……七四五

第五卷目次終

雜談（明治三十四年十二月「太陽」）……七四六
罵倒錄（明治三十五年八月九月「太平洋」）……七四七
詹々錄（明治三十二年六月七月「太陽」）……七六〇
無題錄（明治三十四年四月十月「太陽」）……七六八
雜談（明治三十五年七月十月十一月「太陽」）……七七一

春日芳草之夢

春日芳草之夢

芳雪仙史

夢見草

窮窓春を鎖めて磨瓶煙を止め、錯雜せる書籍は積て机を埋め、斑亂せる器物は布て席を沒す、窓外の櫻花は爛として半闌の色を放ち、枝々晩霞を帶びて斜陽光無く、宛轉たる流鶯も色衰へ聲槁れて徒らに梅樹を守る。是時に當て仙史呫嗶方に終て靜に破窓を開き、眸を放つて遥に西小芙岳を望めば、淡靄糢糊として之を抹し、秀然たる面目、嫣々の光を帶びて當に一朶の芙蓉、晩風に吹かれて紅臙を失ふが如し。近く大隈川に俯せば、水色濯々拭ふが如く、微風時に起て蒼漣復渚溶々金を湧かし、素影紅陰纖波に染みて艶たる淸姿掬すべし。林や紅にして山や蒼、双眼の感ずる所、情思の觸るゝ處、物として春心を惹かざるはなく、觀とし

て游情を動かさざるはなし。仙史慨然として以爲(おもへら)く、人生五十は素より蜉蝣旦夕の生涯、生の目的は快樂にあるのみ、後世萬鈞の重名は生前一杯の酒に如(し)かずと、古人亦既に名を薄行に傷く、今人何ぞ思を逸樂に惱まざらん、螢光窓雪は何ぞ爲すを要せんや、且夫れ今歳九十の春光塵かに旬を過ぐれば、朔風落花を捲きて冷雨殘紅を洗ひ、香去り色空しくして桃蕋櫻蕚は飛で何(いづ)くにか之く、況んや年々歳々花同じと雖も人同じからず、或は人又花を待たず、消て北邙(ほくバウ)の煙となるも知る可らざるに於てをや、今にして快を取らずんば又何れの時をか期せん、朝辛暮苦は吾が知る所に非ざるなりと。乃ち輕裝單束、杖を曳て隈江の邊に散歩す。時已(すで)に晡時、夕日西山の巓にあり、翠峰連々煙霞を疊て黛蒼沐(もく)するが如く、麥壠層々青波を漲らして綠雲擾々たり、柴門半ば開く處、花間鶯聲絶え、綠陰影暗き處、烏雀の音喧(かまびす)し。妍妍たる斜陽は餘光水面を射り、金龍忽ち登(ノ)て瀲灩黃金海の如く、兩岸の碧蘚、繡巖を彌縫して萬株の桃櫻、漫として其上にあり、輕風之を拂(しい)へば片々として飛で雲となり、紛々として布て雪となる、餘影河水に倒醮し、宛然繡錦を浮ぶ、脈々たる水風は面を吹て寒からず、喈々たる春鳥は互に和して喧しからず、青草は翠を敷きて以て坐すべく、纖柳は雲を拂(ノ)て以て愛

すべし、二三の蝶舟濃霞を排し、棹歌相答て歸るを促し、五六の公子觀花の馬に跨(ノ)て飛蹄躁躁、花を穿ち柳に倚る、其狀、逸僊羨むべく、頓に武陵の春を想見す。仙史行々(ゆくゆく)四方の勝を萃め吟步雍々として歸るを忘る。既にして蒲牢一杵、水を渡(わた)れば群鴉友を萃めて棲に歸り、又遊人の影を見ず、一界寂(せき)として只水風芬香を飛して肌膚に徹するを覺ゆるのみ。仙史卽ち落英を敷て香風の下に臥し、仰で櫻花の爛熳たるを眺め、俯して河水の洋々たるを見て、低歌高吟獨り暮影を領す。興未だ半ばならず、懷襟爽々登仙の思をなし、彼の浦島八百年の游を思ひて桃源七世の快を羨み、恍々たる睡氣漸く起り、止めんと欲して止まる能はず、忽ちにして書然として南柯の鄕に入る矣。

春日芳艸之夢（初篇）

此處に新城街北の一孤丘にして、一境蕭洒、隱として一公園をなす。是日、天朗に氣清く長空緲々として涯埃なく、一點雲翳の碧天を遮るなし、滿林霜に飽くの紅葉は爛煥として色將に燃えんと欲し、一丘節を尙ふするの蒼松は蔚蔥として綠將に滴らんと欲す。姑射美人の淑艶なるあらざるも、婵娟たる女郎花は枝々露に堪へずして方に騷客の思ひを惹き、金衣公子の綿蠻たる有らざるも、窈窕たる斷腸紅は蕭然として永く恨人の怨を留む、闌々たる秋蝶の戲るゝ邊は、野花盛に芬葩を放ち、群鳥の嘒々として躁ぐ所、空中漫として錦雲を漲らす、日已に下午、雲月共に高し。是時に當り辰聲蜑然として響き、噪喋たる醉吟音漸く近し。既にして數個の書生、鳳坂に向て來る、大概ね扼腕突兀、鐵骨襤褸を穿て高屐地を鳴らし、步步蹣跚として張肩風を剪る。吟罷て一生拳大の杖を揮て曰く、諸君途にして一嬪の欄干に倚るを見ざりしや、雲鬢巧みに淡烟の柳を罩め、蛾眉妙に遠山の翠を留め、煥たる金釵壓に慵

根を止めて、纖たる細手は斜に手帕を保ち、明眸皎齒、殆んど閒然するなしと雖も、恨むらくは豐臉低鼻にして臼女の命の亞流なるを。言未だ畢らず、一生あり、啞然として大に笑ひて曰く、兄は美人の探訪に巧なりと自稱すれども、眸圃の瓜未だ熟せず、僕中路にして絕世の佳人の裊々たる蓮步を移して街頭を過ぐるを見る、花顏婉麗にして芳紀二八許り、綠雲髮を なし、楊柳眉をなし、嬌臉淡紅を潮して羞るあるが如く、凉眸の注ぐ處、秋波壓かに情を寄せ、纖々たる腰支は裊柳の風に堪へざるが如く、楓葉玉手を裁して長袖彩霞を拂ふ、嫣然として一笑すれば、綽約たる麗花も色を失ひ、嬌音一度び放てば、宛轉たる倉庚も亦聲無く、方に之れ巫峽の神女漸く帳を出でて楚臺の宋玉纔に閨を離るゝが如し、僕之を一瞥して恍々乎として涎の顚に交るを覺えず、只之れが輕羅となつて以て腰支に接し、之れが粧鏡となつて以て嬌面を分つを願ふ而已、惜しむらくは諸君をして之を見せしめざるをと。一生獅鼻を動かし目眦を低れ、嗷々の聲を發して曰く、君又言ふ勿れ、僕已に彼れの名を知る、安んぞ其人を知らざらんや、彼れは其名を梅史と云ひ、姓を相樂と云ふ、城北の孤村に僑居し、某校に通學す、才色共に備はり、實に今世の佳人なり、雖然大丈夫他日志を得て四海に蹴揚し、天下

の人皆其門下に伺候するに至らば、彼れの如きもの斗筲以て致すべし、豈羨むに足らん哉、と云ひ畢て意氣揚々たり、一群聞て皆大に笑ふ。明眸秀眉白肌紅唇の一生あり、靜かに衆に向て曰く、諸君彼の薔薇を見ずや、婉美にして人好んで之を愛すと雖も、之に觸るれば則ち人を刺す、美女亦然り、玉顏の婉なるは眞の婉麗なるに非ざるなり、容貌の瀟たるは眞の瀟嬋に非ざるなり、軟腕柔手は虎狼の力あるに非ずと雖も能く英雄を捕獲し、眷笑愛媚は鼎火の熱あるに非ずと雖も能く纖膓を蕩盡し、智者も爲に其智を失ひ、勇士も爲に其勇を失ふ、古今皆然り、諸君何ぞ之を鑑みざる、且つ吾曹は皆後來有爲の學生に非ずや、當に奮勵其業を終へ、而して社會の公益を勉む可し、豈在國父兄の辛苦に成れる貴重の學資を以て空しく之を紅笑綠顰の間に徒費して可ならんや。言未だ纔がざるに諸生大に嘲笑して曰く、甚しい哉高木君の固陋なるや、誰か春雨海棠を洗て驚身全く潤ふを見て其風情を賞せざらん、誰か裏娜の美人を見て花梢露を帶るの思なからん、之を賞し之を愛するもの、之れ卽ち人の情なり、情は乃ち物の膠漆、苟くも情無くんば天地物無し、君の如きは卽ち無情の人、共に言ふに足らずと雖も、猥りに得意の才辯を叩て盧名を釣らんと欲するは實に笑ふべきなり、仰も

我輩の今日遊を取るものは何の爲めぞや、積日の汗勵を洗て新歡を迎へんが爲めならずや、然るに却て心痛の不快を覺ゆ、皆之れ君の罪なり、且つ君は僕等に中途に會せし人、豈其歸路全うするを要せんや、僕等、請ふ之れより辭せんと、相促して去る。殘後の一生、其影を目送して嘆じて曰く、嗚呼我れ實義を以て忠告すれば、彼れ非禮を以て我を遇す、章大醉狂の言、素より咎むるに足らずと雖も、世道の澆季にして人情の輕薄なる、一に茲に至るや、と啾然之を久うす。仰で蒼漢を望み、獨語して曰く、日途尙ほ長し、之より溪谷の幽勝を探らん、と南に歩して去る。畢竟之れ何人ぞ、其名を高木秀一と云ひ、夙に商業の學に從事す、穎才敏智、好て文を屬し、博聞卓識、遠く他生の及ぶ所に非ず。風姿亦瀟優、凡皆呼で才子と云ふ。

秀一、群に離れ、心快々として樂まず、行路を轉じ、獨り溪流に沿て山際に進行す、芳草徑に横り、異香秋蝶を飛ばし、兩傍の綠陰紅錦を雜へ、潺々の溪流は秋蟬の音に和し、林鳥聲あり、形を見ず、微風蘆荻を吹て秋氣瀟洒たり。行く數丁、茂林壁をなし、修竹門を爲し、一境寂として人籟を絶し、宛として小仙窟を爲す。秀一歩を槐陰に止め、笑て曰く、之れ紅

埃肌に染まず、實に塵外の境なり、恨むらくは前代六朝の士ありて與に逸事を談ずるなき耳。起て溪邊を徘徊す、時に朗々たる吟聲、金風に吹れて來る、其聲極めて微妙、高低緩急、正に之れ黄鳥樂を梅邊に奏し、牧笛調を月夜に叩く。秀一耳を掎て以爲く、此處雜草路を塞ぎて絶て人跡なし、之れ勝を探るの吟客に非ずんば、必ず世を避くるの逸士ならん、果して然らば共に韵事を談ずべしと、岩に踞して其來るを待つ。暫くにして吟聲漸く微にして、遂に其之く所を知らず、唯、秋霧の岳邊に横ふるを見る而已。秀一失望、興盡き趣空しく、杖を曳て歸途に就かんと欲す。秋天晴雨定め無く、忽ちにして一天墨を流し、驟雨沛然、盆を覆し、津々奔馬の空中を走るが如く、滔々として懸河の蒼漢を下るが如し、瞬間にして衣袂悉く濕ひ、滴瀝淋漓たり。秀一走て先の密陰に至り、衣を絞て以て雨の霽るゝを待つ。須臾にして一女あり、遽急走て樹陰に憩はんとす、内人影あるを見、俄に入らず、樹邊を徘徊して爲す所を知らざるが如し。秀一見て之を憐み呼て曰く、阿孃内に入て急雨を避くるをなさず、何ぞ徒らに雨間に彷徨して衣裳の濕るを待つや。女乃ち走て内に入り一揖し、靜に答て曰く、妾之れを思はざるに非ずと雖も、瓜田に靴を入れ梨下に冠を正すは古人已に之を忌む、思ふに郎

君亦之を快しとせず、妾豈之を爲すに忍びんや、今幸にして貴言を食んで燒眉の急を救ふ、謝する所を知らずと。纖手紅裙を絞て共に雨の霽るるを竢つ。秀一竊かに其容を見れば、芳紀十六許、婉然たる花顏は微紅臉に潮して半酡の海棠の露を含て春恨に堪へざるが如く、綽約たる容姿瀟然として皓たる芙蓉の水面に出づるが如し、白肌全く雪を欺き、翠眉巧みに遠山の黛を畫き、貝を欺くの皓齒は冷艶珠を連ね、蕾を破るの紅唇は朱櫻將に滴らんとす、鳳鬢張れる所は秋蟬の翼をなし、明眸注ぐ所壓かに秋波を動かす、正に之れ春雨花を洗て新姿を添ゆるに非ざれば、博山淡烟を收めて明月を吐くに似たり。卽ち問て曰く、此地幽山蓮谷人跡稀なり、今何の故あつて玆に至るや、僕は素より游學の一書生、今卒然淑婉たる巫山の神女に幽溪深谷に邂逅す、誰か其高風逸趣を慕はざらんや、僕聞く、一樹の陰に憩ひ一河の流れを挹む者も亦多少の緣あつて然るなりと、阿孃願くは僕に語るに仙遊の故を以てせよ。女の曰く、郎君過賞の言、妾何ぞ當らん、妾先づ郎君に問はん、郎君は前羽錦城の士に非ざるなきや。秀一驚き答て曰く、然り、然りと雖も阿孃と僕とは一面の識なし、何を以てか之を知る。女亦驚き喜て曰く、果せる哉、妾も又郎君と同鄕、妾の之を知る所以のものは、先

づ郎君の言辭語氣能く鄉人に似たる有るを以て之を察する耳、妾、姓は相樂、名は梅史、幼にして孤なり、叔母、妾を養ふて塵に飢寒を免るを得たり、妾年十四のとき、熟〻今日社會百般の事業に於て女子を待遇するの狀況を觀るに、口頭は喋々として男女同權論を旨張するも、內實は却て之を壓抑し、以て社會の輿論に參するを得ず、以て獨立の權利を有するを得ず、偶〻才女の學を勉むるものあれば、世人は之を排して以て溫柔の女德を失するとなし、誹謗蝟集、之を嫌斥するや甚し、故に當今の如き、婦女一身の學藝は有益實理の學に非ずして却て朝粧暮飾の弊習に過ぎず、故に婦女にして天稟の才を有するも、涯生の快樂は徒らに男子の玩弄物に過ぎざるもの比々皆是れなり、嗟呼誰れか今世を以て開明の俗となすか、弊を矯めて正に赴くは卽ち當時我國人の主とする所に非ずや、獨り惟しむ、妾等婦女の一點に至ては徒らに理論に走るのみにして、少しも實行を務めず、恬として顧みざるもの皆然り、實に妾等の長嘆に堪へざる所なり、卽ち妾の志を以て之を叔母に告ぐ、叔母大に其志を贊し快く之を諾す、妾大に喜び乃ち斷然笈を負ひて墳墓の地を辭し、幸にして當地の娼家に妾の親族あるを以て此に遊學す殆んど三年、其目的とする所は他日業成り學卒ひて後社會に立ち、男

女の同權を實行して以て古來の弊風を破壞するに有るのみ、妾性多病、故に閑靜の地を好む、常に娼家の喧噪にして學をなすの地にあらざるを忌み、頃日選て其別莊に居るを得たり、暇あれば則ち山川を歷游して倦まず、今日亦秋山の翠を探て楓葉の紅を穿ち、吟行怡然、殆んど歸るを忘る、圖らざりき、驟雨妾を媒して郎君に此綠陰に會せんとは、妾廬々今一面の會に狎れて猥りに郎君を犯す、幸に唐突不敬の罪を咎むるなかれ。云ひ畢りて眼波一轉秀一の面に注ぐ。其言語の溫柔なる、黃鸝の花間に囀るが如し。秀一聞て感嘆止まず、竊かに以爲く先の吟聲は阿女のなす所にあらざるを得んや哉、予今世の女子を見るに、志操陋劣にして性情浮薄、猥行を以て雅粹と爲し、謹愼を目して鄙屈となす、彼の婉美、漢壽の如く、五陵の年少爭て枝を折らんとするもの概ね笑及人を殺し、賤行見るに忍びず、彼の妍麗、潘姬の如く、三都の子弟競ふて情を寄する者亦媚針心を奪ひ、毒舌腸を蕩するを免れず、今や淑艶彼れの如く、卓識彼れの如く、風韵彼れの如く、厚情彼れの如きもの、恐らくは滿天下に微して再び見るを得ざらんと、徐ろに愛慕の情を發し、三寸焦懷の彼に達せんことを願ふ而已。乃ち衣襟を正うして曰く、今面り阿孃の卓見才識を聞見し、實に感嘆の至りに堪へず、誠に我輩男子

の慚愧に堪へざる處なり、思はざりき、我鄕人にして阿孃の如き才人あらんとは、僕姓名を高木秀一と云ひ、此地に游學すること玆に三年、專ら商業の學に從事すと雖も、素より魯鈍の性、之を全學衆生に比すれば素より燕雀大鵬の群に入つて其飛翔を較するが如しと雖も、彼の蛙蟇一躍の簡を知て洵々の歩を踏まずんば、安ぞ九尺の堤を越ゆるを得ん、是を以て之を思へば、僕不才と雖も鞠躬勉勵して倦怠せずんば、安ぞ成業の期なき理あらんや、而れども今之を阿孃の才學に比すれば、天淵啻ならず、實に涎羨に堪へざるなり。梅史微笑して曰く、郎君何ぞ妾を弄するの甚だしきや、妾先きに仄に郎君の才學あるを聞く、妾今其眉宇に接し、愈〻其詐りならざるを知る、妾聞く、盛德の人は務めて蔽ふと雖も靄々たる容貌は孔だ昭かにして、決して蔽ふべからずと、之れ郎君今日の謂なり。と起て外を望めば密雲漠々として未だ開けずして濛々たる細雨猶ほ頻なり。梅史卽ち言を繼で曰く、妾妄りに閒言を吐露して貴聽を煩はす、幸に容せよ、抑も妾の故山を去る關山萬里、彼の越鳥尙南枝に巢ひ、胡馬亦北風に嘶く、禽獸尙且つ然り、安ぞ五感を具ふるの人にして悲まざる所有らん、是を以て妾片時も故國を想はざるなし、仰で皓月を孤窓に望めば、則ち雁信の遲きを怨みて望鄕の

淚雨の如く、俯して唧蟲を叢中に聞けば、則ち鯉音の絕ゆるを悲みて戀親の情愈〻切なり、況んや、深夜霜を飛ばして孤蟲訴へ、五更天高うして寒雁悲愴するの時に於てをや、何人か關外の旅客孤舍房中に蒲枕淚痕を印するの感なからん、何人か萬里の軍人征鞍馬上に鐵衣を絞るの思ひなからん、雖然妾は素天涯の離客、憂心固く結んで誰と共にか之を解かん、今幸ひにして郎君に遭遇す、希くは共に故園の情を訴へん。秀一憮然として曰く、人情豈生里を慕はざらん、然りと雖も之を語れば徒らに憂愁を增すのみ、僕幼より學に從事して未だ敎坊の俗を解せず、阿孃何ぞ其目擊する所を以て一寸の勞を厭はず僕の爲めに之を談ぜざる。梅史翻然として曰く、妾誤れり、三更の雁に非ずと雖も、猥りに喧[竝カ]て孤客の腸を斷つ、乞ふ赦せ、之れより敎坊の俗を語らん、郎君幸に言の鄙なると事の猥[褻カ]なるを咎むる勿れ。

一朶の櫻花瑤欄干に懸り、三臺の膽瓶翡翠簾を罩め、習々たる春風は徐に樓簾を拂ひ、裊裊たる彩煙は淡く門柳を染む、粧鏡蓋を覆ふて新粧の思を惹き、粉香樓榭に徧く、濃飾人目を眩す、時正に晡時、暮山騷雨を收めて新月中天にあり、媒亭の粉頭は招燈を提げて縱橫に往來し、滿街の遊人行影娑婆として旁午織るに似たり、是時に當て大小の娼閣、群芳妍を競

ひ百花美を爭ふ、美目嬋娟として青蛾麗を失ひ素女豔を羞づるが如きものは亞字の欄頭鶯歌を學び、玉顏綽約として綠珠を漢土に辱め楊妃を唐朝に笑ふが如きものは朱騰の長管芳烟を薰らし、桃や歌ひ、李や吟じ、爪彈鏗々、皆偏に客の至るを竢つ、之れ娼閣春日の趣なり。萬點の紅燈閃々として星の如く、千斛の涼風颯々として殘炎を拂ふ、湘簾高く掛けて水月光を布き、蘆屏低く圍みて婉曲湧くが如し、葡萄の美酒は瀲灩として綠將に溢れんとし、夜光の杯は縱橫献酬射るが如し、玉盆の珍味は易牙三舍を避け、霓裳の曲は神女何ぞ及ぶを得ん、翩躚たる舞踏は步々金蓮地に生じ、嚠喨たる端歌は語々嬌鳥春に媚ぶ、夜將に闌なる時は蟾影凜々として霜の如く、凉風衣襟を吹きて爽氣座に充ち、炎々たる午熱去て安くにか行く、之れ卽ち夏日の趣なり。曰く秋日は如何。斜陽已に沒すれば蘭燈席に有り、繡窓尙春を止めて微香時に薰じ、鳴絃鏘々として吟蟲底に和し、蓼々たる打鼓は餘音寂々として響なし、是時に當て新粧の美人蘭麝香を飛ばし、盛飾花を欺いて羅袖風に飄り、靜に丁鬟を呼で夜宴を催ふす、興方に闌なるとき、夜方に三更、癡雲月を漏して皓彩庭に滿ち、金風秋氣を拂て雁聲雲に應ふ、玆に於てか瑤欄に倚て微薰を驅り、纖柳面を拂て冷かならず、雍々として半夜

の景を領す、之れ秋夜の興なり。曰く冬日は如何。朔風凜々として删雲雪を釀し、片々たる玉塵は霏々として檐角を撲ち、寒梅の香と共に衣袂を襲ふ、地は以て萬里の布を布き、天は以て千重の花を生ず、滿目皚々として銀臺空に聳え、四望皓々として珠簾檐に懸る、時正に薄暮、寒月影模糊として錦窓梅影を印し、雪聲簌々片々光あり、是時に當て蘭燈を輝かし赤彩香房に滿つ、暖爐漸く花を生じて其前にあり、厚絨暖かに身を包て其後にあり、淑艶の美人互に意を向ひて之を繞る、殘杯漸く乾きて萬籟寂々たるの時、天花の歷亂を目前に望みて霜月の皓輝を背後に望み、俯仰觀望、殆んど凍寒の苦を知らず、之れ卽ち冬日の影なりと。說き畢て怏々として樂まざるが如し。秀一惟て問ふて曰く、阿孃說く所皆快樂僊逸の談、僕を して覺えず巫山の雲夢を想考せしむ、然るに阿孃何が故に悲愁なるや。梅史悄然として嘆じて曰く、郎君何ぞ娼の樂しむべきを知つて娼の悲しむべきを察せざる、抑も人生の最樂は双親の膝下に奉侍し、其兄弟姉妹と相偕語するの樂しきより樂しきはなし、娼は乃ち然らず、僅々たる蜻片の爲めに縛せられて敎坊に沈淪し、富有士人の拔き去るに非ざるよりは、再び慈親

の顔を拜するを得ず、再び兄弟姉妹と一家團欒の快をなす能はず、加之(しかのみならず)荷も登樓の客にあへば、嫌好是非に論なく虛擊假笑以て之が意を迎ふるを務めざるべからず、故に朝愁暮悲、其苦艱勝(たへ)へざるの時に當ては、寧ろ死せんと欲するも死する能はざるなり、遂に其顏色悄悴(憔悴カ)して形容枯槁し、斑々たる霜雪頭(かしら)に掛るの時にあらずんば妓籍を脫するを得ず、此時や疲皺膚(はだへ)にあり、斷藻蓬々又配遇の歡を買ふ能はず、遂に百年の身を誤(過ニカ)るもの皆然り、且又敎坊の俗たる、輕薄賤陋なるが故に貞淑の婦女も一度び其流(ながれ)に染めば惡性漸く侵し、遂に其本質を失ひ、往々醜聞を響かす、是を以て狡獪男子は婦女を以て鐵腸を蕩銷するの鴆毒となし、偏に其賤行薄情を摘て以て女子の素性となし、而して未だ同權を女子に授くる能はずとなす、之れ一を知て二を知らざるもの、豈妾等婦女の本色ならん、妾實に大息に堪へざるなり、嘘呼、無量の辛酸を嘗(なめ)て泥流に沈淪せるも娼婦なり、賤しむべき賤行を呈して婦女の品位を低うする者も亦娼婦なり、悲嘆交々(こもごも)妾の心を衝く、妾之を以て悲泣するのみと。云ひ畢て涙潸々(潸然カ)たり。秀一感嘆措く能はず、襟を正うし、袂を直うして曰く、僕先きに貴談を聞きしや、神飛び魂舞ひて其最樂鄕なるを知りしに、豈圖らんや、阿孃の卓見、僕の意表に出て、始めて其

最苦鄕なるを知らんとは、僕實に慚愧に堪へざるなり。梅史謝して曰く、談偶々(たまたま)憂愁のことに至りて郎君の慰游を妨ぐ、乞ふ海容を賜へと。容姿漸く和(やはら)ぎ、進て秀一に接して曰く、今妾の少しも胸中に滯凝せずして肝膽を一面の郎君に吐露するものは、郎君の才智情義は妾が後來を託すべきを知ればなり、願くは郎君、妾の微衷を憐察せよ。言纖がんと欲して纖ぐ能はず、嬌臉微紅を潮し、紅膩滴らんとす。暫くにして言を繼て曰く、妾、世の男子が女子を評するを聞くに、女子喋々多辭にして口頭千萬言あるも腹中一の眞情無しと、郎君是等の妄辭を以て妾を待する勿くんば幸甚と。秀一低辭答て曰く、僕一度び阿孃に面してより深く阿孃が容色の衆に離れて婉美なると(此ノ所、字アルカ)に昏戀し、只一片心の阿孃に達せんことを願ふと雖も、阿孃の如きは素より水中の皓月、鏡裏の麗花、巫山道隔(へだ)りて望むに由なく、楚岫天高うして到るに便なし、此故に默々未だ言はず、然るに阿孃幸ひに僕を棄てず、僕豈之を顧みざらんや、且つ阿孃言ふ處のもの、皆眞心の漏發する所、安(いづくん)ぞ市井(しせい)の妄言を以て輕々視すべけんや、唯恐る、僕の不才なる、阿孃が萬片の顧みをして畫餅に屬せしめんこと、之れ僕の憂ふる所なりと。玆に於てか靄然たる意氣相投合して、才子佳人の喜びは喩ふるに物なかるべし。

嗚呼、驟雨才子佳人を槐陰に媒し、合歡の扇は忽ち二人の間にあり、然りと雖も假ひ其交情は色欲より起るに非ずして才學の戀慕に成るものにもせよ、眞正の快樂を受くる時に非ざるの時に於てする快樂は、豈其れ久しきを得んや、況んや秀一梅史は共に學生なるに於てをや。抑も何をか快樂を受くべき時とするか、業成り學卒て後自己の志望を滿遂し、自己の社會に於て擔當すべき業務に於て一日も閒然する所なきを云ふのみ、讀者後文を讀て二人世路運轉の如何に注目せよ。

既にして雨收り霧散じ、累雲碧天を漏して叙陽西山の巔にあり、山影深く沈みて林陰已に暗く、晩靄一抹、遠近糢糊たり。梅史乃ち秀一に言ひて曰く、快日已に傾くと雖も、怡陽再びせざらんや、妾が今日の一時は平時の百年に直ると云ふも敢て過言に非ざる可し、今や夕日西に傾き、幽山綠深くして傍ら他人の在らざるも、若し夫れ楊子が四知の言にして果して此處を誣ゆるあらずんば、必ずや他日江湖の舌頭に罹り、妾をして郎君身上幾分の名譽を妾が爲めに害せらるゝの悲愁を見せしむるや免るべからざるなり。秀一曰く、實に阿孃の言の如し、嗚呼今日何の日ぞや、百年の知己は古人も其得難きを嘆ずる所、然るに今や天涯相遭て

一面舊識同胞の如し、僕が胸中の欣びは實に云ふべからず。梅史曰く、然れども都門の地、美目嬋娟、秋波千里、郎君或は其香を愛し其色に溺れ、又妾が今日を忘却するあらんこと、是れ妾が心痛なり。秀一笑て曰く、阿孃憂ふるを止めよ、僕豈輕薄都人士が金幣盡くれば胡越の如く、美色衰ふれば又之を顧みざるが如きの徒ならん、羞羊孕て江流逆流するも今日の交情は決して忘る可らざるなり。梅史欣然として相共に歸路につく。綠葉螢を浮べて蟲聲耳に徹し、斷霞空に映じて牧笛遙かに響く。東鬱溪邊忽ち一簇の茂林、堊屋を隱見するを認む。梅史指示して曰く、之れ卽ち妾が僑居なり、若し郎君今夕要用のある無くんば、願くは光臨を賜ふて以て妾をして綠陰の餘談を全うするを得せしめよ。秀一頭を掉りて曰く、僕之れを願はざるに非ずと雖も、顧みて學室の繁きを考ふれば、好で久滯するに忍びざるなり、當に他日閑あらば行て鴻誨を受くべきのみ。乃ち相辭して兩方に去る。此日同心を結ぶの後、二人相思の情纏綿として山高く水長し。暇あらば則ち彼の南山の游散に託して吟杖忽ち雲雨の會を巫山の臺に結び、閑を偸みては則ち言を北江の漁釣に寄せて釣竿直ちに牛織の蓬を蔵峽の上に暖め、須臾も相忘ること無し。意馬已に繫を離れて有頂天外に去る、心猿安ぞ縛を切

つて黄粱夢中に狂はざらん。之より秀一情緒甚だ切にして、自ら其課業を疎じ、校事を無視するの心有ることは隱に其動作に顯はれたり。秀一の親友秀山耿吉なるものあり、深く之を恠み、竊かに其行爲に注目すと雖も、秀一は少しも之を覺らず、心事愈〻亂れて、意中の人は常に其目にあり。

皓々たる寒月弦を張りて、絶えて癡雲の遮るなく、梧葉撩亂、地を拂て跫然音有り。金風颯颯、草葉の露を散し、珠玉粲として空に躍り、鴻雁霜に叫びて唧蟲叢中に吟ず、凛然たる秋氣は蕭殺の氣を呈して風物凄緊たり、方に之れ蜀鳥血に啼きて憂愁萬里、孤客鄉を慕て征人鐵衣を絞るの時なり。是時に當て相樂梅史は獨り殘燈の下に書を閲し、蕭々たる秋聲を溪林の間に聞き、研々たる猿叫を山谷の邊に聞き、頻りに孤愁を悲しみ遠鄉を慕ふの際、何者か莊門を敲くの音丁々たり。梅史恠み以爲く、夜已に初更、萬籟沈みて山川寂莫の時なるに、我門を叩くものは孤獨の女と侮て劫掠するの盜賊に非ずんば、必ず人を獵かすの狐狸なるべしと。乃ち窓を開て呼て曰く、深夜妾を訪ふものは何人ぞ、其名を聞かん。聲あり、應じて曰く、阿孃怪しむを止めよ、僕は高木秀一なり。梅史驚き走て其手を握て曰く、妾妾りに疑ひて郎君を拒む、幸に容せよ。即ち内に請じ、座定り問て曰く、郎君深夜を犯して光臨す、必ず故あらん、請ふ速かに之を語れと。秀一默して云はず、其（此ノ所、字アルカ）悄然苦慮する所あるが如し。梅史恠み之を問ふ再三、秀一紙片を懷に執り、其前に投じて曰く、我思ふ所は寫して之にありと、愀々として面を低れて曰はず。梅史愈〻恠み、急に開て之を見れば其書に曰く、

榮枯得喪は人生の常、樂極まれば苦生じ、苦極まれば樂をなす、恰も海潮進退するが如し、嗚呼三千の帝愛萃りて其の身に有り、旦宴暮會、寵を九重に專らにするのとき、褒姒安ぞ驪山の暴戾三魂を飛して北邙一片の煙となるを知らんや。先に鳳山の驟雨、僕を媒して阿孃と月下の交りをなすも、顧みて考ふれば、未滿の樂に止て充分の苦を務むはこれ即ち樂をなす所以にして所謂久榮の道なり、僕や一介の貧書生、情炎盛なれば隨て利水功をなさず、怠情從て起り、懶性依て發す、所謂樂究て苦を生ずる者なり、阿孃も初春の花、貞實を僕の如き貧生に輸さずして、賢夫を迎て以て一生を託するは之れ其得策ならずや、願くは阿孃、去時を以て黄粱一睡となし、再び僕を以て意となす勿れ、離情言此の如き耳、多く囑せず、高木秀一拜

梅史一字一驚、全讀に堪へず、紅涙潸々として雨の如く、走て秀一の膝に接着し、悲嘆將に云ふ所あらんとす。忽然として泣音耳に徹し、醒め來れば是れなん無何有鄉一場の夢にして、身は尙ほ淨几の邊にあり、殘燈火を結て蛾影窓にあり、只一陣の朔風、枯葉を飛ばすの聲を聞く耳。梅史心驚き胸悸れ、爲す所を知らず、嘆じて曰く、惜しむらくは吾先に夢と知らば早く醒めて以て我苦境を免れんものをと。終夜睡る能はず、以爲く夢は心慮の花、以て信を措くに足らずと雖も、或は男子の心情變じ易きの鄙言、秀郎今日の心事を裁して、而して我夢裏に感ずるや圖るべからず、果して然らば苟も天地に誓ひし槐陰の盟は何に依て一睡の夢と諦視するを得んやと。心更に安からず、眞心亂錯して五里霧中に徘徊するが如し。忽ちにして鐘聲一杵耳を叩けば、宿鴉聲喧しく、窓際曦光を漏らして室内漸く明かなり。梅史起て戸外を望めば、朝霧全く晴れて紅楓影裏塒を出るの烏雀噪がしく、清露野草を潤ふして翠松村外圃を出るの牛羊相續ぐ。偶〻孤雁一鳴南に去る。梅史覺えず呼て曰く、天鳥意あらば我が爲めに心中の憂を郎君に告げよ。言未だ畢らず、斷煙影を遮つて之く所を知らず。

却説す、是より先き、高木秀一は同學の親友秀山、松村の諸氏と一會を設け、毎週日曜を

以て校内に會し、已習の學科を質問討議す、名けて質疑會と云ふ、今日も又日曜なるを以て早朝會に赴かんとす。時に郵丁一翰を投じ去る、秀一執て之を見れば、相樂梅史の寄する所、遽かに緘を切て讀一讀すれば、其文に曰く、

劉顏に接せざる殆ど半週時、之れ初秋憂多きのとき、貴體恙なきや否や、妾槐陰の盟後日として君を思はざるはなく、夜として君を懷はざるなし、憂々たる雁聲を初更寂莫たるときに聞けば、則ち郎君好意の諸音かと疑ひ、蕭然たる荻花を後圃の籬間に眺むれば、則ち郎君起居の如何を想ひ、風饕雨餐も亦郎君の聲かと訝かる、然るに今回、妾の心をして疑心暗鬼を生ぜしめ、憂緒百出收むるに由なく、轉た妾の心をして安からざるしめざるの者あり、之れ他にあらず、卽ち昨夜の寒閨夢裏、郎君自ら來りて妾を離別せんとするの一事なり、夢想のこと素より虛無にして信ずるに足らずと雖も、若しそれ惡夢讖をなし、果して朔風颯として交蝶の花を散らし、愁雲漠として中秋の月を掩ふのことあらば、妾が百年の身は又何くにか措かん、萬一都門の花、閭巷の香、別に郎君の愛を專らにするものありて、妾をして歡會永くし難く、勝事磨し易きの感を見せしむるもののあ

らば、妾が五尺の體は又何くにか安んぜん、之れ妾の危心に堪へざる所なり、若し誠に此の如きことあらば、妾が薄命の身は寧ろ貞魂一結、望夫の石とならん、嗚呼希くは郎君、妾の心事を察し一片の芳樹を賜ふて妾の心を安からしめよ。梅恭惶三拜

秀一見畢りて獨笑して曰く、阿孃才學ありと雖も未だ婦女子が妄りに虛夢を信ずるの弊習を免れず、然れども之れ阿孃予を懷ふの切なるに非ざるよりは、安ぞ能く玆に至らんや、今日退會の後を待て當さに彼の寓を訪ひ、一は以て阿孃の疑心を解き、一は以て[illegible]詢の情を訪ふべしと。更に數回其翰を翻讀し、欣然たる容貞眉宇に溢る、蓋し其文の瀟麗なると、其情の懇篤なるとに感ぜしなるべし。是時跫音耳にあり、秀一の寓に向て來るあるが如し。秀一急に其翰を疊み、未だ卒るに及ばず房障已に開く、秀一急に書翰を懷にし、之を見れば同鄕の親友秀山耿吉なり。耿吉一禮座に就て曰く、我輩會席を設け久しく君の至るを待つと雖も時間は人を待たず、將に九點ならんとす、君何ぞ早く來會せざると。見來れば秀一の容貌平生に異るが如く、屢〻襟を萃めて其狀極めて躊躇。耿吉惟み問て曰く、今日君の容貌は君が平生の沈靜に似ず、何ぞそれ斯の如くなるや。秀一其疑はれんことを恐れ、故らに笑て曰く、

何物か僕をして君の疑をなさしむるか僕自ら知らざるなりと。依て甚遲刻を謝し、竊かに書翰を机筐に投じ、直ちに會に赴く。耿吉起て其後に繼ぎ、忽ち一翰袋の座偶にあるを見る、執て之を見れば其投翰者は相樂梅史なり、其筆や極めて男跡を摸すと雖も婉曲の女風は覆ふべからず。耿吉愕然、覺えず聲を發して曰く、咄、奸木遂に蠹せらると、何か思ふ所ありしか、急に之を懷にし、秀一と共に校に赴く。抑も秀山耿吉は年齢十八許り、秀一と同鄕にして、二人幼より竹馬の友たり、其遊學するに當てや、出ては則ち笻を同うし、入りては乃ち窓を等うし、交情の親密なること膠漆の如く、實に管鮑雷陳も啻ならざるなり。且つ其性質亦老實にして、秀一の如く天才あるに非ずと雖も、心志の周密なることは遙に之れに優れり、過擧あれば互に之を匡救し、事業は互に之を助く、其際少しも隔意なし、頃日秀一の容貌隱然として思ふ所あるが如く、萬事疎懶にして日常に異るを怪み、暗に其行爲に注目すと雖も未だ其因る所を得ず、彼の翰袋を得てより疑念初めて氷けたりと雖も、深く之を憂ひ、以爲く、今にして救はずして病肺腑に徹し、又動かし難きの時に至らば之を如何せん、彼の草木、之を苗時に斷たずんば遂に斧を用ゆるの憂あり、如かず、明かに忠告して其害を初萌

に拒がんにはと。竊かに計畫する所あり。

只見る高堂巍峨として雲表に聳へ、大旗片々として蒼空に飄へる。石門高さ一丈、白堊戸を塗り、皚然として暾日に映じ、硝窓羅列し、井然として亂れず、鐵柵之れを繞て界をなし、坦石之れに敷て砥の如し、前門榜して商業學校の四大字を畫す。忽ち認む、層樓堂上十數の學生、清几に倚て端坐し、一個の少年高壇に立ちたるを。是時少年明瞭なる音聲を發して衆生に向て曰く、本會の議事已に終りたるの時に際して、僕が諸君に請ひ、是高壇を瀆したる所以のものは他に非ず、聊か諸君に對して自他の注意を要することを欲すればなり。是時咳一咳して言を改め凜然として曰く、抑〻學問の主旨とする所は果して何等の點にある歟、他日社會に立ちて既習の學を實行し、大は以て國家を富まして國民を薫陶し、以て文明の域に進ましめ、小は以て一身の榮譽を求めて涯生の安樂を得、芳名を青史に傳へんと欲するに外ならざるべし、之を以て之を見れば、我輩學生の社會に於ける擔當も亦輕少に非ざるなり、是故に苟も學生たるものは奮痒勉勵一身を學の犧牲に供して之が目的を達せざるべからず、之が成業を期せざるべからず、獨り惟しむ、全國の學生は幾百萬の多くして其志す所は悉く皆

其點に萃るにも關らず、其成業を全うして實益を社會に顯はしたるものは蓋〻屈指の數にして、寥々曉天の星の如きものは之れ何等の理由の存するあつて然るか、之れ概ね他物の之を妨碍して其志を中途に挫き、其目的を半道に屈せしむるによる。彼の天稟の才子にして美人に惑溺して學術を半途に放棄するが如きものは、我輩が日常之を新聞紙上に見る所なり、嗚呼斯の如きものは、既往の苦學と他年の構志は徒らに一片の畫餅に過ぎず、啻に一片の畫餅に過ぎざるのみならず、貴ぶべき幾何の資金と重んずべき若干の時日は空しく去て何くにか行く、實に慨嘆に勝へざるなり、此故に我輩學生は宜く其志を確立し、其見る所を學の一方に注ぎ、以て豫め他物の刺衝を防がざるべからざるなり、余の諸君に告ぐるの要旨は實に此數言に過ぎず、願くは諸君、我鄙言を以て閑談逸話と一般視する勿れ。と演べ終つて徐に壇を下て席に就く、衆生喝采止まず、拍手の聲止まざること久し。之れ抑も如何なる會場ぞ。之れは耿吉の演說を聞き竊かに以爲く、彼の云ひし所のものは語々皆我が今日に適中せり。之れ恐くは彼の祕事千里を走るの喩に漏れず、夙に江湖の唇頭に懸りて耿吉之を諷諫せしに非ざ

る乎、否々二人の交情は膠密にして絶て他人の覺るに由なし、安ぞ耿吉の之を知るの故あらん、所謂疑心暗鬼を生ずるもの、何ぞ意と爲すに足らんやと。流石の才子も心事亂れて覺悟することなく、少しも意に介せざりき。

中秋月あるも光なきは浮雲之を掩へばなり、初春梅あるも香なきは霜雪之を壓すればなり、然れども之を掩ひ之を壓するは豈其れ久しからん、若し夫れ朔風習々碧天を漏せば、蟾影皚として鮮光萬里に徹して漸く騷客の恨みを解き、暖靄一抹、東帝駕を廻らせば、仙姿婉として芳香衣袂を襲ふて永く人の思ひを惹く、然り而して其の雲未だ開けず霜未だ解けざるの日に當てや、天外萬里孤雁雲に迷ふて空しく孤客の腸を斷ち、地上千日黄鳥據を失ふて徒らに恨人の怨みを結ぶ。却説す、高木秀一は天稟の秀才あるも一度佳人に接してより明眸眩ふして知覺鈍く、膽瓶を机上に見れば意中の人は宛として其間にあり、明鏡を柱頭に仰げば焦思の的は恍として其中にあり、況んや微妙の音は常に其耳に止まり、婉麗の容は其目にあるに於てをや。此日會〻書を得て梅史の疑を氷かんと欲し、會を終へて直ちに鳳山の莊を訪ふ、時已に薄暮、反照已に收まりて斷煙水に沈み、山影深くして楓林黑し。溪邊の釣老は竿を負

て去り、野外の村童は犢に跨りて歸る。山や蒼にして紅に、水や綠にして清く、眺望實に明媚なり。秀一停り嘆美して曰く、美なる哉山河の景、之れ實に塵外の境なりと。吟步雍々、漸くにして莊門に達すれば、白萩門を埋めて落葉庭を沒し、喔々の鶏聲は恰も不在を告ぐるものの如く、内唯〻農夫索綯するの聲籤々として外に聞ゆ。秀一之を訝かり、入らんと欲して入らず、呻吟躊躇する之を暫くす。偶〻老農戸を開きて外に出て西方を仰で曰く、斜陽已に沈めり、阿娘已に坂驛に達せしなるべしと。身を背け弓腰を伸ばして曰く、嗟々留守の勞は實に退屈にあり、今や日正に暮れんとす、當に後園を探て菜汁を作るべしと、小鍬を肩に負ひて後に去る。秀一愈〻訝かり、試みに低聲梅史を叫べば絶て應ずるもの無し。秀一驚怪以爲く彼の農夫が所謂阿娘なるものは我訪ふ所の阿孃に非ざるなき乎、且つ阿孃平素の學室窓暗くして絶て應答するなし、顧に止むを得ざるの事故ありて此地を去りしならん、果して然らんには豈一片雁信を予れに傳へざるの理あらん哉、或は一片の好味を與へて我心を繫ぎ、先に送りし翰中の阿孃は却て我れにして、我は却て阿孃ならざるを知らん哉。暫くにして以へらく、否々阿孃は貞淑の女史、安ぞ斯の如きの所爲あらん、必ずや事急卒に出て言信に遑無か

りしなるべしと。獨り頻りに點頭し、悄然として歸途に就く。時、新月株(綱)にあり百蟲野に徧ねく、金風蕭颯として其憂を扶くるものの如し。之れより日夕鬱々として樂まず、固結せる心憂は誰と共にか之を解かん。沈々たる深夜、狐叫を後野に聞けば、佳人音信の達せざるを悲しみ、靄々たる朝旦香枕を衾上に撫せば、阿孃の動靜の如何を憂ひ、新月の纖々たる、楓葉の粲々たるも、啻に憂鬱を散ずるに足らざるのみならず、却て悲愁の媒となり、校務課業は徒らに外面を裝飾するに過ぎず。

炎々たる火焰は勢ひ能く家屋を蕩盡すと雖も、其初め閔々明滅(閃せ)の時に當て一掬の水之(これ)に加ふれば亦能く之を消するに足る、故に害は凡(すで)て初萌に拒ぐべし、然らずんば安(いづくん)ぞ早晩死魚を沽市に悲しみ、豚肉を俎上に悼むの悔を免れんや、啻に後悔を免れざるのみならず、世人爲めに百年の身を一睡の夢に誤(過)り、猥りに人事の輒刺を嘆ずるもの比々皆然り、豈深く愼まざる可けん哉。彼の高木秀一は一度び佳人に別れてより、掌中の寶玉を失ひし如く、心怏々として樂まず、暗燈机上徒らに孤影を悲しむの際、房外呼ぶあり、曰く、高木君在宿か。秀一聲に應じて出迎すれば、親友秀山耿吉なり。坐定まり、問ふて曰く、夜已(すで)に闌(たけなは)なり、何の

用あつて光臨せるや。耿吉笑て曰く、僕徒(とぜん)然に堪へず、偶然數總の好葡萄を得、君と之を頒たんと欲し、故(ことさら)に夜を犯して來るのみと、卽ち之を懷(ふところ)に取て秀一の前に出す。秀一謝して曰く、兄の好意は實に千金の賚(たまもの)なりと。之を見れば一片の翰袋なり、心惟み執りて之を諦(緯)視すれば、豈圖らんや、先に相樂梅史の自己に寄せし所のものなり。秀一大に愕(おどろ)き、躊躇爲す所を知らず、滿面紅(くれなゐ)を潮し、首を俛(た)れて語らず。耿吉、膝を進め、從容として曰く、僕の來れるは全く之が爲めのみ、君乞ふ、僕の一言を聞け、抑も我曹の千里を遠しとせず、斷然墳墓の地を辭して天涯の他鄕に游學し、刻苦碎勵少しも厭はざるものは何の爲めぞ、各自其志す所の學科を卒業し、後(のち)社會の業務を執り、大は以て國家の公益を計り、小は以て一身の芳名を青史に傳へんが爲めならずや、然るに君の才學を以て車螢孫雪の勉勵を務めずして、却て放逸者(士)會の流を挹(く)むは果して何事ぞ、薔薇人(ひと)を傷(うず)け、美人人を蕩(たとか)すの諺は、君が常に誦誡する所に非ずや、假(たとひ)令賢貞の婦女にして、其目的とする所は色慾に非ざるも、一度び合歡の親(しん)有れば、早晩互に耽溺し、又當初の心無き者、古今滔々然らざるはなし、僕聞く、亞片(あへん)を喫するもの、其初め一睡の興に過ぎざれども、一度び其香に觸るもの、停めんと欲して停むる

能はず、頻々遂に自ら一身の亡滅を知らずと、美女亦如是のみ、且夫れ煙花の浮評、誤て江湖の唇頭に罹らば、啻に君の名譽を害する而已ならず、一校の恥辱ならずや、君の聰明にして何ぞ玆に注目せざる、嗟呼在鄕父兄の粒々辛苦して學資を君に送るものは、徒らに君の遊樂を匡くるものに非ざるなり、空しく君の意情を勸むる爲めに非ざるなり、必ずや他日錦衣を衣、駟馬に策て以て故山に歸り、父母の名を江湖に流さんことを願へばなり、故に之が子弟たるもの、空しく其志を體し、鞠躬勉勵以て之に報ゆべし、豈是れを以て優遊歡樂の閒に徒費して可ならん乎、先時會場の演舌も之を諷諫せしに他ならず、古語にも言はずや、賢者の行ひにも過失なきを保せず、愚人の言全く棄つべけんや、願くは君、僕の言を納れ、斷然游樂を禁じて學課に從事せよ、言語唐突、不遜の罪素より甘んずる所なりと、言ひ終つて暗涙瞼に充ち、益友の眞情此時に顯はる。秀一大夢轄然、語々肝に銘徹し、心裏大に之を悔ゆと雖も、尙慚て言はず、唯〻心中竊かに其厚誼を拜謝するのみ。耿吉之れを悟り、其背を撫して曰く、孔丘曰はずや、過を改むるに憚る勿れ、君何を慚てか語らざる、既往の過何ぞ咎むるに足らんや。秀一此一言を聞くや、座かに頭を揚げて滿眼涙を張らし、長嘆して曰く、嗟乎我

れ兄の金言徹つせば、卽ち長く不義不孝の人となりて遂に百年の身を誤らんとす、今にして長夢始めて諦覺し、慚愧交〻至りて實に君に對する面目無し、僕請ふ、爾來斷然婦人の情を絕ち、奮發勉勵誓て君の厚誼に報ひんと欲す、願くは君之れを他人に漏らす勿れ。耿吉喜びて曰く、君、僕が不遜の語を納れて先過を改む、自他の幸福何ぞ之に過ぎん、僕亦不肖と雖も一個の丈夫なり、親友の過擧放言して何にかなさん、乞ふ君配慮する勿れ。秀一心座かに安んじ、一慚一悔互に至りて暫く言はず。漸く談緒を改めて曰く、君此翫袋何くより得しか、僕少しも其損失に意を注がざりき。耿吉微笑して曰く、前週の會日、君の遲參を迎へしとき、圖らず君の座右に發見し、初めて君の佳人に交情を知り、同時に君が近狀の疎懶なる源因を覺知するを得たり。秀一之を執り扯裂して誓て曰く、僕が心は斯の如し。耿吉欣然として曰く、君幸に僕が深夜の訪を空うせず、僕が望已に足りぬと。依りて辭して歸らんとす。秀一急に止めて呼て曰く、貴兄葡萄の賜は僕謹で之を受く、僕亦兄に送るに我莊月夜の影を以てせんと。立て窓を開けば、蟋蟀高く梧桐の柯にあり、四望皓然、宛として白晝を欺く。霜輝凜然、氷の如く、株影婆娑として皓彩庭に充つ、籬傍の菊花は枝々露を帶びて葉々光を放ち

階邊の「秋菊」は花々地に垂れて幹々珠を躍らす、風は檐露を散して飛螢空に滿ち、夏夜の凉味以て摸すべく、月は門廂を白うして散蓼之を罩め、冬日の景勝以て擬すべし。秀一曰く、萬籟沈んで四隣定まり、又紅塵の身邊に迫るなし、深夜の影亦一僊趣ならずやと。卽ち耿吉を誘て共に庭中に散歩す。老松七八、蔚蒼影暗く濃陰蟾影を漏さず、碧水縈紆之れを繞つて流れ、銀光瀲灩清姿掬すべし、鬱陰深き處、冷樹露を絞りて湛々衣を潤ふし、纖草細かなる處、蟲聲音朗らかにして琤々耳を滌ふ。秀一曰く、今宵清閑の趣は、實に汲々として名利を都門に爭ふの士の知る處に非ざるなり。會〻梧葉風に散り、耿吉の面を拂つて去る。耿吉慨然として曰く、嗟呼、人生は斯の如きのみ、三伏の候、桐柯密に繁りて六月尙寒きの時に當て、誰か秋風黃葉を洒落して梧幹骨を顯はすを知らん哉、朝に金殿玉宇に壁鳥の威を擅にし、夕に鐵窓孤囚の下に繫累の身となり、昨夜香閨裏に巫山の夢を結て今朝秦淮河畔に枯骨を洒すも圖るべからず、之を思へば今夜君と玆に會するも、終天の樂は再びせず翌日草頭の露と共に容華空しく消えて東岱丘上一片の煙に化するや知るべからざるなり、誠に人事は黃粱の夢、古人遂に我を欺かず、と。長嘆之を久うす。秀一其手を撫して曰く、實に兄が言の如し、人間萬事

塞王の馬、試に四時の變更を見れば、春花香未だ散ぜず、鵑聲半夜に叫びて夏炎忽ち至る、倏ちにして秋、忽ちにして冬、循環極りなし、人事亦之に異らず、嗟呼何人か僕が今宵の樂みは却て君が他日の歡に背かざるを保せんやと。愀然互に言なきもの之を暫くす、時に陰雲月を掩ひて孤雁腸を斷ち、星落ち鐘遠く、夜正に五更ならんとす。

孔丘曰く、人に爭友有れば無道と雖も其身を失はずと、宜なる哉。是より秀一は深く前日の過を悔ひ、頻に其學科を勉勵して怠ることなし。然れども三更の月、孤窓の雁、時々物に觸るれば人情の停む能はざる所、彼の佳人を顧考して情炎時に燃えざるにしも非ずと雖も、親友の忠言は能く之を抑制して之を未發に拒ぐことを得たり。後數日、郵翰秀一の下に達す。秀一之を見れば、相樂梅史の送る所、其居所は故山鳳城なり。欣然之を開かんとす、忽ち翻然として以爲く、耿兄の戒むる所は此にあり、三寸封斷てば萬事止むと。卽ち地上に投じて曰く、阿嬢又言ふ勿れ、男子の言は矢の如しと。口頭嚴律に放言するが如きも、心裏煩悶、竊かに思ふに、彼れの辭せずして此地を去るは吾れ其止むを得ざる事故の故鄉に出來せしに出づるを知ると雖も、然れども彼れ、我が交情を絕つは一身の利害の存するあつて然る

を知らずして、偏に我を以て轉情男子となして深く我を怨恨するは鏡中の物を見るが如し、我れ今彼れと絶たざらんと欲せば親友の誓に背き、友義を全うせんと欲せば卽ち彼れと絶たざるを得ず、我進退殆ど究すと。又手之を久うす。暫くにして長嘆して曰く、嗚呼槐陰百歲の盟は重しと雖も、涯生の浮沈を顧みずして之を全うするの得失は智者を待つて後知るを要せざるなり、假令此を破つて彼を全うするも、終身の友義は茲に絶え、百年の榮譽は何くにか行く、之れ耿兄の切に忠戒せし所、利害得失此一舉にあり、我れ寧ろ無情の人となるも決して不義の的たらず、且つ夫れ悠々たる將來豈何れの日か我が懷を彼に達するの時なからん、然り然りと斷定し、涙を揮て此を郵還し、以て離情を示す。會〻房後の障を開き來れる人あり、秀一驚て之を見れば、親友秀山、松山の二人なり。秀一急に容を改め釋然として曰く、僕學室漸く閑にして獨座無聊、寳に徒然に苦しむ、幸にして二君光臨す、願くは共に鬱結の情を解かん。耿吉曰く、秋日憂愁の候、誰か君と感を同うせざらん、今や錦雲四山を抹し、彩煙河水を罩め、楓葉色渥丹の如く、野外の景宛然掬すべし、君何ぞ彼の新山に遊て以て積鬱を散ぜざる、僕請ふ從はん。節 其言を繼て曰く、來週月曜は大祭に當る、僕亦同伴して秀

山麗水を探り以て浩然の氣を養はん。秀一欣然として曰く、之れ僕素より願ふ所なりと。三友一決、議定まる。時斜陽窓を照して群鳥聲喧しく、柱鐘將に六點ならんとす。二人乃ち倉皇期を約して去る。

既に期日に至れば秀一輕裝杖を挈て二人を伴ふて共に新山に遊ぶ、三屐相答て其麓に到れば、日已に下午、雲村煙林は遠く有無の間に隱在し、禾丘茅家は近く田圃の中に散見す、縹緲たる遠山は黛翠睡るが如く連々雲に接し、蔚然たる近峰は蒼紅相交りて兀々天を衝く。三生互に其景を評し、吟步雍々漫々として山頂に上る、密々たる楓株樵路を塞ぎて蒼松之を彌縫し、陽光影なく、萬籟寂として聲無し、金風時に之を吹けば、宛として金片を篩ふが如く紅雲を漲らすが如し、磊々たる惟巖は其間に磅礴し、鹿氣隔絶、清勝掬すべし。三生一步一喝柏鼓して進み、已に山頂に至れば眼界豁如として千里澄澈、水の清なる、山の秀なる、翛然として皆一眸に萃まる、其景、淑絶云ふべからず。耿吉卽ち二人に言て曰く、我曹先に崎嶇の勞を壓して進まずんば、安ぞ此快樂を得ん、學亦然り、螢光の辛を嘗め窓雪の苦を踐みて後始めて成業の果を得るなり、若しそれ中道にして棄廢せば已修の學は啻に無益に屬するの

みならず、幾何の光陰と若干の時日の畫餅に如かざるを奈何ん、之を以て之を思へば、彼の勇耐敢忍にして萬挫不屈の氣あるも、不幸にして天其命を假さず、容華空しく北邱の煙となり、有爲の才を懷き徒らに地下の客となり、遂に其結果をして放逸者流の其學を厭棄するものと一般ならしむるは實に悲しむ可く且つ憐れむべきに非ずや。節曰く、誠に然り、萬一僕をして耿兄言中の人の如くならしめば、僕自ら他日錦衣を故鄉に輝かし、駟馬を生里に走らしむるの體軀にして、空しく苔塔墓下の枯骨となるを悲まずんばあらざるなり、實に健康は萬福の母、苟も健康を維持せずんば百年の榮華は誰と共にか樂まん、千歲の芳名は去て何くにか行く、之れ實に今日の遊ある所以に非ずや。秀一笑て曰く、優遊の日悲愴の談を爲す勿れ、請ふ二君、之れより行路を轉じて山腹を横遮せん。二人曰く、諾。相促して進む。松風蕈香を送て松琴蕭々、幾何の吟蟲相答て呀々愛すべし。兩傍皆樹木、宛然として錦房繡帳を行くが如し。須臾にして林開け地閉ぢて一大道に出づ、道側に榜して陸羽街道と云ふ、三生翠を拾ひ紅を摘みて路傍に散歩す。忽ち轔々たる車聲の響くあり、三生頭を回せば一少女の車上にあるを認む、長袖膝に垂れて、紅裙風に飄り、頻りに車丁を促し來る。秀一思はず其

面を見れば、豈圖らんや車上の女は相樂梅史なり。駭然として其面を背し、狼々爲す所を知らず。女亦驚きたる如く、云はんと欲して云はず、眉峰恨月を上せ、光彩幾度か後を照らして去る。秀一其影を目送し茫然之を暫くす。耿吉其背を撲ち、戲れて曰く、彼の女雲鬢烟を拂て愁眉柳を揮ひ、再び瞳を君の一方に送り、顧盻する數回、豈秀兄面上の香、阿娘心裏の痴蝶をして迷はしむるに非ざるを知らんや。秀一急に笑を爲して曰く、兄又僕を弄する勿れ、知らず君の所謂瞳は何れの方に注ぎしやと。諧謔交出、互に其言を矜ぶ。節曰く、互に解語の花を稱すと雖も、朔風一度び梢に叫べば落花紛紛として春色跡を止めず、安ぞ此天然の景に若かんや。耿吉大に笑て曰く、我輩諧謔の談は安ぞ君が正理の言に當らんやと。會〻胡笛一聲微に山谷を交て雲霄に響く。耿吉愕いて曰く、之れ鎭營晩餐の號調に非ざるを得んや。仰で西方を望めば、斜陽已に低くして人影地に長し。卽ち顧て二人に謂て曰く、秋日の短なる、已に哺時に至れり、方に遊杖を收めて歸途に就かん。二人之を然りとし、共に山麓に下る。晩烟一抹して紅楓色漸く黑く、蒲牢殷々として一點の反照光全く收る。孤雀は群を求めて林間に點し、衆鴉塒に歸りて暮色に叫鳴す。黃林徑中犢を引く牧童は謳歌互ひに答て去り、蒼水溪

畔草を摘むの村娘は腰籠急に提て歸る、其景淸閑、訥筆の能く盡す可きに非ず。耿吉、節と之を賞し、歩々吟咏雍々として樂しむと雖も、秀一は唯〻梅史の事を慮り、疑念百出、心緒蓬々誰と共に之を解くに由無く、胸裡鬱々、頭を低れて言はず。誰か知らん、之より才子、益友の言を忘れて再び意馬をして巴峽の西に走らしめんとは。

遠寺の疎鐘微かに響きて建業門前天を照すの燈花影全く消え、中天の孤月光冷にして秦淮河畔地に湧くの絃歌音已に止む、人已に定り夜正に闌、萬籟寂莫、只遠くに狗犬の聲を聞くのみ。柴墻の下、蟲吟琴を鼓して蕭々として音絲の如く、庭砌の邊、孤花露を帶て嬝々として光螢に似たり。此時に當て一個の少女雲鬢少しく亂れて明眸玉の如く、蓮歩曩々夜を蹈て來り、纖手柴門を打つこと三四、微聲を發して曰く、郎君乞ふ之を開け。未だ應ぜず、一個の少年睡眼を刮り寢衣長く引て出で、獨語して曰く、何人か深夜訪ふと。閑砌徐に歩て門を開き曰く、我を訪ふものは誰ぞや、其名を聞かん。會〻癡雲月を漏らし皓彩庭に充つ。少年、少女を見て大に愕き、茫然なす所を知らざるが如し。抑も之れ何人ぞ、少年は高木秀一にして、少女は相樂梅史なり。此時梅史は走て秀一の傍に至り、驚聲高く叫て曰く、郎君、

妾を忘れしか。秀一急に袂を以て其口を掩ひて曰く、深夜高聲を發する勿れ、此處は家外の道傍、阿孃先づ内に入れ、僕其志を語らんと。乃ち其書室に誘ふ。秀一竊かに以爲く、梅史の來るは我薄情を怨恨して其情懷を說くならん、耿兄の戒は正に玆に在り、彼れの衷情は誠に憐れむべしと雖も、我胸中亦之をなすに忍びんや、如かず言を設けて其情を絶ち、以て自他の幸福を全うせんには、且つ焉ぞ我眞心を彼に達するの期なからんやと。乃ち衣袂を正うして言て曰く、阿孃深夜を犯して僕を訪ふ、必ずや快談奇話の以て僕に訓ゆる所あるなるべし、願くは其旨を聞かん。言未だ畢らず、梅史涙潸々として翠眉愁容を帶びて（此ノ所、恐ラクハ、衞字アルナルベシ。思フニ「曰く、決して然らず、深夜故らに來つて郎君を訪かす所以のものは、妾が心中の衷情を吐けてと云フノ意か。編者註）以て郎君を煩はさんと欲するのみ、郎君先きには妾が手翰を辱めて妾をして肝腸寸斷するの思あらしめ、今や素言を賜ふて妾をして愁涙千行轉た妾が心を苦しましむ、何ぞ其れ薄情なるや、と。言纖がんと欲して纖がず、（纖纖一方）漉漉又言ふ能はざるものの如し。秀一冷笑して曰く、阿孃は、今夕の僕は先日の僕に非ずして、淺薄なる術計の爲めに、彼の田野傖夫が暗中狐狸の爲めに猛せらるゝ如く欺かれざるを知らざるか、先にして僕（「して」ハ「況」ノ誤カ）一片の好餌の爲めに阿孃の莊に至れば、白萩門墻を埋めて絶えて應答するものなし、望を失

ふて徒に歸る、之れ豈苟も誠貞婦女のなすべき所ならんや、假令遽急事故の出來て俄に此地を去るも、何ぞ一片書翰を認むるの遑なからん、一介使命を傳ふるの際なからん、果して遑隙あつて而してなさざるものは、已に其心の僞飾なるは智者を待て後知るを要せざるなり。歸て顧ふに、嗚呼我れ誤れり、僕は素孤寒の貧書生、阿孃は素より路上の一柳枝、何人か之を折らざらん、何人か之を拔かざらん、然るに僕之れを覺らず、而も眞心を吐露して涯生を誓ふは其愚直素より笑ふべしと雖も、誰か阿孃の癡漢を捕へて之を愚弄するを賤しまざらんや、之を以て之を見れば、先に阿孃の僕に送りしは皆虛構の言、況んや其書翰をや、僕此故に開封せずして返還す、誰か之を過れりとせん、嗚呼今阿孃の心術の僕に看破せられたる、（此ノ所謬字アリカ）此言は誠に阿孃の心をして冷然たらしむるや知るべからずと雖も、素之れ自身の銷、佛家の所謂自業自得なり、阿孃幸ひに僕を恨る勿れ、且夫れ世界男子は僕一人に非ざるなり、阿孃其れ僕が如き醜貧の痴漢を弄するをなさずして、他の美男子にして腰纏に富むものを以て伉儷となし、以て彩鳳鴉に從ひ駿馬痴を載するの譏を免れば、阿孃に於て其幸福果して幾何ぞやと。言畢つて辭色共に鋭し。梅史其言の意外に出でたるに驚き、茫然として云ふ所を知らず、唯〻秀一の顏を諦視し、涙滲々たること之を久うす。暫くにして愁顏怨波を結び、眉峰恨月を上せ、悄然として曰く、郎君云ひし所のものは郎君の本心なる歟、妾實に惶惑に勝へたるなり、先に突然飛報あり、叔母病旦夕に迫ると、妾驚愕俄かに行裝を整へ人車を飛ばして故山に歸る、今を以て之を思へば、此時に當て一片の手書を認めて以て郎君に告ぐるの遑あらざるに非ずと雖も、事の急激なる、妾が心をして錯亂せしめ、五歩徑中をも辨ずる能はざるが如きを之に注意せざりしなり、馳せて故山に至れば、悲い哉哀々たる叔母已に長逝し、三魂天に歸し、九魄地に滅し、忽焉として焉々たり、悠々たる幽冥道を異にして詢信に由なく永訣黯然、事の施すべきなく、妾慟哭、地に嘆き天に悲しみ、なす所を知らず、抑も叔母、妾を養ふて玆に至らしむ、嗚呼妾が十六年の春秋は之れ果して誰の賚ぞ、然るに孝養未だ盡さざるに朔風颯として命葉地に落ち、幽路途遙かにして再び歸らず、妾や不幸、而も音容を生前に拜せずして徒らに再逢の期を缺く、之れ實に妾が涯生の遺憾なり、嗟呼妾之れより誰れに依てか餘生を送らん、誰に向て仕養を奉ぜん、情義の掛る所、恩愛の繫がる所、彼の樹靜かならんと欲せば風止まず、子養はんと欲せば親在らざるの詩句は、正に妾が今日を云ひしなる

べし、且夫れ妾の此地に遊學して汲々黽勉する所以のものは果して何の爲めぞや、妾が成業の後、叔母が鴻恩の萬分の一を報じて其喜悦に接するを期するが爲めのみ、今やすでに絶して身寄然、假令他日錦衣故郷に歸るの榮あるも、誰に向てか之を報ぜん、彼の中[illegible]魂去り魄空しき處、涙を青草墓頭に濺で以て之を告るも、冥界萬里の人、黄[illegible]何に依てか之を知らん、妾が心中の悲みは實に論ふるに物なきなり。と云ひ畢て[illegible]泉の如く、伏泣之を久うす。秀一も亦爲めに容を動かし、心竊かに憐れむと雖も、故らに嚴格を裝ふて聞かざるをなす。已にして梅史涙を拂て言を繼て曰く、此時に當て妾が身は盲龜の浮木を失ふが如く、萃々然として喪家の狗の如し、只杖柱として賴む所は郎君一人のみ、之を以て細さに書を認めて以て郎君に寄すれば、貞意達するを得ず、而も翰封未だ開けずして返還せらる、妾何の故あるを知らず、疑心百出、一寸時間のあるあつて以て妾の心を平安ならしむるなし、乃ち郎君に遇ふて其疑を氷かんと欲し、車を飛ばし日夜兼行、先日新山に至れば、圖らざり き郎君の仙遊に遇ふ、是時に當て妾が胸中は躍々として堪へ難しと雖も、郎君他に同伴あるを憚て猥りに言を放たず、心競々として郎君を見れば、郎君面を背けて見ず、默々の中旨意

の存するあるが如し、此に於てか妾が疑ひ益〻起りて、翼々として樂しからず、今や思はざりき、郎君此の如く無情の言あらんとは、妾迷惑の至りに堪へず、先に郎君に告げずして故山に歸りしの一事は、之れ毫も他意の存するあつて然るに非ず、郎君願くは妾が今の言を以て之を察し、以て其疑を解け、且又妾が心は神明の洞觀せらるゝ處、一度び眞情を郎君に吐露じてより、妾が百年の命は郎君の生かす所に任じ郎君の殺す所に任す、彼の輕薄女子が旦合暮離、恬として慚ぢざるが如きは妾が夢にだもなさざる所なり、然るに郎君一柳枝の語あり、之れ妾が實に怨冤に堪へざる所なり、抑も妾が一身を郎君に任せしは何が爲めぞ、之れ郎君の信義は以て一生の命を托すべきを知ればなり、而して今是言あるは、之れ郎君心事の誠に變換せしに非ずして、必ずや他物のあるあつて郎君の心鏡を掩蔽するに出るなるべしと雖も、之れ亦妾が不肖の致す所なりと諦覺すれば、必ずしも怨むべからざるなり、然りと雖も妾が心豈忍びんや、先に郎君云はずや、予豈輕薄都人士が金幣盡くれば胡越の如く、美色衰ふれば又之を顧みざるが如きの徒ならん、江河逆流して羝羊孕むも、今日の交情は決して溢ゆべからざるなりと、此言や、妾に於ては實に千金の賚、故に今尚ほ記して忘れず、然る

に郎君已に之を忘れしか、嗚呼妾や孤にして叔母に別れ、涯生依る所を失ふ、今又萬一、郎君の捨つる所とならば、妾は則ち大洋の漂舟、何を樂て餘生を送らん、何を期してか世間に立たん、當に世塵に離れて東海を蹈むべきのみ、嗚呼妾が薄命の花は散て形なきも、眞魂一結望夫の石とならん、安ぞ流離班々風柳の流を挹まんや、伏して願くは郎君、妾が言の詐りなきを察し、一片の芳樹を賜ふて歡交を全うせよ、と。言ひ畢て紅涙潸然、兩袂爲めに潤ふ。秀一一々之を聞き、頭を低れて言はず、心裏大に感じて以爲く、嗚呼彼れの誠貞なるは今にして知るに非ざれども、眞情の懇切なるは我をして慚ぢしむるに足る、今や予、素意に背きし寃過を彼に付し誹毀至らざるなし、然るに彼れ少しも怒らず、赤心を吐露して怨に報ゆるに實を以てす、之れ一言の誓を重しとし、其誠は金石を貫くに非ずんば安ぞ能く玆に至らんや、語に曰く、男子が一言の矢は行て再び返らず、予れ實に槐陰の盟に慚づ、我寧ろ實を顯はして舊交を全うせんか、否々斷翰の誓は予に於ては萬斤の義あり、然りと雖も之を守らば、女子の小切心切迫して又何等の珍事を換起するも知る可らず、彼此兩ら全うするを得ず、進退實に極まる。と、心悶々として竊かに梅史の容を見れば、芙蓉風に惱みて嬌眼涙を

漲らし、海棠露重うして長袖淋漓たり。秀一憫措く能はず、長嘆一聲、俄に喜色を裝ひ、温顏柔言、梅史に言て曰く、阿孃又憂ふる勿れ、先に僕が無禮を顧みずして言ひし所のものは、素意の存するあ　非ず、皆之れ虛言假語、以て戲れに阿孃を試みたるのみ、然るに阿孃心鐵石の如く、撼揺少しも動かず、僕實に欣愧の至りに堪へず、且つ僕愚と雖も、苟も一個の男子なり、豈反覆旦夕を保せざるの徒ならんや、乞ふ憂心を散して歡會を取り、幸に非禮の言を以て意となす無くんば幸甚。梅史之れを聽くや、愁顏忽ち變じて欣意眉宇に溢れ、曰く嗚呼郎君之れより惡戲を止めよ、先に妾が苦心の切なるは誠に針衣を衣たるが如き思ひをなしたりき、今疑雲解けて月皓々、妾が喜びは實に喩ふべきなし、先に鳳山の春色正に闌なるとき、百花魂を返して紅雲山を埋め、楊芽新に舒びて麴塵將に暗からんとするも、萬一再び郎君と共に東帝の饗を遏ふする能はざるかと思へば、今宵の明月、窓前に懸りて冶光晝を欺き、砌邊の吟蟲、琴瑟を鼓して囀々耳を洗ふを覺ゆるも、悉く皆悲愴の媒となりしも、郎君の歡を再びしてより却て快樂を助くるを覺ゆ、只恨む可し郎君先に早く眞心を告げずして妾をして幾何の苦界を脫せしめざるや。と、滿面笑を含て喜色掬すべし。秀一鐵腸蕩盡、夙に耿吉の戒

を忘れ、其背を撫して曰く、僕や實に阿孃が情義の懇篤なるに感ず、世界は弘く婦女は多しと雖も、僕が一生を誓ふは阿孃一人のみ、天柱折れ地維缺くるも、僕が心は決して渝變せざるなり。梅史釋然、喜び極りて而して泣く。正に之れ破鏡再び合して密情語睦ましく、覆水盆に反りて親意交り濃かなり、是時凝雲月を掩て窓外光なく、秋風燈火を吹滅して一室影暗し。黯々の中、咫尺辨ぜず、只二人親話の聲を聞くのみ。

（明治十九年作）

編者云、

此稿纔に初篇を存するのみにして、構想の更に轉移し、文情の更に暢達するものを見る能はざるを遺憾とす。

此作ありし頃、著者年齢十六七、岩代國福島町に在り、湖雪迂人又は芳雪仙史と號し、懐古堂主人と稱す。著者自筆の稿本今何れに在るかを知らずと雖も、本篇は著者が同窓の友たりし中桐氏の當時筆寫せられたるものにして、漢字の外全部片假名を用ひ、句讀を附けず、甚だ讀み易からざるを以て、本文を平假名に改め、傍訓句讀を施し、又疑點は註を加へたり、讀者幸に諒焉。

進亭郎の悲哀

第一翰　一千七百七十年五月十日

此寂莫をかくまで樂しくする我心の平和は、そも如何に大なるべきや。春の朝の如く清らかに長閑けき心を以て、予は單身にて我が愛する田舍の生活を初めぬ。今は營々として世上に立たんより、予には寧ろ退きて靜かに青山に臥するの遙に愉快なるを覺ゆるなり。されば予は我が學びを怠り、以前のあらゆる娛樂を退けぬ。予は筆を拋てり、されど常よりも遙に巧なる畫工となれるなり。若し夫れ一帶の曉霧谷間の木を包み、球の如き零露滴々たるの旦、若しくは綠陰鳥聲深く、木の葉を漏るゝ日光三四我が愛する隱れ場を照すの時、予は獨り木下影を逍遙し、或は涓々たる小川に沿へる軟らかなる小草の上に横臥して、玆に自然の大いなる變化を賞歎する也。——幾千となきさゝやかなる草木——其の葉末の露に宿る幾千となき小蟲——是等は常に我目に觸れたれども、今や深く予の心を惹き、予はそゞろに吾等を創造したる自然の力を解し、吾等を扶くる永遠究まりなき神を思ひ起しぬ。若し暮色景を閉づ

れば、予は予の見たるあらゆるものを再び心に呼び起し、戀人の俤に接するが如く、種々の感情は祕密なる樂みを以て我心を充し、數々夢幻の間に漏れ出づるなり。おゝ我友よ、予は予の思ふ所、予の感ずる所を悉く御身に告げ知らせんことを望む。されど思ひしことも空なりき、文字は斯の如き高尚なる思想に達する能はず、一種崇高なる觀念は我心を呑み、予は唯、茫然として驚嘆するの外なきなり。

第二翰　五月十二日

外物の言ふべからざる樂みと我心の爽かなる感覺とは、共に到る處をしてさながら天國の如く見えしむ。殊に予の愛する所は、小山の麓にある清冷なる泉水にあり。泉を繞りて立てる奇絶なる巖石、蔚蒼として其上を掩ふ松樹、鏘々として流るゝ水音、梢の鳥、妙なる歌――凡て――凡て尤も高尚なる感情を以て吾心に銘せざるはなし。予は日々此の樂しき場所に一時間を過ごすを例とす。若き乙女子は、時に近傍の町より水を汲まんが爲に玆に來るなり。吁無邪氣なる而も必要なる仕業！　古は王侯の姫も尚以て樂みとなせるなり。予はかくてふりにし昔の風習を思ひ起しぬ。想ひ見る、吾等の祖先が神に誓はんが爲に幾度か此泉の傍に會せしや、又想ひ見る、憐れなる巡禮が夏の日の最中、此傍に憩ひ、幾度か玉なす汗を此玲瓏たる流に洗ひ落せしや。されど我友よ、苟くも其の感情と思想とが予と等しからざる人ならんには、如何でか此清冷なる泉水に對して一部天心の想ひを懷くことを得んや。

第三翰　五月十三日

予に書を送らんとや、否、我が親愛なる友よ、御身の親切は予の深く感謝する所なれども予は熱心に此事を思ひ止まらんことを望む。予は久しく書の爲に牽束せられ、今や願くは不羈自由の身となりて、吾れ一己の考へに委せんと欲するなり。予は只予の無聊を慰むるの小曲あらば足らんのみ、幸にして予は之をホーマーに得たり。

予は幾度か沸騰せる血液を鎭め、我心の激揚せる感情を止めんと務めたりき。されど予は此等の感情を我友に告ぐべきや。御身は已に能く我が性の變り易きを知れり。御身は、或時は予が憂に沈みながら忽ち喜を以て半ば狂し、漸く心安らかに氣定まり、又不意に情亂れ神

激するを見しならん。げにや此心は我儘なる小兒の如し。予は只其の爲すが儘に一任せんと欲するなり。されど謹で之を祕せよ、此世界は常に道理を擧げて感情の犧牲となす人を、心弱しとして非難するなり。

第四翰　五月十五日

此地の民、殊に小兒等は已に予を知りて予を愛せり。予の初めて渠等に話しかけし時は、彼等は予を疑ひて、や、予を冷遇せり、予は玆に予が先に屢〻遭遇したる經驗を確かめぬ。彼の下等の人民が上流の人を嫌ふ所以のものは、只〻高貴の人が、下民の己に近くを以て恰も其身の尊嚴を傷くるが如く思ひなし、成るべく之を遠けんとするの傾きあるが爲なり。然れども彼の何の趣意なくして、其の下民を忌み嫌はんとする世の所謂貴紳士は抑〻何等の傲慢——否、何等の無學ぞや。此世の生活はいかにも平等を許さざるべし。——されど彼の他人を卑むるは卽ち己の位置を高うし己の尊嚴を保つの道なりと思ふ人の如きは、實に之れ一個の痴漢のみ、卑劣者のみ。何ぞ攻擊を怖れて敵を避くる怯者に異らんや。

予一日、例の泉水に赴きしに、一個の若き村娘ありて、最下の石段に立ち、氣遣はしげに其の仲間の來りて傍へにある水桶を其の頭上に載せ呉れんことを待てるを見き。予は直ちに少女に向て云ひぬ。我が愛するものよ、御身を扶くることを予に許せ。娘は顏を赧らめながら懇ろに答へり、『オヽ否、勿體なし』。されど予はあらゆる虛禮を退け、扶けて桶を其の頭上に載せ遣りぬ。娘は笑を以て予に謝せり。予は予の感じたる快樂を以て充分報いられぬ。

第五翰　五月十七日

予は已に多くの知己を此地に作れり。然れども、尙ほ未だ親交を得ず。予は此地の民がかくまで予を愛しながら、何故に常に予と共に逍遙するを憚るやを解する能はず。予の己むを得ず渠等と別るゝ時に當つては、常に悲みの情に堪へざるなり。恐らくは御身は、渠等の如何なる種類の人なるやを問ふなるべし。予は答へん、到る處に御身の見る所の人と。吁天の人を造るや常に等し、財産只其の差を作るのみ。人間の多數は之が爲に其の生命の大半をば苦勞の間に費すなり。渠等は只〻其の生命を續けんが爲に毫銖を追ふて苦しむのみ、何の餘裕

か之れあらん。是れ實に悲みても餘りある事なり、されど是れ實際に於て人間多數の運命なるを如何せんや。

幸にして予は多くの人に接するを得たり。中には學者あり、紳士あり、貴族あり。殊に予は一個の價値ある人物に親しめり。此人は一貴族の執事にして、其の寛大なる性質と高尚なる精神とは、萬人の共に尊敬する所なり。渠は九人の子を有し、其の一家團樂の光景には、情致實に掬すべきものありと云ふ。殊に其の長女の評判は到る處甚だ高し。渠は予を其家に招待せり。予は近日自ら之に赴かんと思ひ居れり。渠は絃を去る凡そ一里半許の處に住し、其の家屋は元來貴族の別莊なりしを其の夫人の死せる時、其の舊居は只悲みの媒なりとて、其後直ちに此人に與へたるものなりと云ふ。

第六翰　五月二十二日

人は言ふ、此世の生活は夢なりと、予も亦あか言はんと欲する也。人は棲々遑々として勞作するも、五十年來詮じ來れば、歸する所は一の墓門に非ずや。夙夜早旦、孜々として怠らず、身を養ひ財を蓄ふるものは、只之れ憫れなる生命を長うせんとするものに非ずや。人の或る疑問に對して喋々論辯するものは、徒らに之れ盲目の認定のみ。其の最大なる快樂も、假令ば獄室の壁に種々の空像を畫くに過ぎず、暗々たる獄壁は依然として其の目前に横はれるなり。——斯の如き思想の起りし時は、おゝ我友よ、予は默然として沈思し、我れ自ら吾心を求むるなり、而して得る所は何者ぞ。信仰去りて幻影來り、實境消えて妄想顯はれ、眞理滅して空像至る。茫然として吾れ自ら「我」あることを知らざるなり。學者は皆曰く、小兒は考へなくして働くと。されど予の見る所を以てすれば大なる小兒も其の少時の如く其身の本源、本體等に至つては少しも知る所なく、小兒の菓子と鞭とに導かるゝが如く、只賞を望み、罰を恐るゝの外、其の行爲に向つて何等の規律なく、只々茫として其の生を送るなり。斯く言ひ來らば、我友は必ずや問はん、然らば則ち人間の幸福なるものは如何なる人なりやと。予は答へん、彼の小兒の如く、翌日の事は少しも考ふる所なく、只々玩具と果物とを以て偏へに現在を樂み、其の欲する所のものあれば則ち叫び、慈悲深き母の之に與ふれば猶ほ多くを與へんことを叫ぶ、斯の如きものは最も幸福なるものと云ふべきなり。吁、彼の些細の

ものを以て満足する人は、けに幸ひ多き人なる哉。殊に彼の空名空位を得て以て己を人中の神なりと思ひ、天下の主なりと思ふ人こそけに羨ましき限なる哉。されど其身の本來空なるを認めたる人は、此の世界を以て天國なりと思へる富者も、此の世界を以て地獄なりと思へる貧者も、遂には共に永遠無窮の神の世界に到るべきを知れるを以て、現世の階級の少しも憂樂となすに足らざるを覺ふべきなり。斯の如き人は人間の名稱を以て平和なるを得べし、幸福なるを得べし、又満足するを得べし。されど其心は深く自由の思想を以て感銘せられたるなり。是故に一旦此世の幽囚の勝へ難きを覺ゆる時は、渠は自ら其戸を開き得る鍵を有せるを確信せるなり。

第七翰　五月廿六日

一日、予ワルハイムの野に徜徉して、偶然一古寺の前に到りぬ。此日天氣麗はしく、農夫は皆外に出でて田を耕やせり。寺の傍に僅に四歳許の小兒あり、地に坐して生れて六ヶ月も過ぎたらん如き赤兒を守り居れり。小兒は其胸に赤兒を抱き、其の細やかなる手を以て小き

座を作り、其の愛らしき黑き眼は野原の方に漂へども、猶ほ其の位置を保ち、抱き居れる赤兒を妨げざらんと務めたり。其の無心にして而も愛情濃やかなる光景に樂まされて、予は其の向ひの石に腰打かけ、紙と鉛筆とを取り出して此の兄弟の無邪氣き容貌を寫し取りぬ。予は又近傍の生墻、小屋の戸及び不揃ひなる鋤鍬等を其の傍に畫き加へ、一時間を出でずして、少しも自家の意匠を用ひず、趣味限なき、結構完全なる一個の好畫圖を作り出しぬ。此の一事は予をして益〻自然に結合することの身に利益あることを決心せしめたり。何となれば、設令ひ「自然」は單純なるも、其の含蓄する所は無限なるものなれば也。「自然」は常に詩人、畫工に與ふるに新奇なる意匠を以てし、大に其の著作の品位を高うするものなり。區々たる準繩規矩の模型によりて成りたるものは、恰も社會規律の下に人となりたる者の如く、崇高なる風格、得て求むるを得べけんや。一々法規を追ふ技術者は、彼の狹隘なる教育制度の間に成長したる人の、社會に大害を爲さざるが如く、決して極めて拙惡なるものを作ることなかるべし。されど其の天眞の風韻を害し「自然」の高尚なる美妙を損する事は掩ふべからざるなり。されど御身或は言はん、規律は其の形を整へ、態度の不完全なるを防ぐの効あり

と。夫れ或は然らん。されど予は斷言す、規律の天才を束縛するや、其の區々たる修正によりて得たる利益は、決して爲に失ひたる自然の美を償ふ能はざるなり。

今試みに愛情と才智とを比較し見よ。我友よ、玆に一個の若者ありて一個の少女に眷戀したりと假定せよ。而して此の若者は少女の爲に滿身の愛を捧げ、滿幅の信を盡し、此の少女が己の愛情の唯一の目的なるを證せんが爲にあらゆる力を盡したりと假定せよ。また斯る處に有名なる哲學者來りて此の若者に忠告したりと假定せよ。哲學者は必ず言はん、「我が若き友よ、夫れ戀慕は自然に起る所の情なれども、一定の範圍にて之を制限せざるべからず。御身の時間の大半は、此世の有益なる仕事に盡力すべし。御身若し餘閑あらば、御身の戀人を愛するも可なり。謹んで身分不相應の事を爲す勿れ、只今日を勤めよ」と。若者は果して此の忠告を用ふべきか。若し用ひたらんには、此の若者は人の爲に賞せられん、されど先の愛情は只一片の幻影のみ。畫工が規則の爲に制せらるゝも亦斯の如きのみ。規則は能く修正す、されど活動するものに非ず。天才は恰も大洋の水の如し、洶湧澎湃、人目を眩す。規則に制せらるゝ人は恰も海岸に沿へる水の如し。能く其形を保つも、激浪空を衝くの壯觀を呈

せざるなり。

第八輪　五月三十日

「何故に御身に書を送らず」とや。御身の賢にして、何故に斯の如き簡易なる疑問を問はんとするや。予の久しく音信なきを以て、御身は能く想像し得べきなり、予の幸なる境遇に在ることを——卽ち——一言すれば、予が他の一層親愛なる朋を得しことを——卽ち予が或人——予は其名を告ぐる能はず——に邂逅したるを。

如何にして予が此の尤も高尙なる女性と親しみたるか、其の什一を御身に物語ちんは、是れ實に困難なる事にぞある。予は幸福なり、實に言ふべからざる程幸福なり、故に文章の能く盡すべきにあらず。

渠女は一個の天使——一個の女神なり。されど御身は必ず言はん、此等は男子が常に其の戀人に與ふる普通の名稱なりと。おゝ渠女は凡て圓滿なり、されど予は其の圓滿を記する能はず、又予が如何程渠を愛するやをも言ふ能はず。

質素なれども而も明かなる理解力を具へ、溫柔なれども而も靈活の氣風を失はず、其心や純潔雪の如く、其情や清雅花の如し。然れども此等の區々たる文字は渠女の眞の性質を顯はす能はず――他日を待つて――否、今にして御身に告げずんば、予は永く其の機會を失ふべし。其實を言はば、予が此の手紙を書き初めしより、此筆を投じ、走つて渠女を見んと思ひしこと、其の幾度なるやを知らざるなり。今朝予は家に留まらんと決心せしが、頻りに窓を開きて太陽の出づるを待ち詫びたりき。

予の決心も空しくなれり。予は遂に筆を投じて渠女を訪へり。――然り、我友よ、予は今正に歸り來りて、先に執りかけし筆を續くるなり。おゝ渠女及び其の弟妹を見し時は、其の樂み如何なりしとするぞ。――されど予が斯樣に書き續けたらんには、予が書き初めし時も書き終りし時も、御身の知る所は異ることならん。されば、予は此等の枝葉に亙らずして、順序正しく其の什一を御身に話さん。予は御身の輕々看過せざらんことを望む。

前翰に於て、予は貴族の執事と相識るに至りたること、及び彼が其の小王國――彼の別莊

は隱然として一國をなすが如く見ゆれば――に予を招待したる事を記載せり。種々の事情によりて、予は永く此の訪問を遷延せり。若し偶然の事よりして、其の別莊の中にある財寶を發見せざりせば、予は恐らくは決して之れを訪はざりしならん。

一日、予は此町の若者等の誘ひにて舞踏會に赴く事を諾し、予の相手に一個の若き貴女を約束せり。此の貴女は、其の少しく美なるを誇れるものにして、非常の美人と言ふにあらざれども、十人並の容貌を有せり。予は又舞踏場に赴かんが爲に、予の相手の貴女と其の親戚の人々を予の車に乘せ、途に紗娘の家を訪はんことを約束せり。此の紗娘は卽ち先に言ひし執事の長女にして、共に亦舞踏場に赴かんと約せしなり。斯くて予等は途を枉げて、執事の門に近よれる時、予の相手は吾れに告げて、予は一個の美麗なる娘を見るの機會を得ん、と云へり。其の親戚のもの之に續いて曰く、『あゝ、然しながら御身は渠女の美に迷ふべからず』。予は問ひぬ、『そは如何なる譯ありて?』。予の相手は答へて曰く、『渠女は既に言號けせられたるなり、而も一個の立派なる紳士に。渠は其父の不意に死せるを以て、其後の事を定めんとて、且は宮庭の中に其の位置を得んとて出でて今家にあらず』。予は此等の話に少

しも頓着せざりき。

吾等の執事の家に達せし時は、日は已に山の後に沈み、天氣は甚だ暑苦しく、重々しき雲は地平線の上を覆ひて、嵐の來るを戒しめり。貴女等は皆驚き恐れ、皆痛く其の待ちに待ちたる快樂の妨害せられんことを憂へり。予は目下の恐れを靜めんが爲に、故らに落着たる樣を裝ひ、氣象學に熟知せるを公言して、格別の變化なきを彼等に保證せり。やがて予は車より下れり。一人の家僕來りて其の令孃の支度する間暫く待たれんことを乞へり。

かくて予は中庭を横ぎり、客間に入れば、六人の愛らしき子供等（年長のものは十一許りの最も幼きものは二歳計り）の、水色の流蘇を付せる淡泊なる白き上衣を着し中背にして氣高き容貌の一個の若き貴女を繞りて立てるを見たり。渠女は一個の小刀を手にし、子供等の爲に麵麭と牛酪とを等しく切りて、さも愛らしく樂しげなるさまにて與へ居りしなり。子供等は、各〻其さゝやかなる手を捧げて麵麭の切を受け取り、『多謝多謝』と叫びながら、彼等の紗娘を乘せ行かんとする仲間と車とを見んが爲に、皆戸口に走り行けり。紗娘は予を

見て、慇懃に其の遲延せるを謝せり。『妾は妾の爲に御身をして車を下るの勞を取らしめ、又永く貴女達を停めたるを悲しむ、されど餘りに裝飾を急ぎたる爲め、全く室内の整理を忘れ、又子供等は妾の別に與ふるにあらざれば夕飯のみを以て決して滿足せざるなり』。予は何か返事したれ共、其の言ひしはそも何事にてありしか、全く忘却せり。予は茫然として只渠女の言葉、其の音聲、其の態度に感じ、渠女の、扇と手袋を取らんが爲に出で行きし時、屢〻故の「我」に復りたる程なりき。渠女の出で去りし後、子供等は代る代る予をのぞきて互に囁やきあへり。予は直ちに其の最も幼きものに近きしに、恐れ走りて避けんとせり。此時恰も紗娘歸り來り、子供に云へり、『來れ、レ井スよ。御身の從兄を恐るゝ勿れ』。彼は之を聞きて容易に予に其手を與へたり。予は心よく之に接吻せり。紗娘を車に導く時、予は笑ひながら繰返して云ひぬ。『從弟よ、然らば御身は予が御身の親戚となるの價値ありと思ふや』。渠女は意味ありげなる笑を以て答へり。『おゝ否、妾は多くの從弟を有せり。如何でか御身を担まんや』。

渠女の出發せんとする時、最も年長けたる娘ソフ・ア・を呼びて、己の家に歸るまで、父と

共々家にありて、能く小兒等を注意すべきを命ぜり。然して後渠女は又小兒等を呼びて、其の留守の間は、己の如くソフヰアの命に從ふべきを告げたり、小兒等は皆容易く之を諾ひたれども、只〻六歳許の活潑らしき娘は、首を掉りて叫べり。『然しながらソフヰア姉は、我が姉紗娘にあらず。吾等は多く紗娘姉を愛するなり』。斯る間に、二人の男兒は車の後を攀ぢ上りたり。予は同じく車に載せんことを紗娘に乞ひしに、渠女は二人を森の端れまで伴はんことを許したり。されど吾等の席未だ定まらず、貴女達の互の挨拶も了らざる中、紗娘は車を停めて靜かに其の弟等をして車を下らしめたり。彼等は幾度か其姉の手を接吻し、愛らしき眼付もて車中の人々に禮して出で去りぬ。

車は再び走り出せり。予の相手の親戚なる貴女は、紗娘に向つて、近頃己れが送りたる書籍の、氣に入りたるや否やを問へり。紗娘は答へり、『そは御身は先に妾に貸したる書の如く更に妾の心に適はず。妾は速に之を御身に返さんと思ふなり』。予は其の書名を問ひしに、其のゼ・キヤッスル・チヴ・オトラント・なるを聞いて大に驚けり。渠女の言ひし一言一句は皆其の學識の完全なるを證し、其の眼孔の精確なるを示さざるはなし。

予は其說に同意したるに、其の容貌は渠女が感じたる滿足によりて一層の光輝を放ちたるが如し。渠女は言へり。妾の幼けなかりし時は、傳奇は妾に無限の快樂を與へたりき。當時妾の最大なる樂みは、月曜日の午後一室に閉籠りて或は荒唐なる傳奇を讀むにあり。此の妄想の嗜好は直ちに消え去りて、今や家庭[的方]ドメスタック、漸く妾の趣味に適し來れり。されど、妾は充分讀書の餘暇を有せざりしを以て、妾は殊に自然に從ふ作者を擇みて、一家の愉快なる光景——恰も妾が今妾の家族中にて經驗するが如き——を玩味するなり。

談漸く轉じて舞踏の事に入りぬ。紗娘は言へらく、『此の遊戯は多くの人の非難を受くるものなれど、妾は猶ほ殊に之を嗜むなり、若し一時不快の事ありて心氣鬱したる時、直ちに手琴を取りて數曲を彈じ、後二三回の舞踏を試れば、妾の心は速に爽快に復するなり』。吁、[汝]天よ、渠女の話す時、予の眼は如何に之を諦[視]めしや。其の音調の嚠亮なるに聞きとれて、予は殆んど其言を感ぜず。其清らかなる瞳、其の高雅なる容姿に感じて殆んど我と吾身を失ひたり。やがて車の止[停]まりし時、予は精神恍惚の間に車を下り、身は何時の間にか大なる坐敷の

中央にありて、多くの仲間に取り捲かれ居るに心付き、初めて其の場内に入りたることを知りたり。紗娘及び其他の貴女は、各〻戸口に待ち居りし相手に伴はれ、予も亦先に約束せし相手を抱きて皆内に入れり。斯くて舞踏は先づミニュエット(徐かなる舞踏の名)にて初まりぬ。予は室内を旋りて數人の貴女の相手となり、予は其の下手なるものに限りて其の舞踏を延さんとするを發見せり。紗娘は其の相手と田舍踊を初めたり。而して我友よ、御身は渠女の予と共に踊らんが爲に來りし時の我喜びはそも如何なりしやを想ひ見るべきなり。

吁若し御身が渠女の踊るを只一目にても見たらんには!。

渠女は舞踏に尤も必要なるあらゆる巧みを有せるなり、其の風度は優美にして高尚なり、其の動作は輕快にして整肅なり。

予は渠女と共に第二の舞踏を踊らんことを願へり。されど渠女は慇懃に其已に前約あるを告げ、第三の舞踏を共にせんことを約束し、此時予に告ぐるに、渠女の殊に「アレマンデ」を好めるを以てして、『日々に一組毎にアレマンデを踊るは此地の慣習なり、されど妾の相手は之を知らざるを以て、妾に之を免さんことを乞へり、妾は又御身の相手とせる貴女も亦此

踊に熟せざるを知る。妾は御身の踊の風よりして御身の能くアレマンデに熟達せるを信ず、されば若し御身にして望まば、御身は其の相手に此事を告げ、妾も亦妾の相手に告げて、互に組を取換へんと思ふなり』。斯くて事定まりぬ。紗娘の相手は予の相手を取ることを諾へり。然る後、予と紗娘は踊り初め、しばしの間は互に抱き合ひて踊り廻れり。渠女の足踏は如何に優しく又如何に輕やかなりしぞや。明珠盤を走り、天女空を行くも如何で之に優るべきや、予は未だ曾て斯の如く愉快に舞踏したることなし。予は此時已れを人間以上のものなりと考へしなり。其玉の如き手を抱きて、電光の如く室内を繞るが如きは、之れ實に人間以上のものならずや。おゝ我友よ、予は其實を明にすべきか、予は此時すら、此の決心をなせしなり、即ち若し世に予が戀慕し結婚せんとするの女子あらば、今夕予と共にアレマンデを踊りたるものならで他にあらんや、予が一生の間——。されど予は御身の充分理解すべきを知るなり。踊り了りて、吾等は呼吸を回復せんが爲めに二三度室の周りを歩めり。斯くて後、紗娘は席に就けり。予は食臺の上にある數個の林檎を取りて渠女に與へたり。紗娘は其傍に坐せる一個の貴女に之を分ちしに、貴女は遠慮なく其の過半を受取れり。假令ひ女子なれど

予は此の貴女の斯の如き愛らしき手より果物を受取るを以て之を妬むの念に堪へ得ざりき。

休憩の後、吾等は再び舞踏を初めたり。予は紗娘を引き廻しながら、名狀すべからざる感情を以て其愛らしき容貌と其天女の如き動作に見惚れし時、稍〻年増なる一個の貴女、紗娘を見て微笑せり、而して我等の再び其側を通りし時、貴女は紗娘の指を抑へ、尤も力を籠めたる聲にて「アルベルト」と名を言へり。『アルベルト！、シテ予はアルベルトとは何人なるや御身に問ひ得べきや』。紗娘は之を聞きて予の物好を笑ひしならん、されど此時恰も一團の舞踏仲間來りて吾等の間に押入り、爲めに予は已むを得ず紗娘と別れたり。此等の人去りて予の再び紗娘の手を握りし時、予は先の問を繰り返せり。渠女は言ひぬ、『何ぞ妾は眞に隱すべきや、アルベルトは妾の言號けなる儼然たる一個の紳士なり』。予は今にして初めて貴女等の車中にて予に告げしものに思當れり。されど其時は、我友よ、予未だ紗娘を見ざりし故、更に何等の感情をも起さざりき。予は之れを聞くや、忽ち心亂れ氣驕ぎ、予の現在の位置をも全く打忘れ、種々の誤謬をなして仲間の人を騷がせり。されど紗娘の物慣れたる扱ひにて、座に元の如く靜まるを得たり。

此時、恐ろしき稻妻の光、閃々として舞踏場にきらめき渡りぬ。是より先き、屢〻電光の地平線のあなたに輝くを見たりしが、予は只〻熱の甚しきが爲めなりとして、務めて貴女等を慰め居りしなり。雷鳴は轟々として之に續いて起り、音樂の響を打消しぬ。三人の貴女は驚き恐れて直ちに室を去り、其の相手も亦之れに續けり。混雜は今は一般に行亘り、音樂の聲も聞えずなりぬ。恐懼は人の快樂の時に於て常に尤も甚しきものなり。何となれば、快樂を以て充たされたる心は、他物に感染するの力甚だ強く、殊に喜びの俄然として悲しみに變ずる時尤も多く感激せるものなればなり。されば貴女等の恐怖の、嵐と共に增したるは別に怪しむに足らず。其の落着きたるものは窓に凭りて其耳を塞ぎ、或は跪きて短き祈禱を捧げ、又或は二人の中に押入りて兩手を以て之を抱き、潸然として涙を濺ぐあり、或は切りに其家に歸らんとて立騷ぐあり。紳士等は多くは喫煙せんが爲めに二階を下り、二階の人々も辛やく其心を回復し、此家の主人に隨つて皆下に行けり。主人は注意して之を一室に導き、其窓を密閉して電光を遮りたり。貴女は紗娘の勸めによりて玆に「算へごと」と言へる遊戯をなし、僅

に其の元氣を回復せり。

遊戯の終りし頃、嵐は稍〻其烈しさを減じたり。予は再び紗娘と共に窓際に赴きぬ。雷鳴は遠方なれども猶ほ恐ろしげに鳴響き、小雨津々として猶ほ降り續き、一種清冷の氣、袂を拂つて爽快なること限りなし。紗娘は其愛らしき腕もて其頭を擡げ、其清らかなる眸を放つて四方の景色を打眺め、次に予を諦めたり、予は其眼の涙を以て沾されたるを見たり。渠女は其手を柔かに我手の上に置き、天を仰いで叫びぬ、『おゝホーマー!』。予の心は此名を聞きて波立ちぬ——、予は無量の感慨を起したり。之を聞くや、彼の神聖なる詩は忽ち予の記憶を喚起し、予は、渠女の感情の、予の見る所と同じきを見て一層愛戀の情を起しぬ。『おゝホーマー!』、予は只やうやく其を反響し得たるのみ、予の精神は殆んど竭きたるなり。予は其愛らしき手に倚りかゝり、同感と愛情とを籠めて其上に接吻し、瞳を凝らして其美しき容貌を諦めたり。而して其涙に咽び居れるを見て叫びぬ、『吁ホーマー、御身は此の天女の顔を見て之を神とすること能はざる歟、何故に御身は其の嘲亮なる聲に呼れたる御身の名を聞く能はざる歟、御身の名は多くの人の爲めに汚されたり。吁、此の天女の辭を省きて安ぞ他に

御身の名を呼ぶを値打する者あらんや。

第九翰　六月十九日

何處にて前翰を書き停めしや。おゝ吾友よ、予は、予が記したるものを全く忘却したるなり。予は只〻家に歸り、朝の四時頃寢床に入りし事を思ひ出し得るのみ、予は先に予の舞踏會より歸る途すがらの事を御身に知らせしや否や。何れにてもよし——、そは重複するも可なり、只〻御身は予の粗略を許さざるべからず。何となれば、戀は友誼を害するものに非ざればなり。

そは實に愉快なる朝にてありしなり。昨夜の嵐は何こに行きしか、其跡を留めず。空氣は爽かにして、山川も蘇生したるが如く、眞珠の如き露は木々の梢より靜かに滴れり。睡魔は吾等と車を同うせる貴女等の眼を閉ぢたれば、紗娘は徐かに予に向つて、若し予にして睡眠を欲せば、己の事に關らずして少しも遠慮なく眠られんことを乞へり。予は渠女の愛らしき顔を眺めながら答へぬ、『御身の予の前に在らん限りは、予は起き居らざるべからず——、御

身の眼の開けるに、予のみ眠らんことは、予には到底忍び得ざるなり』。其愛らしき頬は一時少しく紅を漲らしぬ、されど直ちに元の美しさに復せり。かくて吾等は車の紗娘の家の前に達するまで話し續けぬ。車輪の音を聞くや、一個の家僕來りて、靜かに車の戸を開き、紗娘の性急なる問に應じて、其の家族の皆安全なることを告げたり。別れに臨んで予は再び渠女を見んことを約せり。而して我友よ、予は赤心を籠めて此の約束を爲せしなり。其日より後、予は時日の經過するをも注意せず、此心玆に在らざればなり。若し渠女にして不在ならんには、此の世界、又何するものぞ。されどおゝ！若し渠女が予の前にある時は、萬物實に天國の如く見ゆるなり。いざさらば——予は之より直ちに馳せて渠女を見ざるべからず。

第十翰　六月二十一日

予は實に此上もなく幸福に時日を送れり。未來は得て知らず、予は現在に於ては最も圓滿なる平和を樂み居れるなり。御身は能くワルハイムの村を知る——。予は紗娘を距ること凡そ一里半の所に住し、凡て世の幸福なる人の誇り得るあらゆる幸福を受け居れり。顧れば先

きに予の居を此地に卜するに當つてや、予は斯る大いなる幸福を受けんとは夢にも思ひ到らざりき。露の旦、月の夕、予は幾度か田舍の光景を目擊して、天外の樂しみを得たりし也。或は小山の頂より、或は河岸に沿へる靑野より、見る毎に景を殊にし、景殊なる毎に趣新たに生ず、げに紅樓朱門の汚れなき自然の生活程愛すべきものはあらざるなり。予は之を見て幾度か人の空なる望を悲しみしなり。世の人は其の故鄕の豐かなる賚に心付かず、徒らに望を外に抱き、他に新なる樂地を見出さんが爲に異邦に迷へども、此等の空望は暫くにして直ちに消え去るなり。是に於てか人初めて其後に殘したる快樂を慕ひ、再び故鄕に歸り來りて其の以前の生活を以て滿足するに至るなり。顧れば已に數歲の昔、予の此樂しき土地に來りしや、予は自然の美、森の面白き景色、山の絕閒なき變化、岩の奇怪なる狀態を愛したりき。おゝ御身が此の景色を見たらんには！。されど予は之にも滿足せず、徒らに架空の望を抱きて之を去りしなり。嗚呼我友よ、遠方は尙ほ未來の如きなり、其處には吾等の前に吾等の心を迷はしむる恐ろしき暗黑の橫はれるなり。吾等は想像の中に畫ける種々の樂みに誘はれ、熱心に之を求むるなり。然れども一旦實際にして其の眞相を顯はさば、あらゆる吾等の戀は消

え去るなり。斯の如くにして永く不在なる旅人は、漸く其の故郷を望みて其貧しき小屋に復り、一家團欒の間に於て、其の遠隔の地に迷ひしよりは遙に大いなる快樂を受くるなり。

今や予の樂みも亦實に斯の如きのみ。

第十一翰　六月二十九日

一昨日一個の醫師、執事の家を訪へり。予は恰も其家にありて小供等と共に遊び戯れ、恐ろしき音をなして騒ぎ居たり。此の醫師は其の性質極めて嚴格にして且つ頑固なる人にして其長き談話の間、常に其の上衣の皺を伸ばし、其の話の終りには其の口鬚を頤の邊りに引きつくる癖あり。渠は予の此の狀態を見て、さも卑しみたる風にて尻目にかけて予を睨みたり。されど渠の嫌はしき容貌も嚴格なる談も、共に予には何等の刺擊を與へざりし。何となれば予は依然として木屑にて子供等の壞したる家を建て直し居たればなり。此の醫師は其後、已に手癖悪しき執事の小兒等は淮亭郎の爲めに全く誤られたりと云ひしと云ふ。然り、我友！予は小兒を好めり、予は渠等をば紗娘に次で愛するなり。是等の小兒の間に予は德義と知識

の種子を見るなり。其の大膳なるを見ては、予は其の他日勇敢にして特操あらんことを先見し、其の氣輕なるを見ては、其の未來に於て上下貴賤の差別なく、共に婉容を以て人に接し、其の生路を愉快に渡らんことを先見す。若し夫れ無邪氣にして一點の汚れなく、溫和にして剛愎の氣なきを見る時は、予は端なくも吾等の師が『爾を省みては小兒たれ』と言ひ給ひしを思ひ出づるなり。然れども我友よ、吾等は小兒を退くるを得。吾等は臣下の如く彼等を遇し、常に其の意向に反して之を抑制するを得るなり。之れ何故ぞ、吾等は何處より斯る權利を得たりしや。之れ只〻其の年長なるが爲めなりや、又經驗に富みたるが爲めなりや、天にありては渠等は吾等と等しく尊敬せらるゝなり、何故に渠等は地にありて同樣の尊敬を受くる能はざるや。渠等は只〻吾等がありし所のものにてあるのみ、されば……吁、我友よ、若し之を書したらんには、予は御身の忍耐も予の精神も共に盡き果てんことを恐る。

第十二翰　七月六日

紗娘は實に一個の女神なり、其の行く所、悲しみを變じて喜びとならざるはなし。昨日午

後、渠女は其小さき妹等を引連れて散歩に赴けり。予は之を聞き、直ちに其後を追ひ、共に一里半許の途を逍遙せり。其の歸途、吾等は暫く予が常に愛せる例の泉水の邊りに憩ひぬ。紗娘は壁の上に腰かけ、吾等は其前に立てり。予は端なく先に吾心の未だ亂れざりし前（吁今は紗娘の爲に亂れたりと謂はん）、予が寂然として茲に過したる幾多の時間を思ひ起しぬ。予は思へり、「愛らしき泉よ、其後予は那程まで予に快樂を與へたりし爾の爽やかなる流をば、全く忘れたるが如く打過ぎしなり」。かく考へつゝ、熟々四邊を見廻せる時、予は恰も小兒の一人が茶碗に水を汲み、急いで登り來れるを見き。予は紗娘を眺めたり――、予の心は尤も爽やかなる感情を以て充たされぬ。此時先きの小さき娘は、茶碗を持ちて近けり。マリアンネと名くる他の妹は之を取らんとせしに、渠女は直ちに愛らしき聲にて叫び出だしぬ。『否、紗娘姉は第一に之を飲まざるべからず』。予は其愛らしさに堪へ得ず、之を抱きて接吻せり。渠女は泣き初めたり。紗娘は予に其餘りに手荒かりしを告げぬ。斯くて紗娘は此小さき妹の手を取り、泉水の邊りに下り行けり。『そこに、アメリア、喇の顏を洗へ、我愛するものよ、洗はば凡て皆癒るべし』。渠女は其小さき手を水に入れ、其頰を擦りて先の接

吻の痕を洗ひ落さんと務めたり。紗娘は其全く擦り去られたるを告げしも、渠女は拭へば拭ふ程善からんと思ふてや、尙ほ切りに拭ひ續けたり。おゝ我友よ、予は洗禮の儀式に臨みても、尙ほ此の如く注意して見ることあらざるなり。其再び登り來りし時、予は喜んで紗娘の足下に俯し、人間を淸むるの女神として、渠女を崇拜せしも知るべからざるなり。

其夕、學識を以て有名なる紳士に此事を話したりしに、予は全く反對の意見を聞きたり。渠は不注意なる行爲を以て紗娘を非難して曰く、『渠女は其當を失せり、何となれば、之れ小兒の依賴心を奬勵するものなればなり』と。吁、人間普通の情性と當今の學問の一致せざる事、何ぞ一に茲に至るや。

第十三翰　七月八日

何故に予は只の一目見んが爲めに斯くまで心を勞し、斯くまで情を苦しむるや。數日前紗娘は其友の急病の報知に接して之に赴けり。予は家内の人々と共に之を門に送りたり。予は紗娘の目を打守れり。思ふに其の視線は門に立てる人々を一々見廻し、決して予を見詰めざ

りし——。されど予は渠女の眼の定まらざるにも關せず、始終其顏を凝視して、決して他物を見ず、予の心の中にては幾百千の別を爲せしなり。されど渠女は予に一目をだにかけざりし。やがて車は馳せ行けり、予は涙を以て之を見送れり、渠女は車の窓より顏を差出して後を見返れり。嗟呼、其眼は誰に向つて注ぎしや。そは予なりしか、如何なる妄想！。されど妄想も尙ほ以て心を慰むるを得べし。そこに未だ其眼の予の爲めに注ぎたる幾分の望の存するなり。吁、予は徒らに我心のかよわきを認む。

第十四翰　七月十日

我友よ、予はいかに妙なる顏をなしたりと思ふや——、若し予の仲間の中にて紗娘（シャーロット）の名の談話の中に聞えたる時は、殊に予が如何に渠女を好むやを問はれし時は。渠女を好むや！、吁予は斯る冷やかなる問を忍ぶ能はざるなり。若し渠女の高絕なる美を見て、單に之を好むと云ふが如き人あらば、之れ如何なる無情漢ぞや。如何に予は渠女を好むや！、恰も之と同じく、數日前、予に如何に予がオッシアンの詩を好むやを問ひし人ありき。

第十五翰　七月十三日

予は渠女の眼付にて、明らかに吾情の渠女の心を感動したるを認むるなり。予は己に媚ぶるの心の漸く我が胸裏に生じ來れるを覺ゆ。此の心は常に予に囁いて曰く——予は思ひ切つて此嬉しき望を告ぐべきか——、卽ち——渠女は予に戀慕せり、予に戀慕せり！、之を思へば予は吾身の天上に浮き上れるが如き心地するなり。如何に、——然り、予は敢て我友に語るべし、何となれば、御身は容易に之を解すべければ。——如何に予は渠女の愛情に接してより、吾と吾身を高めしや。之れ果して慢心なるか、否、事の眞なるを如何せん。然れども若し渠女がアルベルトの名を言ふ時は、而も尊敬と從順とを以て之を言ふ時は、嗟呼！、予は恰も大望ある軍人が其の官を削られ、其の名譽を毀たれ、其の權力を覬はれ、而して其の劍を捧げて軍門に降るが如き感あるなり。

樛牛曰、淮亭郎の胸中漸く懊惱の衰を見る、喩へば靑天一斑の雲を揭げたるが如し。讀者深く其の變

化に注意して可なり。又曰、談漸く蹙境に入らんとす。

第十六翰　七月十六日

若し偶然に予が渠女の手に觸るゝ時は、いかに吾心臟は鼓動し、血液は沸騰するや。若し予の足が机の下にて渠女の足に接する時は、予は非常に急ぎて之を退く、されど或る祕密なる勢力の爲めに引附けられて、再び之を元の位置に復し、而して最も異常なる感覺を生ずるなり。予は渠女の親友なり、されど——無邪氣なるものよ、渠女は其アルベルトとの結婚の内情を打明かす時、予に與ふる苦痛はいかばかりなるやを察せざるなり。若し夫れ談熱し氣投ずるの餘り、渠女が其手を机の上に置き、其芳ばしき呼吸に接するを得る程椅子を近く引寄する時は、おゝ天よ！、電光の輝も之れより鋭き感動を與ふる能はざるなり。吁我友！、予は敢て此の瞬間の思ひを御身に告ぐべきか。されど御身は能く吾心を知る、そは決して敗德に非ず、只心の微弱なゝのみ、實に心の甚だ微弱なるのみ。若し弱心は敗德の種子なりと謂はば、予又何をか言はんや。

予の渠女を見るや、恰も神女の如し。渠女にして予の前にあらば、予の望は則ち足りぬ。其麗はしき顏を見る時は、予は實に一種言ふべからざるの喜びを感ずるなり。渠女は音樂を愛せり、若し其の手琴を取りて一曲の哀歌を奏する時は、予が心のあらゆる悲しみは解け去るなり。予は玆に初めて音樂の憂を散ずるの力あるを認めぬ。若し夫れ憂心悶々として心亂れ情狂するの極、一念自殺を思ひ起すの時に當りては、其の微妙なる曲は再び精氣を蘇生せしめ、迷ひの霧を拂ひ、失望に俯きたる頭も忽ち圓滿なる喜びの笑ひと化するなり。

第十七翰　七月十八日

若し此心にして愛情を缺きたらんには、三千世界を擧げて之に與ふるも亦何の樂しみか之れあらん、恰も之れ光なき魔燈の如し、星火一點すれば萬象悉く白壁の上に顯はるゝなり。良し愛情の結果は一時の幻影に過ぎずとするも、之れ何かある、若し昔日の夢痕を尋ねて其樂しみを想ひ起す時に當りては、吾人は尙ほ以て幸福なるを得べきなり。

予は今日紗娘（チャーロット）を見ざるべし。思ひ設けざる客の來りて、餘儀なく予の外出を停めたればな

り。されど予は事に託し、使を遣はして書を紗娘（チャーロット）に送り、心潛かに望むらく、渠女を見ざる代りに、せめては其手に觸れたる物を獲んと。予は如何に耐へ兼ねて使の歸りを竢ち詫びしや、又いかなる喜びを以て渠女の返事を受取りしや、又予の戀慕の情を使者に隱さんが爲めに、いかなる困難を以て予の愛情を抑へしや、是等は一に御身の想像する所に委（ゆだ）ぬべし。聞く、螢石は日光に晒（さら）さるゝ時、其の光線を吸收して之を保存し、其後暗中に置く時は永き間其の光輝を放つと、渠女の返書も亦之に同じ。之を讀む時は、之を書きし時用ひたる愛らしき眼の光、之を使者に渡したる眞白なる手の形を反射し出すなり。されば予は世界の王冠を以ても之に代へざるべし。我友よ、笑を忍べ、此世の幸福は何れか空像に非ざるべき！

予の本篇を譯するや、原文の意を失はざるを期するのみならず、一字一句をも猥りに改造せざらんことを務めたり。然れど、蜻蛉の翼は以て蒼漢を磨し難し、筆端動（や）もすれば澁滯し、時に生硬半熟の文字あるを免れず。吁、小才樗牛の名は少しも惜しむに足らず、吾れ遂にゲーテ千古の名を瀆すあらんことを恐る。區々の微衷、讀者乞ふ之を憐れめ。然らざれば淮亭郎恐らくは「笑ふべき說教者」となり了らん。

譯者識

第十八翰　七月十九日

今曉、予は起上り、窓を漏れて輝ける朝日を見んが爲めに靜に戸を押せば、天麗（うらら）かにして氣極めて清し。予は叫びぬ、『予は渠女を見るべし』と。然り、予は紗娘（チャーロット）を見るべし。予は他に此日の殘りを費さんと欲する何等の望をも有せず、其嬉しき願の中には、あらゆる——あらゆる樂しみの包含せらるゝなり。

第十九翰　七月二十日

御身は予が外國公使の任用を承諾して、共に巴里に赴くべきを忠告し給へり。然れども予はいかにしても之に從ふ能はず。予は隸屬と虛禮とを惡（にく）む、況んや御身が予を推薦したる彼の公使の、極めて頑愚にして傲慢なる人物なることは、世人の能く知る所なるをや。御身は又予が常に佚遊せずして、何か業務を取らんことは予の母の願なりと言へり。予は其の淺はかなる考を笑ふなり。予は果して平生働き居らざるや、予は牛馬と共に手足を以て勞働せん

よりは、精神を以て勞働するの遙に人間らしきを認むるなり。吁、此の世界は凡て悲哀に滿つ。彼の己を樂しましめんが爲めに自己の本性に反したる、心にもなき行ひをなし、强いて富と名に齷齪する者は、予の見る所を以てすれば之れ一個の痴漢のみ。

第二十翰　七月二十七日

予は餘り繁々渠女を見るなからんと決心せしもの、夫れ幾度ぞや。されど戀する人の決心は、又いかに微弱なるものなるぞ！、吁、口は行ひよりも容易きなり。毎夜予は「明日こそは行かじ」と斷言すれども、若し明日の來る時は、抵抗すべからざる一種の勢力ありて、予を渠女の面前に導くなり。其別れに臨みて、若し渠女が『妾は御身が再び妾を見んことを望む』と言はば、予は果して行かざるを得べしと思ふや。予は又時々日和の麗かなるに誘はれワルハイムに向て徜徉するなり。予の其所に達するや、渠女の家には僅かに一哩を隔つるのみ。かく近傍にありながら、予は情なくも歸り得べしと思ふや。否得べからず。予は祖母より聞きたる磁石の大なる山の昔話を記憶せり。其の引力は甚だ强盛にして、若し或る距離の

内に器物を持來る時は、釘は飛び、ネジは離れて岩山に附着し、只〻木板のみきれ〴〵に殘ると云ふ。我友は容易に此引例を了解するならん。世界はよし斯の如き山を以て充ちたりとも其の引力に於ては紗娘に優ること能はざるなり。

第二十一翰　七月三十日

アルベルトは到着せり。而して淮亭郎は去らざるべからず。若し彼にして最も價値ある、最も貴むべき人にして、而して予は何れの點に於ても彼に劣るものならんには、予は彼れが斯くまで豐かなる女性の美と圓滿とを有するを見るを忍ぶ能はざるなり。吁、彼は定まりたる花婿にして、而も何人も尊敬すべき學識ある一個の秀才なり。幸ひにも、實に幸ひにも、予は彼と紗娘との初めの面會に居合せざりき。若し居合せたらんには、吾胸は恐らくは張り裂けしならん。而して彼は考へ深くも予の居る前にては、紗娘に對する彼れの愛情をば抑制して外に見はさざるなり。此一事を以ても、彼は天の惠みを受くるに足る。彼は又甚だ予に親切なり、されど予は慥かに知る、之れ全く紗娘が彼に向つて予を賞贊したるに依ること

を。凡て婦人は、常に競爭者の間を調和するに極めて敏慧なるものなり、時としては其の盡力の空しく破るゝことあり。されど經驗は必要なり。何となれば、若し其の成功したる時は主として其益を受くるものは卽ち婦人自らなればなり。

何にもせよ、予はアルベルトに對して予の尊敬を制する能はず。渠の性質の平淡なるは、予の常に掩はんと欲して掩ふ能はざる烈しき血氣と著るしき相違なり。嫉妬の念は、御身も知る如く予の尤も卑しむ所なり、彼は少しにても其色を示せしことなし。渠は予を以て學識あり判斷力ある人なりと思ひ居るが如し。然れども予が紗娘に對する愛情の愈〻加はる毎に吁、予は愈〻彼れの幸福なるを見、愈〻吾身の憫れなるを認むるなり。予は渠等二人が相對するの時にありて、其間一點嫉妬の念なきや否やを知るに由なしと雖も、設令ひ予をして渠の地位に立たしむるも、よもや斯の如く常に平和に、常に怡容あること能はざるなり。おゝ愛よ、愛よ、爾を求むるものは何故に苦しまざるべからざるや！。

アルベルトの位置は如何樣にあるにもせよ、予が紗娘の前に得たるあらゆる快樂は、今や其終を告げざるべからず。之れ心のかよわき爲なるか、將た又理會力を失ひたる爲なるか、

そは何れにても、御身の思ふ所に一任すべし。嗟呼！予は知る——、予は其の何物にてあるやを感ずるなり。顧みれば、アルベルトの到着の前にありて、予は已に今知る所のものを知りしなり。予は素より能く知れり、渠女に向つて一言の口實を有せず、否、其一髮をだも我有とする能はざるを。是れまで予が爲したるあらゆる想像は、一に渠女の高絶なる美に迷ひたるが爲のみ。吁、今や財寶の眞の持主顯はれぬ、予は已むを得ずして永く之を見捨つるに臨み、尙ほ今更の如く心駭き、茫然として殆んど爲す所を知らざるなり！。予は偏へに我身の薄命を悲しみ、我心のかよわきを卑しむ。されど之にも倍して、彼の回復の道なき時は之を思ひ諦めざるべからずと說くが如き世の冷淡なる人々を卑しむなり、予は斯の如き淺薄なる哲學者——否、笑ふべき說敎者を耐ゆる能はず。

予は森の中を徜徉し、漸く疲勞を覺えたる時は、紗娘の處に歸る。予は能く渠女のアルベルトと共に花園の奧の亭樹に坐するを見るなり。之を、此の光景を見て心亂れ氣躁ぎて恰も小兒の如く色々の馬鹿らしき遊びをなすなり。今日紗娘は予に向つて曰く、『願くはイマ少しく心を和げよ、御身の烈しき精神は實に警戒すべきなり』と。吁、我友よ、予は敢て告白

す、予は近來アルベルトの動靜に注意し、其の用事の爲に外出するを見る時は、予は其の留守の間窮に紗娘の許に行き、渠女の單獨りにて居るを見る時程幸福なるはあらざるなり。

第二十二翰　八月八日

疑ふ勿れ、我友よ。先に予が冷淡なる助言を爲すの人を嘲りて、『予は決して斯の如き笑ふべき說敎者を耐ゆる能はず』と言ひし時に當りては、決して御身を其一人なりと思ひしに非ざるなり。御身の言ふ所のもの、誠に善し、されど予は只〻一の異論を申立つべし。凡て二個の相反したる方法の、吾等の前にある時は、吾等は其何れを取るべきやを知り難きなり。人心の異るは、恰も其面の如し。然らば則ち予が御身の說の正しきを認めながら、尙ほ之を離れて別に異論を述ぶるとも、願くは之を非難するを止めよ。

御身は言へらく、予は紗娘を得るの望を有するか、將た有せざるかと。吁、そは何れにせよ、其の歸する所は何物ぞ。第一の場合に於ては、予は言ふまでもなく十分の力を盡して、苟くも予の望を遂ぐるあらゆる機會に注意すべし。第二の場合に於ては、御身は予の男らしき、不幸なる戀慕として全く之を忘れ去るべきを言へり。我友の言ふ所一々其理に當らざるはなし、されど失禮ながら之を見捨てよと敎ゆるは、之を忍べよと敎ゆるよりいか程容易なりと思ふや。若し玆に重患に惱みて其の身體の日に增り衰へゆく極めて憫れなる病人ありとせんに、御身は之に向つて、斯の如く苦しまんよりは寧ろ毒藥若しくは剃刀を取りて一時に其の苦痛を免るべしと勸め得べきや。斯く言はば、御身は之れと同樣の例を引いて予の言に答へん、卽ち誰か其身を救はんが爲には其一足を斷つを躊躇すべきやと。夫れ或は然らん、是に至つて予は答ふる所を知らざるなり。吁、我友よ、予は屢〻此の危難を免れんと決したり、然れども一も他に安身の地を見出す能はざるを如何せんや。

第二十三翰　八月十二日

疑ひもなく世に愛すべき人物アルベルトの如き者はあらざるなり。昨日彼れと予との談話は甚だ奇妙なるものにして、亦價値ある議論にてありき。昨日予の訪問したるは、彼に別を告げんが爲にてありし。何となれば、予は此の數日の間を山中に過さんと思ひたればなり。

彼れの室を見廻はせし時、予は不圖二三の短銃の壁に懸れるを見て、予の旅行の間之れを貸し呉れんことを彼に要めたり。彼は答へて曰く『若し御身にして玉籠めするの勢を取らば、予は喜んで之を貸すべきなり』。予は其中の一を執りて之を眺めたり。彼れ尙ほ言を續いで曰く『予は嘗て予の保護の爲に非常なる過失をなせしなり、其れより後、予は決して予の所持せる火器に玉籠めせしことなし』。予は其精しき譯を求めしに、彼れ曰く『予は先に三ケ月程、田舍の或友人の許に居りし事あり、短銃を用ゆることなくして予は玆に尤も安樂に暮し居たり、されど或雨天の日の午後、何の用事もなければ、不圖考ふる樣、夜に入らば此雨に乘じて盜賊の入り來らんも測られず、若し然る時は此の短銃も何か用ゆる所あらんと。是故に予は從僕に命じて之を掃除し且つ彈丸を籠めしめたり、然るに從僕は何の考もなく只〻下婢を驚かさんと務めたりしに、思ひきや一個の彈丸は（天は之を知り給へり）忽ち飛んで下婢の右の手を貫き、其の拇指をもぎ去りたり。御身は容易に此時の予の迷惑を察し呉るべきなり。此れより後、予は決して予の室内にある短銃に玉籠めせず。吁、人は事を前見する能はず、また差し迫りたる危難を避くる能はず――思へば吾等の注意は凡て益なきなり』。

渠の行爲は誠に正直なり、而して其の談話の中に餘り意味弘くして疑はしき事ある時は、渠は己れ獨りにて之を斷定せば後に誤謬あらんことを恐れ、極めて曖昧なる言語を用ゆるなり。是故に其終りに至りて、渠の意見の何れにあるやを知るに苦しむこと少からず。例の如く渠は此時も亦深く此問題に說き入りて、談漸くくだくくしくなれり。予は最早や之に耳を傾けずして、吾身の上を深く考へ居り、爲すこともなく拳銃の口を予の額上に擬したり。『御身は何を爲さんとするや』。アルベルトは斯く叫びて、吾手より急に拳銃を取り去りぬ。予は答へり、『そは發せざるなり』。渠は語氣鋭く、『良し發せざるにもせよ、何の用ありて斯る動作をなさんとするや、予は如何にして人が自ら己れを擊つ程狂氣となり得るやを驚く。只〻此事を考ふるのみにても予は身慄ひするなり』。予は徐に答へて曰く、『何人にても或動作を見て一概に之れは狂氣なり、之れは善良なり、適當なり、或は不適當なりと斷言するを得るものなりや。御身の今の荒々しき言語は、抑も何を意味するにや、斯の如き動作を起したる意思の秘密は、果して正しく推察し得べきものなりや、將た何所より其の考の本づけるや、又

何故に之れを作すの必要あるに至りたるやを正しく推察し得べきものなりや。若し此等の事を十分吟味したる後ならんには、御身の斷言も穴勝大早計に非ざるべし』。

アルベルトは言へり、『されど抑も動作には其の如何なる思想より出でたるやに關らず動作其物の性質によりて、元來罪となるべきものあるなり』。予は格別之れに注意せず、尙ほ其言を續けて曰く、『然しながら、茲に少しく例外のものあるなり。元來竊盜は何人も罪として認むる所のものなり。然れども茲に一個の不幸なるものありて、極貧に迫り、已むを得ず其身及び餓死せんとする其の妻子を救はんが爲に或富家より僅かの財物を取りたりとせんに、渠の行ひの中に憫れむべきものと惡むべきものと何れか多きや。又何人か其の不貞なる妻の命をば、正當なる憤怒の犧牲となしたる夫をば極惡なる人殺しと呼ぶべきや。又何人か詐りの約束に乘りて、惡者の奸計に陷りたる憐れむべき少女をば淫奔者と呼ぶべきや。さしも嚴重なる吾等の法律も、斯る場合には情狀を酌量し其罰を緩ふすべきなり』。アルベルトは言へり、『されど其等の例は決して茲に適用すべき限りにあらず。彼の熟考の遑なく不意に起りたる烈しき感情の爲に制せられたる人は、之れ一個の醉者、若しくは狂人として見る

べきなり』。予は冷笑して叫んで曰く、『おゝ世の所謂道德家よ、如何に平氣に、如何に無情に、諸君は亂心癲狂の事を談じ得るや。予は一度ならず、屢〻酒の結果を經驗せり、而して其時にありては、予は最も烈しき感情の爲にいかなる罪にても犯しかねまじきを知りたり。予は少しも之を告白するを慚ぢず——、予には之れ一個の誠しめにてありしなり。吁、彼の非常の才を顯はし、非常の業を成すの人は、何れか醉者の如く見えざるべき、何れか狂人の如く見えざるべき。試みに見よ、世人は、著るしく寛大に勇敢なる若者を何と云ふや、渠は酒狂せるに非ざれば其の感覺を失ひたる者のみ』。アルベルトは之を遮つて曰く、『之れ皆御身の荒唐なる考なり、御身の論は常に區域を超ゆるの癖あり、今も自殺と勇者の働きとを比較するが如き、之れ全く論外に涉りたるなり。吁、自殺——、之れ實に人心の微弱なるより起る。何となれば、設令ひ死は恐ろしきものにもせよ、極貧の境遇に迫りて生きる甲斐なき生命を忍ばんより、死するは遙かに容易なる業なればなり』。

今や予は殆んど此問題を撤去せんと欲したり。何となれば、予は予の性として、溢れ出づる感情に反して心にもなき斯る無味なる俗論を爲すを忍ぶ能はざればなり。されど予は直ち

に輕蔑の念を抑へ、稍〻熱心の語氣を以て曰く、『御身は今自殺をば弱心と呼び給へり、さりながら、少しく考へ見られよ、予は單に其名によりて輕々しく思ひ誤らざらんことを願ふなり。玆に一の國民ありて、久しく專制政府の殘虐なる首枷に苦しみ、遂に反旗を擧げて其鎖を毀ちたりと假定せよ、御身は斯る謀反をば微弱なりと呼ぶべきや。又玆に一人あり、火事の時、其家を救ひ其の家財を保護せんが爲に猛火の中に飛び込みたりと假定せよ。又人ありて、正當なる憤怒に乘じて己を害するの敵を擊ちて之を敗りたりと假定せよ。是等の人は果して弱心なりとして非難されべきものなるや。而して我善良なるアルベルトよ、若し抵抗にして勇氣の證據なりとせば、何故に最強最大なる抵抗を以て獨り微弱と呼ぶなるや』。

アルベルトは暫く無言なりしが、やゝありて答へて曰く、『あらゆる其等の引例は、失禮ながら、予思ふに、猶ほ此問題には關係少きなり』。予は答へり、『是れ或は然らん、予は元來二物を結合するに少しく極端に走るの癖あるなり。然らば則ち吾々をして他の方法によりて此問題を說かしめよ。吾々をして、他の生活の荷擔を、人々の一般にかくまで貴重なる生活の荷擔を下ろさんと決心したる其心の位置はそもいかにあるやを問はしめよ、而して吾々を

して、また其の感情の中に入らしめよ。何となれば、斯る吟味なくして此問題を公平に說かんことは到底得べからざればなり。

予は尙ほ言を繼いで曰く、『抑も人間の心は一定の限界を有す。樂しみにせよ、悲しみにせよ、或は苦しみにせよ、只〻一定の範圍內にありて之を受け忍ぶるを得。若し其度を越えたる時は、心は則ち盡きたるなり。吾々は玆に人の强勇なりや、將た微弱なるやを問ふにあらず、只〻其身に落來りたる、心の、若しくは肉體の害を忍び得るや否やを討究せんと欲す。予の說を以てすれば、彼の自ら其の生活を停めたる人を呼んで微弱者となすの不當なるは恰も渠を以て危險なる熱病の犧牲となりたる者と呼ぶの不當なるに等しきなり——』。此時アルベルトは予の言を遮つて曰く、『おゝいかに御身の說の誠らしさよ』。予は答へり、『おゝ否、予は今一歩を進めて御身の疑ひを解かん。玆に一個の死に瀕したる病人ありと假定せよ、其の身體は太く犯され、其力は殆んど盡き果てゝ、今や手足をも動かす能はずと假定せよ。然して後、吾々をして此有樣を心に當嵌めしめよ。吾々は必ずや見ん、確實なる思想は漸く去

り、精密なる理會力も漸く消え、心の中には只、猛烈なる感情のみ跋扈して、あらゆる以前の思想を打破するを。此時に當りて、いかに賢き沈着なる人と雖も、只、無益に此憫れなる者を打睹るのみ、彼れの與へ得る如何なる忠告も、又何の效かあるべきや。彼は恰も、其友の終焉の際、其傍に座し居りながら、自己の力の一小部分をも之に分ち得ざる人の如きなり』。

以上の如き論法は、アルベルトの說にては餘り漠然たるなり。予は其の議論の例として近頃自ら水に投じて死せる一少女の話を彼に與へぬ。此話は彼れの已に知る所なれども、此時予は故らに之を反復せり。『ア、無邪氣なる若きものよ、家の内の狹き世界に人となりて浮世の風に當てられず。あらゆる渠女の樂しみは、只、日曜日に野外に出で、一二回の舞踏を爲すに過ぎず、其閑ある時は近所の人々と浮世話か或は村の小やかなる喧嘩の話にて其日を暮すのみ。斯る所へ渠女は不圖一個の若者に邂逅し、戀愛の情何時となく萠し來れり。此時より渠女のあらゆる望みは悉く彼れの身に集れり。此世のあらゆる物は又渠女の目に觸れず、彼れ只、一人其の注意、其の思想の目的となりぬ。あはれ其の身を殺すの毒とならんとは夢にも知る由なく、渠女は只、妄像を樂しみて、あどけなくも彼れのものとなるより外の望みを有

せざるなり。渠女は喜んで其身の彼れの妻とならんことを夢み、又喜んで夢の眞ならんことを祈れり。渠女の望みは遂に幾度となく約束と熱心なる誓ひにて固められぬ、渠女の喜びは殆んど限りなし。渠女は、終に其の愛情の本尊を抱かんとて其腕を擴くれば、こはいかに、情けなき欺き方！。渠女の戀人は詐りなり、彼は渠女を見限りたるなり。石の如く！、驚きて！、渠女は其身を廻る悲哀の海の前に茫然として立てり。四方を顧みれば凡て闇々として望の一の光だになし。彼れ、吁、其人獨りの爲に渠女の命を繫ぎたる彼は去りぬ、永久去りぬ。而して今や全世界は渠女には恰も虛空の如く見ゆるなり。よしや其の周圍には幾千人の己を慕ふ人ありとも、渠女は單だ獨の如く、永久單だ獨の如く覺ゆるなり。斯の如く眼も眩れ心迷ひ、斷腸の思ひに追ひやられて遂に水墓の中に投じたるなり。而してアルベルトよ、以上話したる如きものは多くの人の歷史なり、いかに之れ病者の話と同じからずや。渠女は其身の苦を逃るゝには之より外の方法を見出し得ざりしなり。其の精力は全く竭き果てゝ彌増し來る悲哀と爭ふ事能はざりしなり。かくして死は其終りなりき。此憐れむべき話を聞きながら猶ほ『心弱き少女かな、何故に渠女は一時の其の感情を變ずるまで待たざりしや、時

過ぐれば其悲しみは和げらるゝを得べし、然る時は渠女は他に戀人を求め得て永く幸福なるを得べかりしなり」と言ふが如きは、又何等の痴人ぞや。渠は亦た定めし言ふならん、「馬鹿者よ、渠は熱病にて死せり。何故に渠は其の血液の冷え、其の精氣の回復するまで竢たざりしや、若し竢ちたらんには渠は全癒して今尚ほ生存するを得べかりしに！。」

アルベルトは此の比較を肯んぜずして尚ほ種々の異論を述べたり。殊に予が先に引例した る少女に對しては、自ら水に投じたるは其の無學にして識見狹きが爲なりと論斷せり。吁、渠は理解あり、教育もあり、見聞も弘き人にして、亦能く自殺を行ひ得べきことを解せざるなり。予は答へて曰く、『吾が善良なるアルベルトよ、人の理解力はいかにあるにもせよ、其の教育はいかにあるにもせよ、渠は尚ほ人なり、其の感情の汪溢する時に當りては、道理の力極めて微弱なるものなり、然のみならず——、今は最早や言はざるべし、吾々は他日此問題を再びすべし』。斯く言ひ捨てゝ予は急に別を告げたり。吁悲しい哉、吾胸は一杯になりしなり。吾等は互に其意を解せずして別れたり。人の相互に其意を解するは、如何程難き事なりや！。

第二十四翰　八月十八日

初めは人の幸福の組成したる其事の後に至りて悲哀の原因となるは果してあり得べき事なりや。先には那程迄に予の心を勵まし、予の情を樂しましめ、予に與ふるに一種想像の樂園を以てしたる自然に對する愛情も、今や堪ゆべからざる苦痛となりて、絶えず吾心を惱むるなり。如何なる喜びを以て予は先に矗立せる岩の頂より、見渡す限り烟霞の中に見え隱れなる縹緲たる河流を眺めしや。其時は我眸に入るものは爽かに、麗らかに、皆活動するが如く見ゆるなりき。山は蔚蒼として茂林夏尚ほ寒く、窈窕たる谷際には芳草路に沿ひて咲ふ、さゝやかなる流は靜かに巖間を縫ひて、面に數片の雲を浮ぶ。予は木間漏る小鳥の歌を聞けり。予は數しれぬ小やかなる翅蟲の青みがかりたる光の中に踊るを見ぬ、暮色漸く掩ひ來りて、鳥の音も聞えずなる時に當りては、此等の蟲の清らかなる音は獨り予の注意を促すなり、あれたる巖は苦を以て青み、やせたる土は花を以て赤らむ、日は麗らかに暖かく、萬象共に蘇生するが如く、吾心亦之れに暖められぬ。予の心は一種言ふべからざる喜びを感じ、漸く無限

の考に思ひ至るに及んでは、吾れと吾身を忘るゝなり。大いなる山は雄然として吾が頭上に聳え、嶄々たる斷巖は吾が脚下に横り、奔湍は吾が側に轟き、風は天外より來りて吾が袂を掠め、遙に平原を流るゝ川々は、あらゆる遠方の聲を反響し來る、天を望めば茫々たり、地に俯するも茫々たり、生を其間に受くるもの、種類、形狀、勝て數ふべからず。思へば思へば人の其小さなる家より首を出して大膳にも『我は萬物の靈長なり』と叫ぶ可笑しさよ！。吁かよわき人間よ、爾の眼には萬物凡て小ならざるはなし、何となれば、爾自ら小なればなり。彼の嶮岨なる山嶽も、人跡なき沙漠も、或は大海の祕密なる藏物も、凡て皆「永遠」の呼吸に由りて生出したるものなり。人夫れ何物ぞ——。思ふて茲に至れば、予は吾等人間の實に果敢なきものなるを覺ゆるなり。おゝ此等の沈思の際にありて、飛鳥の高く雲際に舞へるを見、幾度か空を凌ぎ、雲に御して空間の無窮なるに遊ばんと欲するの願を起せしや——、永久の喜びと圓滿なる幸は只、夫れ其處に見出し得べきのみ。

おゝ我友よ、單に此等の時を思ひ出すも尙ほ以て心を慰むるに足るなり。されど深く此等の感情に考へ入る時は、以前の身の非常に幸福なりしを想起し、倍々我現在の身の憫れなる

を感ずるなり。吁、糜面落ちぬ、光景一變しぬ。永久なる生活の鄙きたる望みの代りに、今や限りなき苦しみの外何物も我目に見えざるなり、歡び去りて悲しみ來り、希望去りて失望來る、嗚呼吾れ之を言ふに忍びんや。各瞬間は皆予を滅すの毒手なり、而して各瞬間、吾れ自ら己を滅するなり！。吁、我友よ、設令ひ全村を沈沒するの洪水と雖も、全市を破壞するの地震と雖も、かくまで痛く予を感じ予を苦しむるものあらざるなり。顧ふに彼の自然の萬物を作るや、常に其物自ら滅するの道理を含めるなり。今や予の精神を殘食する所のものは卽ち此力なり。吁、予は一の幸福を見る能はず、全世界は恰も恐ろしき惡魔の間斷なく呑噬し居るが如きなり。

第二十五翰　八月二十一日

朧ろげなる夜半の夢、漸く覺めて朝起くる時、予は空しく渠女を擁せんが爲に予の腕を弘ぐるなり。幻影の中、彼の草綠に花芳ばしき邊り、渠女の手を執りて其上に接吻したる光景を描出し、空しく渠女を索むるなり。悲しい哉、寤寐恍惚の間、予は嬉しながら予に渠女の

觸れたるを想ふ。されど全く目覺めし時は、涙泉の如く吾眼より流れ、吾胸は一杯に迫りて悲しみ喘ぐなり、あらゆる望を失ひて予は失望に服從し、而してあらゆる未來の哀苦を見るが如きなり。

第二十六翰　八月二十二日

予の位置はいかに哀れむべきものなりや。予の活潑なる元氣は空しく失せて、鬱憂なる懶惰に陷りぬ。予は怠慢を耐ゆる能はず、さればとて事業を營むこと能はず。予は考ふるを得ざるなり——。考は只、吾苦を增すあるのみ。予は少しも自然の美に感ぜず、書册も最早や予を慰むる能はず、ソコには予の心を左右する唯一の的あるのみ、其他のものは皆悲しみの媒となる。時としては朝と共に起き出づる時、予は思ひ出すなり、若し予が先に工藝家にでも爲り居りたらんには、此長き日を暮すの仕事を有し、且つ之によりて幾分か予の憂を散ずるを得たらんにと。予は又幾度かアルベルトの手紙を見て、其身の上を羨みしや。又幾度か若し予にして渠の地位に於てあらんには、予は幸福なるべしと思ひしぞや。吁、渠の地位に於

て！、予は實に幸福なるべきなり。其時は紗娘は——。されど之について最早や言はざるべし。

予は御身の言に從ひ、予が適任の位置を得んが爲に數〻彼の大臣に書を送らんと欲したり。予は渠の周旋によりて、餘り煩劇ならざる職を受くるを得んと信ずるなり。されど深く考へ見れば、端なくも昔話にある馬の、轡と鞍とを着けて直ちに其の自由を失ひしを後悔したるを思ひ出づるなり。予は自ら其何れの途を取るべきやを知らず。予は能く吾性の定まりなきを知る、されど現在の處にては、此身、此心、共に戀慕の外、何事をも考ふる能はざるなり。

第二十七翰　八月二十八日

我友よ、今日は吾が不運なる誕生日なり。朝、起出づるや否や、予はアルベルトの使より一個の小なる包を受け取れり。思ふに之れ紗娘の手によりて差向けられたるなり。予は之を開きしに、其中に水色の流蘇あり、之れ予が初めて紗娘を見し時、渠女の胸に着け居りし所のものにして、其後予が屢〻乞ひ求めし物なりき。

アルベルトはホーマーの小さき詩卷二册を寄せたり。是れ亦、予の所持せる詩卷は大にして携帶に不便なるが故に、平生予の熱望したる所のものなりき。如何に渠等は予を喜ばさんと務むるや、此等の小やかなる友誼の標は彼の高貴の人々の贈酢なる美麗なる贈物に優ること幾段ぞや。予は熱心に予の唇に流蘇を押し付けぬ。予は坐ろに懐舊の念に堪へず、思へば空なる先の幸福なる月日を思ひ起しぬ。吁、其日と今日とは抑も如何なる相違ぞや、されど予は之を哀しまざるべし。生活の最も美しき花は其開くや否や凋むなり、或は其の充分開くの期に達せずして枯れ落つるなり、其實を結ぶものは如何に僅なりや、萬一其實を結びたりとするも、其の成熟するものはいかに稀なりや。よしや其二三は熟したりとも、悲しい哉殘りなく腐れ了るなり。時維れ中夏、天氣極めて好し。予は數〻紗娘の菓園を訪ひぬ。予木を攀ぢて渠女の爲に梨子を取れば、渠女は〻に立ち、其の前掛を擴げて之を受くるなり。

譯者曰、ゲーテは、一千七百四十九年八月二十八日に生る。

第二十八翰　八月三十日

如何に不運なる身なりとは言へ、我情は何故にかくまで亂れたりや。予は紗娘にの外は一の祈りをも捧げず、渠女は予が想像の描き出す唯一の的のみ。渠女に關する物を省きては、予は予の周圍にあるあらゆるものを放棄するなり。渠女の目前にある時は、予はいかに幸福なりと思ふぞ。されど渠女と離るゝの已むを得ざるの時に當りては——。おゝ、我友よ、胸は喜びの波を打ち、嬉しさ餘りて前後をも打忘れ、結ほほれたる胸の苦しみの涙となりて解け去る其時——、其時渠女と哀しむべき離別の已むを得ざるに當りては！。予は野原をさまよひ廻り、嶮岨なる岩石を攀ぢ、或は叢の中に突入りて荆棘の間に我身を引き搔き、成るべく他物の刺擊によりて、以て吾悲しみを緩うせんと企つるなり。又或時は草木も眠る眞夜中頃、予は寂しき林の中に分け入り、銀の如き月影のもと、變りたる木の上に吾身をもたれ、亂る心を靜めんが爲に日の出づるまでソコに眠るなり。おゝ、天よ！　獄室、鐵鎖、囚衣、是等は予が今耐ゆる所のものに比すれば又何ものぞや。——いざさらば、墳墓獨り吾悲しみを

斷ち得るのみ。墳墓、吁あらゆる悲哀の終局をつぐる彼の安らかなる故郷！

第二十九翰　九月三日

然り、予は此地を去るべし。初め予は疑ひの中にありたり。されど其の親切なる忠告に向て我友に謝す、予は今心を決めたり。予は此一週間以前より心竊かに渠女に離れんと思ひ居りしなり。而して今や斷然之れを決行すべし。渠女は或友人を訪はんが爲に市街に赴けり。而してアルベルト――、アルベルトも亦渠女と共にあり。……何れにせよ、予は成る丈け早く此地を去るべし。

第三十翰　九月十日

嗚呼我友よ、如何に鬱憂の中に予は此夜を過せしや。されど、そは已に過去れり、而して今や予は最も不幸なる事に臨まんとす――。予はもはや渠女を見ざるべし。もはや！。おゝ我友の今玆にあらんには、予は其腕に仆れ伏し、十分吾胸の悲しみを訴へ、以て我苦しみの幾

分を分たんことを求めんと欲するなり。予は予の元氣を保たんが爲めに、最良なる種々の方法を用ひ、吾心の平和を維持せんと務めながら、忍んで夜の明くるを待詫ぶるなり。夜明くれば（予は已に車を命じ置きたれば）、予は遙に此地を去るべきなり。紗娘は今安らかに眠り居れるならん――。渠女は決して、決して再び予を見ることなかるべきを、夢にだも想ひ知らざるなり。

昨日予は急に渠女を辭せり。而して吾等は共に二時間近く談話したれども、予の企を明さざらんことを十分決心してありしなり。おゝ渠女の談話は如何に巧みに、又いかに爽やかなりしぞや。アルベルトは又晩餐の後、紗娘を携へて予と花園に遇ふべきを約せり。予は坂の邊りに立ちて、夕陽の山に沒するを眺め居たり。此處は先に紗娘と予の屢、一所に在りし處にして、亦未だ渠女を知らざりし時、予の愛せる處なり。而して渠女も亦此地を愛するの心あるは大いに吾等の愛情を暖めたり。吾等の願のかく一樣なるが故に、吾等の愛情も亦之れに準じて增したりしなり。この坂より眺望する所極めて弘し。されど予は已に御身に志らせたりと覺ゆ、今や予は予が初めて此靜かなる地に居を占めし時、最初に感じたる樂しき幽寂

の情を想ひ起すなり。そは恰も日の央にてありき。今を以て考ふれば恐らくは之れ未來に於て快樂と悲哀の場所となるべきの祕密なる前兆にてありしなり。

往日の會合と今夕の離別とに就て、殆んど半時間ほど悲しき思ひに沈み居りしに、予は渠等の漸く坂のこなたに近くを聞きぬ。直ちに予は渠等に遇はんが爲に走り行き、震へながら、紗娘の手を取りて之れに接吻せり。吾等の坂の頂に達せし時は、皓々たる玉兎の東山の頂に懸れるを見たり。吾等は色々の雜談をなしながら、遂に森の黑やかなる蔭に達しぬ。紗娘は先づ其中に入りて坐せり、アルベルトと予は其の左右を擁して坐せり。されど吾心の亂れたる、予は靜坐する能はず、予は起上り、渠女の前に立ち、前方に進み、或は後方に歩み、而して後一種昂揚したる感情を以て元の坐に就けり。只見れば氷の如き月光、森の端れに反射し、闇々たる四方の光景によりて一層其輝きを增せるが如し。此の慘憺たる有樣は、恰も予の精神の悲哀と其趣を同じうせり。おゝ我友よ、之れ實に恐ろしき景色にてありしなり。紗娘は遂に言を發して曰く、『予の月影に歩む時は、毎に予が曾て親愛し、而して今は此世にあらざる友人を心に呼び起さざるはなし。其時予は自ら死と未來の世界てふ考に思ひ及ぶな

り、然り』。渠女は尙ほ其語を續けり。而して其の音調は其心の溫柔なるを顯はせり。『吾等は疑ひもなく未來に生活すべきなり。されど御身は如何に思ふや、淮亭郎よ。吾等は今別れて再び互に顏を見合すの時あるべきや。我等は互に思ひ出すべきや。御身は如何に考ふるや』。予は渠女の手を握り、溢るゝ計りの涙を以て答へぬ。『紗娘よ、予は信ず、此世にても又未來にても、吾等は再び相遇の期あるべきなり』。予は之より外に言ひ能はざりし。おゝ我友よ、永別の考の吾心を惱むるの時に當りて、之れ實に殘酷なる問にてありしなり。紗娘は其言を繼いで曰く、『アゝ、妾は惟しむ、曾て吾等の愛敬し、其の記臆は今尙ほ吾等をして畏敬せしむる其人が、已に未來の樂園にありながら、今尙ほ吾等の尊敬を感じ得ることを。靜なる夕方、妾が我母の遺し給へる善惡なき小兒等と共に坐するの時、或は彼等の恰も我母の邊りに集へる如く熱心に妾の周りに聚る時は、妾は恰も母上の實に我身の邊りに在すが如く覺ゆるなり。其時、妾は天を仰いで、渠女の終焉の際、妾が代りて小供等の母とならんと渠女に誓ひたる其約束の、能く實行せられしを遙に天國より見下し給はんことを祈るなり。予は幾度か叫びたりき。「おゝ最も親愛なる母上よ。若し妾にして渠等（小兒等を云ふ）に盡すこと御身の如く

なる能はざれば、願くは之を許し給はれ」と。嗚呼、妾の渠等に於ける、渠女の如き能はず。されど妾は妾の力のなし得る所を盡せしなり。渠等は適當に衣食せり。又加ふるに渠等は親しく愛され又心を込めて教育せられたり。おゝ若し吾親愛なる母上にして、今吾家の内の愉快なる光景を見たらんには、渠女は其の終焉の際まで吾一家の繁榮を祈りたる神明に對して、深く感謝する所あるべきなり』。渠女の言ひしは之のみにてはあらざりき。されど予は此の如き貴むべき愛情を記述するの筆を有せず。心の外に汪溢したる感情は、冷淡なる文字の能く顯はし得べきにあらざるなり。

此時アルベルトは物柔かに紗娘の言を遮れり。『我愛する紗娘よ、御身は餘り自ら苦しみ過ぐるにあらずや。其等の追想は物哀れに樂しきなり、されど予は此事を餘り強く心にとゞめざらんことを御身に望むなり』。渠女は答へり。『おゝアルベルトよ、御身は能く記臆し置かねばならず、彼の靜かなる夕、我父外に出でて内にあらず、小供等も眠に就ける時、吾等三人が小さき「テーブル」を圍んで坐したりしを。我母は溫和にして亦慈悲深く、家の中にて

は實に樂しく笑ひの中に暮らし給へるなり。天は定めて照覽ありしならん、幾度か妾は跪きて、よしや其全くにはあらずとも、妾をしてせめて渠女の「善」の幾分にても受け得せしめんことを祈りし也』。

予は覺えず渠女の足下に我身を投じ、其手を執りて、はら〳〵と涙を其上に流し、『おゝ紗娘よ、紗娘よ、天の惠みと御身の母の慈悲は今尚ほ御身に纏へるなり』。渠女は亦た涙を以て沾へる吾手を固く握り、『おゝ淮亭郎、妾は御身の我母を知らざるを惜しむ。渠女は御身の友とし交はるに値打したるなり』。予は身動きせず。予は未だ曾て斯の如く強く感じたる賞贊を受けしこと有らざるなり。渠女は又語を繼ぎて曰く、『而して此惜しむべき婦人は、不幸にも早世せり——、渠女の最も幼き小兒は、其時僅に六ヶ月に過ぎざりき。渠女の病床に就きしは極めて短く、其間に自ら起たざるを知り、肅然として心の亂るゝことなく、單だ其の心配する處は渠女の家族、殊に其最も稚き小兒にありき。其の死期の漸く近けるを見し時は、渠女は妾に命じて家族を其の床邊に呼び寄せたり。妾は其言の如くせり——。愛らしき小さき群は其の病床を繞れり——。幼き小兒等は其の最愛の人を失はんとは知るよしもな

く、只〻年長けたるもののみ堪へ難き悲しみを呑み居たり。其時其弱りたる手を天に向けつゝ、渠女は熱心に善能の神の小兒を守り給はらんことを祈り、而して後、代る〳〵渠等を接吻して之れを離し遣り、妾に向つて曰へらく、「紗娘よ、爾は渠等の母となれ」と。妾は手を胸の上に置き、其命を諾したるを默示せり。母は苦しき聲にて「我兒よ、よくも諾しけるよ。御身の孝心深きを以て吾は其能く母たるものの義務を盡し得べきを知るなり。御身の吾に於けるが如く、亦御身の弟妹を愛し呉れよ。御身の父には能く從順に事へ、恰も信實なる妻の如くあれ。而して彼れの暮れ行く年を樂しましめよ」。かく言ひて渠女は其夫に物言ひかけり。されど妾の父は斷腸の悲しみに堪へ得ずして一室に退き、忍び涙にくれ給へり。アルベルト御身は此時妾の母の部屋に居れり。渠女は御身の動けるを聞きつけ、其誰なるやを問ひて、御身の其傍らに寄らんことを願ひたり。かくて渠女は樂しけに、又滿足顏に吾等兩人を打ち眺め叫び給へり、「御身等は共に末長く幸福なるべきなり。予は固くそを信ずるなり」と』。此時アルベルトは靜かに渠女を抱き、叫んで曰く、『然り、吾愛する紗娘よ。吾等は幸福なり、又幸福なるならん』と、冷淡にして容易に物に感ぜざるアルベルトの如き人も、今や渠女の哀

れなる談話によりて動かされしなり。予にありては、感極まりて殆んど其の知覺を失ひたるが如し。渠女は尙ほ言を繼いで、『而して、おゝ淮亭郎よ。此惜しむべき、此實に愛すべき婦人は其の家族と別れたり。善良なる夫よ、吾等は遂に吾等の最も親愛なる人々とも斯の如く別れざるを得ざるなるか』。

かくて紗娘は其席を去れり。予は坐して尙ほ其手を握れり。渠女は言へり、『吾等は行かざるべからず、夜已に闌なり』。言ひつゝ振り去らんとせり。されども予は尙ほ一層強く其手を締め、『吾等は再び互に見るの時あるべきなり。吾等は再び互に遇ふの期あるべきなり、吾等は何處に居るにもせよ、此後互ひに忘れざるべきなり。予は將に別れんとせり。而して別れざるべからざるが故に予は喜んで別るゝなり。されど予は永久と言ふ能はず――、そは吾胸を裂くべきなり。いざさらば紗娘よ、アルベルトよ、さらば。吾等は再び互に見るの時あるべきなり』。『然り、想ふに明日』。笑ひながら紗娘は附加へり。おゝ我友よ、其の明日こそ我胸には刃に等しかりしなり、あゝ、我れながら予はイツ我手を引くべきやを知らざりき。渠等は森の下影を下り行けり。予は立上れり。吾眼は月の光によりて彼等の跡を追へり。か

くて予は大地に伺とうち俯して、張り裂く如き胸の思ひを涙の中に浴しぬ。遂に予は忽然として起上り、籬の方に走り行けば、梨樹蔭幽かなる所、尙ほ渠女の白影縹渺として扉の邊りに飄るを見たり。予は覺えず兩の腕を擴げぬ。されど不圖目さむれば一株の檎樹露冷やかに我胸を沾し居れり。吁、渠女は行きぬ、——行きにし影も定かならず。

第三十一翰　十月二十日

前翰の日付は九月十日なり、蓋し淮亭郎は其友の言を納れ、外國公使に隨つて大陸に留任したるなり。本翰は其任地より發したるものと知るべし。其文中公使と書せるは、卽ち其長官なる外國公使なり。

譯者識

予は昨夜此地に到着し、兼ねて約束せし如く出來得る丈け速に我友に報ぜんとするなり。夜來、公使は持病にて引籠り居れり、而して此の不快はいかで渠の性質の天然の麗しきを增し得べきや。渠の平生常に憂鬱にして不滿なる、今や常よりも一層の險惡を加へたるなり。予は明らかに天は幾多の困難を以て予を試むるを見る。されど予は決して屈撓し又は挫折せざるべし。予は少しく輕薄を學ぶべきなり。予は今方に吾筆を漏れたる語に於て笑ひを忍ぶ

能はず。今の處にては、予の全く缺ける其の輕薄を少しく習ひたらんには、予は以て人間中の尤も幸福なるものとなり得べきなり。されど予は斗筲の小人等が孔雀の如く華麗なる羽翼の外何物をも有せざる身を以て揚々として予の前に翺翔するを見て、予の性質の斯る社會に適せざるを恨むべきや。全能なる天よ、何故に御身は御身が予に與へたる所のものに加ふるに彼の輕薄と自慢の性を以てせざりしか。されど忍耐せよ——、想ふに我友は必らず叫ばん——、忍耐せよ、善良なる淮亭郎よ。時は靈妙なる力を有す、萬物依りて變ずべきなりと。實に然り、予は吾友の言の正しきを認めざるべからず、何となれば、予が已むを得ず仲間の人々と交はりてより以來、又予が彼等の性行に注意するの機會を得たりしより以來、予は以前より遙かに心やすく滿足するに至りたればなり。吾等は、おのづから吾等が遭遇したる種種の物と吾等の身とを比較するを以て、吾等の哀樂は一に吾等の目前のものより起るを常とす。幽棲（ソクチュード）は悲哀の保姆なり。其の想像は常に動もすれば天外に浮遊して徒らに空像を描き、幻影を夢み、而して吾等の身の比較的に實に果敢なく憫れなるものなるを覩ずるなり。凡そ物は其物の實よりは大なる必要あるが如く見へ、又さもなき人の吾等より優

りたるが如くに見ゆるものなり。之れ人心の自然なり。何となれば、己を知るものは己に如くはなし、吾等は常に吾等の缺點を見出し、而して他人を見る時は却て其人の有せざる能力をも附加し、かくして一個の完全なる人物を描出すればなり。故に斯の如き人は、實に吾等の心の造作したる一個の想像物に過ぎざるなり。

第三十二翰　十一月十日

日に增し予は予の位置の稍〻耐へ易きを覺ゆ。實に「時は憂を愈す」なり。予を圍繞せる紛々たる小人も、漸く余の嫌忌の情を和げ來れり。

予は近頃子爵某と親しく相知るに至れり。渠は才德ある紳士なり。其の學識の秀でたるにも係はらず、少しも傲慢にして學者ぶるの風あるなし。渠は實に愉快にして又立派なる人物なり。而して何よりも特に尊敬すべきは其の感情の鋭敏なるにあり。予が初めて渠を見し時より意氣相投ずるを見て、互にあらゆる煩雜なる虛禮を擯け、忽ち樂しき知己となれるなり。悠々春水の如き一片の交情は、實に性急予の如きものを和ぐるに足る。我友にして若し一度

び渠と相識りたらんには、予は固く信ず、御身は其百の過失をも恕すべきを。

第三十三翰　十二月二十四日

事果して予の疑ひなるが如し——。公使と予とは如何にしても和合する能はず。疑ひもなく渠は今まで予が遭遇したる中にて最も不快なる痴漢なり。其の迷信深くして厳酷なること恰も老婆の如し。渠は決して己れ自らを以て樂しむ能はず、如何ぞ他人を以て樂しむを得べけんや。予は常に規則正しく敏捷に事物を經理せんと欲す。されど予の成就したることは決して渠の氣に入らざるなり。予が原稿を以て渠に呈する時は、渠は次の言を付して之を却下するなり、『之れ或は良からん、されど御身はイマ少し之を變ぜざるべからず、そこに必らず修正すべき或物の存するあらん。御身はイマ少し適當なる文句を考ふべし』。其度毎に予の忍耐は殆んど竭き果つるなり。一個の接續詞と雖も、又如何に瑣細なる注意にても、決して省略するを得ず、而して彼の倒句法——予の得意なる書方——の如きに至りては、渠は之を耐ゆる能はざるなり。其の思想は凡て官衙の獨斷法に因らざるべからず、然らざれば直ちに

非難せらるゝなり。我友よ、兼ねてより予が斯る嚴格なる法則を嫌忌することを知れる御身は、容易に斯る人物に遇ふて予が堪へ忍ぶ所の苦痛を察し吳るべきなり。若し子爵の樂しき交情なかりせば、予は如何にして我心を慰むるを得べきや。渠は一日、如何に多く渠も亦此大人物の遲鈍なると疑念深きとを嫌ふやを予に告げて曰く、『斯る人物は好んで自ら苦しむのみならず、之に關係したる他人をも迷惑せしむるなり、然れども』――渠は言を繼いで曰く、『吾等は旅客が山を登るの已むを得ざるが如く、斯る人に從ひ居るを良しとす、若し山にして其途に横はらざらば、其道は實に近くして且つ平易なるべし。然れども之れあるが故に、旅客は忍んで之を越えざるべからず』。老痴漢は、子爵の予に親しめるを見て愈〻其氣を損ぜり。渠は予の目前に於て、機會あらば子爵を卑下せんと務むるなり。然る時は、予は勢ひ自ら辯護の地に立つなり。故に又益〻渠の不快の念を加ふるなり。昨日、予は渠が子爵に向けたる攻擊の、亦予を擊たんが爲なりしを見たり。渠曰く、『子爵は能く世界普通の事務に熟達せり、渠の文體も甚だ善し、而して其筆も甚だ敏捷なり、然れども他の大學者の如く渠の學問は只〻皮相に止まるなり』。此言は一種妙なる音調にて、さも「予は御身が予の言ふ所を

解せんことを望む」と言ふが如き意味ありげなる容貌を以て發せられたり。されど此の嘲弄は予に何等の刺擊をも與へざりき。予は素より斯の如き痴漢を卑しむ、又何ぞ共に喋々の辯を勞するを好まんや。

御身に、我友よ、御身に予は此語當時の束縛に向つて謝せんと欲するなり。顧れば御身が度々徒らに佚遊せずして何事か働かんことを強いて予に勸めしを以て、予は遂に此の壓制の羈絆に吾首を屈したるなり。予は今働けりと思ふや！、吁彼の澤畔魚を釣るの叟、若しくば芋を半畝の田に植ゑて之を市場に運ぶの傖夫にして、果して予よりも劣りたるならんには、予は此の苦境にありて十年喜んで猶ほ之を忍ぶべきなり。而して彼の上流社會と稱するものの流行を追ふて浮靡を爭ふは、抑も何等の弊風ぞや！、只〻其位を得んが爲に左顧右盻、營々として自ら其恥を知らざるが如きものは、抑も何等の醜態ぞや。現在茲に一個の婦人あり、常に渠女の家族の華奢なる生活と、其弘き所有地の自慢話を以て一座の人を聾するなり。若し人ありて初めて渠女の誇言を聞かば、其人は必ずや思はん、此の婦人は俄に位階を得たるか、或は不意に富裕となりたるが爲に其腦の混亂したる痴女なりと。而して猶ほ可笑しきは、

此の婦人は此の近所の代言人の書記に過ぎずと云ふ！。吁、予は驚く、抑も人は如何にして斯くまで賤しくなり得べきや！。

第三十四翰　一千七百七十二年一月八日

よくも〳〵斯る人物の此地に揃ひたるもの哉――。彼等の平生學ぶ所のものは、只〻何の趣味もなき形體の學問のみ。彼等のあらゆる時間と思想とは、一年中只〻如何にせば其の坐席を一階にても上方に進め得べきやに費すに過ぎず。斯る人々は決して怠惰なる事なし、何となれば、彼等は規律通りの業務を以て滿足せず、猶ほ上官の氣に入らんが爲に常に瑣細の事までも注意するを怠らざればなり。前週の或日、氷滑りの爲に郊外に遠足せんとて造られたる大いなる仲間の俄然として解散せしことあり、其故を問へば、之れ只〻進行の順序に關する些細の紛爭に因れるなりと。此等の痴漢は知るや知らずや、人間眞正の幸福を形成する所のものは決して人爲の階級に非ざることを。彼の最高の位置を有する人、多くは塊然たる偶像に過ぎざるにあらずや。幾多の帝王は其の大臣の爲に支配せられ、幾多の大臣は其の書記官

の爲に左右せらる。然らば則ち何人か最も有力なるものありやと問はば、予は斷言せん、其の德望は以て他人の感情と勢力とを制して自家の意に從はしむるに足るの人と。

第三十五翰　一月二十日

今や予は吾親愛なる紗娘に申告せんと欲す。先に予が彼の憂鬱なる町に住して、見知らざる人々（げに見知らざるの人々、吾性質にも又感情にも）の間に在りし時は、予は御身に書を送るの遑とてはあらざりき。然れども今や此かけ離れたる茅屋に移り、霰雪の霏々として吾小窓を撲つを聞く時は、予は端なくも故の吾れに歸りて御身の舊事を想起するなり。そを想ひ起しゝ時は、予は一種言ふべからざるの悲しみを覺ゆるなり。おゝ神聖なる記憶よ、樂もしき追想よ、今予が初めて御身を見たるの時に復り得たらんには！。

吁、紗娘よ、倘し御身が一目にても予が現在の位置を見るを得たらんには、御身の情あるいかで哀れに思はざらんや。汝々たる俗物は予の四邊を繞へども、何物も予に觸るゝ物とてはあらず。人皆冷淡、物皆無情、予は此地に來りてより、眞正の快樂より生ずる內心の滿足

を受けしことあらず、予は又感慨同情の涙を流せしこともあらず、予は吾心の活動力の全く乾涸したるを覺ゆるなり。予は雷に觸れて死せるものの如く、茫然として直立せるなり。首を擧げて滿目見る所なし、只〻大小の傀儡の累々として予の目前に浮動せるを認むるのみ。而して予は屢〻自ら己に問ふて曰く、之れ全く心の迷より生ずる一種の幻影に非ざるかと。然れども今や是等の偶像は我慰みの的となれり。否、予が却て彼等の慰みの的となれるやも知るべからず。時に隣人の手を握れば、予は其の木皮の如き手掌を見、悚然として思はず吾手を引退くなり。夜に入れば、予は翌朝の日出を見んことを樂しむ。されど無効なり、予は寢床を去ること能はざるなり。朝になれば、予は今夕月に乘じて散策を試みんことを欲す。されど暮色空を掩へば予は吾室を去る事の能はぬなり。予は何故に朝起くる能はざる歟、又何故に夜出づる能はざる歟。吁、夜に入りて予を誘ひ出し、朝に於て予を呼び起す所の或物は、最早や過ぎにし昔となりたればなり。

おゝ、予が今御身と共に、御身の弟妹が能く予の周圍に戯れし那の愛らしき小房に在らんには！。若し御身が渠等を蒼蠅と思ふ時は、予は渠等の爲に一の昔噺を話すなり。而して

渠等は熱心と注意とを以て予を繞るなり。

太陽は殆んど沒しぬ。今や其斜めなる光線は一面に四方を覆ふ雪の上に輝けり。嵐は吹き止みぬ。而して予は吾囚[?]等に歸らざるべからず。さらばなり、アルベルトは御身と共に在る歟、渠は今御身には何人なりや。ア、我ながら吾身の愚さよ、何故に予は斯る問を起すなる歟。

第三十六翰　二月十七日

事已に明なり、公使と予とは最早や共に在ること能はざるなり。渠の事務を取扱ふの方法は極めて無道なり、之を以て予は其怒りに觸るゝを顧るに遑あらず、飽まで渠に反對し飽まで自家の嗜好に從はざるを得ず。渠は此事に就きて當路の大臣に知らせたりと見え、予は大臣より一の非難の書を受取れり。そは寛裕なる言語を以て書せられたり。されど尙ほ之れ一個の批難たるを免れず。予は斷然辭職すべしと決心したり。されど彼の大臣は又私かに一書を予に送りて、予を慰藉せり。其の文中には、懇ろに予の不平の情を和ぐるの訓誡あり。又

口を極めて予の意見を賞贊し、壯年の特有なる節操と熱心とを奬勵せり。渠は又決して予が血氣を抑制せずして只之を一定の範圍内に保つべきを勸告せり。かくして予は塵に己を慰諭し、少くともイマ數日間は予の決心を思ひ止まる事となせり。

我友よ、心の平和は實に一個の幸福なり。されど是の如く貴きものなれども、如何せん只、其一時のものなるを！。

第三十七翰
第三十八翰
第三十九翰　飲く

第四十翰　八月二十一日

吾心の變遷の速かなること、恰も電光の如し。今や希望の光忽然として吾うなだれたる精神の上に輝き、吾が心中喜悅の潮紅を呈するかと思へば、吁、此光も只の一瞬時。時として

心迷ひ情迫りたるの極、予は考へ初むるなり、アルベルト若し死せば、其時――、其時は紗娘は我――。而して予は此迷ひを追ひ逐ひ、終に不圖吾身の斷崖千丈の縁に臨めるに心附き、悚然として飛退くなり。若し之が眞の斷崖にてあらんには、予の陷落は避くべからざるなり。又予が先に初めて紗娘の家に予を導きし其路、其門を過ぐるときは、吾心は悄然として内に沈み、深刻なる苦痛を以て、予がありし所のものを以て予がある所のものに比較し初むるなり。あらゆる幸福は已に過ぎ去れり、世界は已に前日の如くならず、吾が心臓は往時の如く鼓動せず、予は其時感じたるが如き一樣の樂しみを感ずる能はざるなり。若し此世を去りたる王侯の遺靈が、己の生前幸福なるの時建築して之を其の愛子に傳へたる宏莊なる城郭に歸り來りて、其さしも雄麗なる殿堂も敵の爲に破壞せられ、遺跡零丁として殘壘荒草を生ずるを見ば、其の感情果して如何ぞや、吁々、予の心事も亦斯の如きのみ。

第四十一翰　九月三日

予は幾度となく思へり、如何なれば渠女は予を措いて他人を愛し得るかと。我心は渠女只、

一人の支配する所となれり、渠女の美しき影像はあらゆる思想を包容し、而もあらゆる他の考を擯くるなり。如何なれば渠女は假初にも他人を愛するを得るやと。

第四十二翰　九月五日

紗娘の夫は此數日間他方に行けるを以て、渠女は次の如く書翰を書き初めたり。――「吾永久親愛なるものよ、出來得る丈け速に歸り來れ、御身は幾百千の懇願を以て待たるゝなり」。渠女が之を書き終りし時、アルベルトの一友來りて渠女に告ぐるに、或條儀なき要事の爲めアルベルトの歸家は思ひしより永引くべきを以てせり。言ふまでもなく渠女は此の手紙を送らざりし、而して此夕予は不圖したる事より之を拾ひ上げたり。笑を以て之を讀み了り、予は喜悅の餘り之に接吻せり。渠女は其故を問ひぬ。予『おゝ想像は如何に樂しきものなるぞや』。予の樣子に依りて渠女は容易く予の所謂「想像」の力を認めたり。何となれは、予は此の手紙を以て予に宛てられたるものと誤想し居たればなり。渠女は默せり、而して不快の如く見えたり。此の不快の容貌は亦予の口を鎖せり。

第四十三翰　九月十二日

紗娘は其夫の所に行き、暫くの間不在なりき。予は今日久し振にて渠女を訪問し、其手に接吻するの名狀すべからざる快樂を得たり。一匹のカナリヤ鳥は籠の口より飛び出で、渠女の肩上にトマれり。紗娘『淮亭郎よ、玆に一個の新しき朋あり』。斯くて渠女は其手の上に之を誘へり。『此鳥は如何に妾を好めるぞ、見よ、小さき翼を羽ばたく其樣の愛らしさよ、妾が餌を與ふる時は、常に其愛らしき嘴を以て之を啄くなり、あゝ淮亭郎よ、見よ此鳥は餘念なく妾を接吻しつゝあるなり』。渠女は唇を差出せるに、小さき鳥は其香ばしき呼吸を喜ぶが如く見えぬ。紗娘は鳥を予に差向けながら、『此鳥は亦喜んで御身にも接吻するならん』。鳥は其命に隨ひ、其小さき嘴を予の唇に向けたり。此時予は如何に喜ばしき感情を覺えしや。予は言ひぬ、『紗娘よ、此の小鳥は吾等の接吻を以て滿足せず、尙ほ何か實質ある謝儀――、食餌を得んと要むるなり』。渠女はパンの一小片を取りて、其口より鳥に移し食ましめたり。悲、夫嫌親愛なる紗娘よ、斯る狀態を以て予の感情を隆ならしむる勿れ、御身は已に

吾心を苦しめたり、吾心は爲に幾百千の悲哀を累積せしや、せめて吾心の靜かなる時丈けも願くは之を安んずるを務めよ、願くは忘却の中より追想せしむる勿れ。吁、紗娘（チャーロット）御身は已（すで）に予が御身に戀慕せるを知れるに非ずや。

第四十四翰　十月十九日

おゝ、言語に發すべからざる恐ろしき空望は曼々として吾胸に纏へるなり。時としては想像に馳するの餘り、予は思ふなり――若し予が一度にても、單に一度にても渠女を、渠女を我胸に抱き緊むるを得たらんには、吾一生の願ひ卽ち足りなんと。

第四十五翰　十月二十七日

おゝ、予は此胸を裂き開かんと欲するなり、予は此頭を石壁に打碎せんと欲するなり――。若し予が誤つて乾燥無情の人に向つて吾胸襟を洞開し、而して其少しも感觸する所なきを見て失望する時に當りては！、苟くも情吾（わ）れと適合するに非ざれば、予は他より愛情、歡愉、

快樂、嬉笑を受くる能はず。また其性頑々として感情なきの人に向つて、予が活々たる情火の片燼をも與ふる能はず。

第四十六翰　同日夕

想像は常に十分より多くを予に與ふ、紗娘（チャーロット）の嬌艶なる容姿を思へば、他の百千の思想は盡く消え去りて、予を圍繞するの萬象は一個の天國を造るなり。渠女なくんば、世界は零々たる一土塊ならんのみ。

第四十七翰　十月三十日

幾千度か予は双腕を投じて渠女の窈窕たる腰を擁し、吾痛める胸に抱き緊めんと思ひ迷ひたり。高明なる天よ、斯る婉麗をば絶えず眼前に見ながら、敢て之に觸れざらんと務むるは之れ實に言ふべからざる苦痛にてあるなり。觸接することは天然の最初の感情なり。彼の小兒を見ずや、其好む所のものあれば、何物（ぶつ）にても先づ之を攫取せんと務むるに非ずや。予は

——然り然り——予は實に一個の小兒に外ならず。

第四十八翰　十一月三日

夜、寢床に就きて吾眼を閉ぢんとする時に當りて、予は永く再び此瞼を開くなかちんことを熱心に祈願せしこと、夫れ幾度ぞや。されど朝となれば目は開きぬ。予は再び太陽を見、又再び予が以前の悲哀を感ずるなり。悲夫、何故に予は神經病か若しくは亂心には非るか。何故に予は此の般々たる悲愁の原因をば、不順なる氣候、或は失敗したる大望、若しくは殘虐なる敵人の迫害に歸すること能はざるが如し。然らんには悲哀の苦痛も稍〻慰めらるゝを得べきなり。されど悲夫我悲しみは一に吾身の上にあり、吾れ只〻獨りあらゆる悲哀の原因にてあればなり。過ぎにし日には、さしも快樂と平和の住家なりし此胸は、今や限りなき悲哀の凄寥なる源泉となれるなり。予は最早や前日の予にあらず、先には最も恬怡なる感情を省きて吾心を支配するものとては非ざりき。予、近村を逍遙すれば、到る處として天國の如く見えざるはなく、愛の觀念は常に吾心に輝きたりき。傷あるものは予之れを見て慰め、怒れるもの

のは吾之れに過ひて宥め、笑へるものは予之れと共に樂しめり。今や笑ふもの吾にあらず、吾却つて慰めらるゝもの、宥めらるゝものとなれるなり。吾眼は乾きぬ、其瞼は最早や物の哀れに感ぜる爽やかなる涙に潤はざるなり。吾感覺は吾れを誤りぬ、最早や其樂しき刺擊の吾心を扶くることあらざるなり。予の苦痛は言語に絕えたり。何となれば、予は生活の唯一の樂みにして予の周圍に此の世界を作り昊れたる彼の貴き鋭敏なる才智を失ひたればなり。吾家の窓より、予は尙ほ遙かに黛翠色の連山を見、又朝暘の狹霧を破りて滿目の山川を鍍金し了るを見る、自然は依然として其の驚嘆すべき崇高と優美とを呈せるなり。されど吾心は今や無感覺なり、予の目は盲せり、予の耳は聾せり、予は塊然として只〻石像の如く立てるのみ。予は數〻吾身を地に打伏して、恰も農夫の雨乞するが如く吾眼の一滴有情の涙に潤はんことを希へり、然れども予は性急なる祈に對して、天は降雨をも日光をも兩ら許さざるを見るのみ。あはれ以前にありては幸福なる昔日の追想は、尙ほ一の慰藉にてありたりき。何となれば、予は忍んで旻天の意を待ちたればなり。されど、之れ今や只〻我が此胸を裂くあるのみ。

第四十九輪　十一月八日

予は昨日紗娘によりて、物柔かに予が度を越えたるを戒しめられたり。何となれば、實を言へば我親愛なる友よ、先頃より我悲しみを遣らんが爲めに予は飲酒の常量を過したればなり。紗娘は言ひぬ、『願くは少しく之を節せよ、紗娘の事を考へ見られよ』。予、悲夫其の忠告は予も亦已に其然るべきを知るなり、予は御身のことを考ふ、否嘗に考ふるのみならざるなり、御身は常に我目の前にあり、御身は常に我心の中にあり、此朝予は御身の先日ありし所の地に坐し居たりしに――』。此時紗娘は話頭を轉ぜり。げにや我友よ、予は此愛すべき天女の意の如く動作する一個の傀儡に過ぎず。

第五十輪　十一月十五日

予は誠に我友の親切なる忠告、殊に予をして吾舊官に復せしめんとする御身の少かちざる盡力を謝す。然れども何故に斯る無用の勞を取らんとするや、予を吾れ自身に委ね呉れよ、

不肖なれども予は猶ほ吾苦辛を忍ぶを得るなり。

第五十一輪　十一月二十一日

紗娘は、渠女が予に向つて毒を與へつゝあることを少しも考へ呉れざるなり。渠女は予に強烈なる死藥を呈せり。而して予は滿引して之を吸へり。思へば渠女が時として予に與ふる嬌艶なる目付は、抑も何を意味するぞ。又予が數〻、渠女の面に讀み得る同感の情は、抑も何を意味するぞ。吁、之れ皆予には一服縮生の藥には非ざるか。昨日予が渠女に別るゝ時、渠女は其手を離しながら云ひぬ。『さらばなり親愛なる淮亭郎よ』。親愛なる淮亭郎よ！、一語電光の加く吾胸を貫きぬ。予が渠女の予を親愛なりと呼ぶを聞くは此時初めにてありしなり。――予は決して決して此妙なる音を忘るゝことなかるべし――。其後幾千度か予は之を繰り返せり。昨夜予は寢床に就ける時、川意に叫びぬ、『御寐みあれ、親愛なる淮亭郎よ』。予は思はず吹き出しぬ。

第五十二翰　十一月二十二日

予は天に向つて渠女が直ちに吾物とならんことを願ふ能はず、されど予は数〻渠女の既に吾物にてありしと想ふなり。予は渠女が今吾物にてあらんことを願ふ能はず、何となれば、渠女は已に他人のものなればなり。思へば吾悲しみや空望なり、吾不平や徒勞なり。アヽ此心と吾身と分離することを得たらんには！。

第五十三翰　十一月二十四日

紗娘は今にして漸く吾苦痛に心付けり。今日予は渠女の獨りなるを見ぬ、渠女の容貌は全く予を壓窄せり、予は默然として坐しぬ。渠女はジッと予を凝視めたり。才の火と美の光は去りて影だになし。されど渠女の容貌の中には、尙ほ一層強く懇切なる憐れみと婉柔なる憂を告ぐる或物ありし。何故に虛飾の禮讓は予の渠女の足下に伏するを妨げしや。渠女を擁するを妨げしや。幾千度の接吻を以て渠女の憐情に報ゆるを妨げしや。渠女は手琴を執れり、而し

て嘹亮たる聲の下に悲しげなる小歌響き亘りぬ。渠女の口は未だ曾て斯くまで愛らしく見えしことなし、兩の唇は宛然樂器の調音を受け、二倍の調子を以て其の振動を助くるが如きなり。予の感情は殆んど言語に絶せり。予は頭を垂れ、次の如き嚴格なる宣言をなせり。『天使の附守れるが如き愛らしき唇よ、予は決して爾を汚さんと欲するの念を起さざるべし』。如何程予は此の幸福を味はんことを願へるや。されど否、決して得べからず。吾と紗娘との間には永久の蕭離ありて存するなり。然れども予にして一瞬間にても此の唇上に生活するを得たらんには、予は次の瞬間には滿足して死すべきなり。

第五十四翰　十一月二十六日

時として予は思ふなり、他人は皆容與として樂しめるに、何故に予のみは營々として苦しまざるべからざるやと。予は今日古詩を誦するに、不圖、其恰も吾身を咏ずるが如き句あるを見ぬ――『此の悲哀の止むは何れの日にてあるなるや。借問す、古來曾て斯の如き憫れむべきものあるや』。

第五十五翰　十一月三十日

吾運命は窮まれり、各〻の事物は一として吾苦痛を增し、吾身の前途の不運を示さざるはなし。

今日晝飯頃、机子に倚りて座するの意なきを以て、予は獨り小川に沿ふて歩せり。田園蕭條として日色慘憺、襟寒き東風は小山を掠めて吹き、黑くして重けなる雲は平原を打覆へり。只見れば大いなる古々しき上衣を着けたる一個の男、岩の間を彷徨ひて、何物かキョロキョロ搜し居れり。予の近くや否や、渠は振向けり、而して予は其の憂に沈める甚だ奇怪なる顏容を認めたり。渠の麗はしき漆黑の髮は櫛りもせず、肩の上にだらなく懸り居れり。予は其何を爲しつゝあるやを問ひしに、渠は深き嘆息を以て答へぬ『君よ、予は花を尋ね居れり、されど予は單の一本も見出す能はざるなり』。予は今は花の時節に非ざるを渠に話しぬ。渠曰く、『されど予は吾園中に色々の薔薇や、百合を有す、予の父は予に一種の花を與へり、そは何處にも生ずるなり、元來此野には黃、靑、赤等の花の絕えず生ぜるなり、されど猶ほ

予は何れの種類をも見出し得ず』。予は其等の花を何に用ふるやを問ひぬ。渠は微笑せり、而して疑念深き容態にて、其指を擧げながら、『御身は誓つて何人にも告ぐる勿れ、予は我親愛なる娘に一個の花輪を約せしなり』。予『そは甚だ可なり』。渠は尙ほ言を繼いで曰く、『お渠女はあらゆる物を有す、渠女は甚だ富裕なり』。予『されど渠女は殊に御身の花輪を愛するならん』。渠『おゝ渠女は寶玉も王冠をも有せるなり』。予は渠の名を問へり。されど渠は尙ほ其口を絕たず、『若し王國顧問府にして予を聘せば、予は別種の人となり得べきなり。吁々曾て予の幸福なる――、甚だ幸福なる時ありし、されど其時は逝きぬ、そは過ぎ去れるなり、そは過ぎ去れるなり』。斯くて渠は其ウロ〳〵したる眸を放つて天を仰げり。予『然らば曾て一度御身が幸福なりし時ありしなり』。渠は答へり、『吁、予は今も其時と同じからんことを天に乞へり、然り、其時予は幸福なりし、其の樂しきこと、其の自由なること、恰も水中の魚の如くなりし』。

此時一個の老女は吾等の方に進み來れり。『ヘンリーよ、ヘンリーよ、御身は何處にありしか、予は諸方を尋ね廻りしなり、來れ、晝飯の準備整ひたるに』。予は渠が渠女の子なる

かを問ひしに、老女答へて曰く、『然り、吾が憫れなる不仕合なる子よ、情ある夫は吾等母子に此悲しみを與ふるを喜び給へるなり』。予は渠が此の狀態にあるは、久しき以前よりにてありしかを問ひぬ。渠女は答へり、『渠は六ケ月以前より辛やく今の如く靜になれり、其前一年程の間は、狂ひ廻りて制し難きを以て、顚狂院に繫がれたりしが、今は全く無害にして他人に向つて何等の妨げをもなさず、されど渠の談話は皆帝王の事に關せるなり。往時、渠は一個の價値ある若者なりき。其時は渠は自ら一家の生計をも負擔したりしなり。渠は又極めて畫に巧なり、されど一朝忽然として憂鬱となり、恰も大熱に苦しむ人の如く暴厲なる狂人となり、而して今や御身の見給ふが如し、吁、君よ、若し御身が――』。予は之を遮つて、渠の自ら幸福なりと言ひしは何時頃なりしやを問ひぬ。渠女は哀しげなる微笑を以て答へり、『吁思へば可憐なる若者かな、君よ、渠は其狂して幽囚されし時程幸福なるはなしと言ふなり、渠は常に其の狂暴の癒たるを悲しまざる時あらず』。予は之を聞きて惘然たり。かくて若干の錢を渠女の手に殘して別れ去りぬ。

急で歸途に就きながら、予は自ら吾身に向つて獨語ぬ。『御身は幸福にてありし、御身は

其時恰も水中の魚の如くなりしなり』。善良なる天よ、之れ果して人の運命なる歟。渠の幸福なるは只〻道理力を得ざるの前と、之を失ひたるの後のみなる歟。憫れむべき不幸者よ、されど汝が此の嚴冬に當つて汝の女王の爲に花を集めんとて行く時は、尙ほ幾多の希望を有せるなり。世にありとあらゆる望の絕え果てたる吾身に比すれば、其羨むべきこと幾何ぞや。汝は冬季花を得ずとて悲しめども、未だ以て失望すべからず。されど予に至つては歸るも行くも何の望もなく、何の企もなく、茫として去り、茫として來るなり。汝の亂れたる想像には、若し王國顧問府に聘せられなば、汝は立派なる別種の人となり得べしと思へり、而して斯の如く汝が苦痛の原因をば外界の事情に歸するを得るは實に汝の幸なり。汝は、あらゆる汝の苦痛は只〻全く亂れたる心、狂ひたる胸より起るものにして、世界の王も之を治し得べきに非ざるを知らず、又覺らざるなり。吁、十全なる天の父よ、御身は吾等を造り給へり、苦しむものは御身の爲に喜び、悲しむものは御身の爲に笑ふ、何爲ぞ今や獨り吾身を見捨て給へるや。願くは御身の子の地上に迷へるものを呼戻し給へ。吾精神は御身を渴望し、最早や御身の緘默を忍ぶ能はざるなり。若し玆に一個の若者ありて、不意に其父の面前に入り來り、其頸に

縋り附き、『親愛なる父上よ、我旅行を縮めて預定の日より早く歸り來れるを許し給はれ、世界は何處を見ても一樣なり、勞働、困難、快樂、報酬、凡て予には何等の感動を與へず、予は御身の前にのみ只〻幸福を見出し得るなり』と叫ばば、其父たるもの、果して之を怒るべきや。

編者（ゲーテ）讀者に告ぐ

外國公使に書記官たる間、渠が受け忍びたる種々の困難は決して忘却せられざりき。今や此事深く渠の心を刺し、渠は自ら其身を汚れたるものと思へるなり。之を以て渠は遂にあらゆる公けの事業と政治上の奔走をば全く嫌避するに至れるなり。此時より渠は漸く此の世界に不滿を懷き、先の手翰に見えし如き異樣なる說を以て塵に自ら慰むるに至り、此等の考の却て其身を滅すの鴆毒なるを覺らざるなり。渠は其身の位置の變更せんことを願へり、然れども渠の位置の憫れなること、依然として前日の如し。渠は紗娘を

見て其心を慰めんとせり、然れども其憂に沈める容姿を見て、是れ皆己れの業なりと思へば、轉た其心を惱むるあるのみ。渠は自ら生ける甲斐なき生命なりと思ひ迫り、遂に此の悲哀の世界を去るの決心を爲すに至れるなり。

次に掲ぐる幾多の書翰は、渠が其後に遺こしたるものなり。以て其の亂れたる心の十分なる證跡を見るべきなり。

第五十六翰　十二月十二日

げにや我友よ、予は世の所謂魑魅の憑る所となれりと云へる憫れなる者の如く、もがき苦しめるなり。夢現の間、予は絕えず一種不可思議なる感情に惱まさるゝなり。そは苦痛に非ず、そは情慾に非ず、只〻一の言ひ難き感激にして、冥々地に我心を殘食するもの、卽ち之れなり。斯る憫れなる有樣にある時は、予は忽然として立上り、半夜數〻此の慘憺たる風霜を冒し、寂莫たる山野の中に彷徨ふなり。斯の如くにして、昨夜も亦迷ひ出でぬ。折しも近傍

の川水は降り續く雨に其岸を溢れ、ワルハイムより、平生予が好める彼の溪間までの道は、皆水波の下にあり。四方の光景は物凄くも亦恐ろしかりき。黑雲月を隱し、其迷へる如き二三の光によりて、塵に野面を掩へる漫々たる水の波立ちて巖角に碎くるを見るのみ。風は逢逢として起り、全き平野を擧げて澎拼たる大海と化し了れり。暫くして氷の如き月は暗憺たる雲間より照り亘り、さなきだに凄き夜半は更に一段の凄味を加へぬ。凄まじき水の音は風の響に打つれて、吼るが如き山彦となりて遠く溪間に鳴り亘りぬ。予は斷崖の緣に近げり。予は寧ろ——と思ひしが、覺えず戰慄せり。予は吾腕を擴げぬ、予は地上に横はりぬ、予は嘆息しぬ。予はつら〳〵思へり、此の逆捲く波の底に吾不幸、吾苦痛をば此身と共に埋めたらんには、如何に樂しかるべきやと。吁、吾身は此時如何に地に附着し居りしや、何故に思ひ切つて吾があらゆる悲哀をば絕ち得ざりしや。されど我友よ、予は何となく吾時の尙ほ未だ至らざるを覺ゆるなり。

望に離れ樂みを失ひて、予は只〻悲しみを知れるのみ。そもや此顏の笑ひしことなきは幾十日の久しきに亘れるや、恐らくは吾顏は惡鬼の如く見ゆるならん。現在の所にては、吾は貧

弱なる老婆の、道に木片を拾ひ、家毎に食を乞ふて憫れなる生活を伸ぶるに異らざるなり。

第五十七翰　十二月十四日

我友よ、予は何が故なるを明言する能はざれども、我心は猶ほ狂亂せり。吁、紗娘に對する予が愛情は、最も純潔にして神聖なるものには非ざる歟、之れ卽ち兄が其妹に對するの愛情の如きに非ざる歟。予は曾て一點にても不名譽なる慾望を挾みしことありし歟、百千の誓も吾身の汚れなきを證するに必要ならず、天は之を知り給へり、否、吾心能く之を知る。

昨夜——予は之を書せんと欲して覺えず慄とせり——。昨夜予は渠女を吾腕に抱きぬ、予は吾胸に渠女を抱きゐめ、渠女の戰ける唇に燃ゆるが如き接吻を印せり、渠女の眼は流るゝが如き秋波を漲らしぬ、吾眼は喜悅を以て輝けり。斯の如く予が夢寐の間、空像の中に於て感ずる所の快樂は、果して罪となるべきものなりや。おゝ紗娘、紗娘、此全く一週間の間、予は吾身にてはあらざりし、吾眼は涙の中に泳げり。あらゆる場所は予には一樣なり、何となれば、予の何處にも安全を見出す能はざればなり。予は何物をも望まず、されどあらゆる

ものを願ふなり。あゝ我れながら臆したり、先に已に此の世界を去りたらば、此の苦しみはあるまじきに。

編者(ゲーテ)讀者に告ぐ

(附淮亭郎の手翰)

淮亭郎の末路に就て一層精密なる事情を知らんと欲せば、眞の書翰に加ふるに短き物語を以てするの必要なるを見るなり。此の物語の材料は、多く老執事、アルベルト、紗娘及び淮亭郎の家僕の供給する所なり。

淮亭郎の紗娘に對する不運なる戀慕は、冥々地に最初渠女とアルベルトとの間に成立ちたる和合の情を傷れり。アルベルトの愛情は眞實なれども、而れども淮亭郎の强盛なるが如くならず、加ふるに其の業務の多忙なるに隨つて、稍〻冷淡の方に傾けり。然れども淮亭郎が其妻に對する著るしき素振を見て、渠は潛かに不安の心を起したり。何となれば、此の素振は啻に明に渠の權利を毀損せるのみならず、猶ほ又渠の意慢に對する無言

の非難にてありたればなり。加之其の官途の思ひし如くならざると、其の利益の日々減退するとは、渠をして一層淮亭郎に對する不滿の心と猜忌の情とを增さしめたり。淮亭郎の心を惱ませる悲しみは、轉じて渠の才能の火を滅し、渠の得意なる判斷力の敏捷をば全く渠より取り去りて、今や渠をば無氣無力の人となし了りたるなり。每日渠と相對する紗娘も、其夫の急激の變化を苦にし、等しく憂鬱沈思の人となれるなり。アルベルトは紗娘の此の憂鬱を以て、一に渠女の淮亭郎に對する愛情の增進せる結果なりとし、淮亭郎は之に反して、アルベルトが渠女を愛せざるの罪なりとせり。玆に於て兩者の間自から相信ぜず。此の信用の欠乏は遂に互に相見ることを不快に思はしめたり。之を以てアルベルトは淮亭郎が紗娘の室內にあるを知る時は決して其中に入らず、而して淮亭郎は渠の不平なるを見て全く其の訪問を斷たんと欲して得ず、只アルベルトが事ありて外出したる時にあらざれば決して紗娘を見ざるなり。此の祕密の訪問は、益〻アルベルトの不滿と嫉妬とを增し來れり。渠は遂に一日紗娘に對し、只〻相見るがためのみならば、渠女は淮亭郎に對するに他の方法を以てし、斯く度々渠を其の室內に容るゝなからんこと

を厳しく申し聞かせたり。此時頃より可憐なる淮亭郎は深く自殺のことを考へ初めぬ。此事は已に久しく渠の思考の題目となり居りしが、今や漸く其の胸中に撫育せられたり。されど渠は此の非常の手段をば粗暴と狼狽とを以てするを好まず、飽くまで一個の男子として烈然、靜然、以て之を決行せんと念へるなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今しも入り來れるアルベルトは、淮亭郎に向つて極めて冷淡なる挨拶をなせり。淮亭郎は去るにも去られず、心惑ひて室の前後を歩み廻れり。渠等は種々の談話をなせり。されど皆直ちに忘れ去れり——。アルベルトは己の命じ置きたる些細なる事を紗娘に問ひ、渠女の窓り居たるを見て、語々淮亭郎の胸を裂くが如き鋭き諷刺をなせり。淮亭郎は辭し去らんと思へども、いかにして去るべきかを知らず、此の困しき位置に立ちて八時頃まで停まりぬ。其間渠の苦痛は愈〻増し來れり。家僕の夕餐を進ぶに及びて、淮亭郎は初めて別を告ぐるの機を得たり。アルベルトは只〻冷淡に夕食の招待を渠に與へたるのみ。

深き憂に包まれて、歩も徐かに淮亭郎は悄然として家に歸り、家僕より燭を取りて只〻一人己れの室に閉籠れり。家僕の言によれば、此夜、烈しき泣聲、熱心なる獨語、或は急いで其の室内を歩む足音の戸外にあり〳〵と漏れ聞えしと云ふ。家僕は其の變あらんことを恐れ、十一時頃戸を排して入り見しに、渠が衣服の儘、寢床の上に仆れ居るを見たり。淮亭郎は僕に命じて其の長靴を脱がしめ、而して後、己の鈴を鳴らすまでは再び入り來るまじきを渠に命じたり。

次の書翰は十二月二十一日の朝書きしものにして、渠の死後、手筐の中に發見し、其の名宛の通り紗娘に渡せり。

第五十八翰

親愛なる紗娘よ——。

予は決心せり、予は死を決心せり。予は些しも憤激する所なく、些しも動亂する所なく、極

めて冷淡に、極めて沈靜に、此言を御身に話すなり。あらゆる女性の尤も親しく尤も愛するものよ、終焉の際にも只、御身と一言を交ゆるを願へる可憐なる不幸者は、御身が此の書翰を讀むの前に既に冷やかなる墳墓の中に埋もり了るべきなり。おゝ今夜は如何に物凄き夜なりしぞ。されど予は猶ほ言はんとす、そは惠み深き夜なりと。何となれば、そはあらゆる我恐懼の念を去り、我惑へる心を決したればなり——。然り、予は死を決心せり。

昨日予が御身を辭し去りし時は、我心の悲しさ苦しさはそも如何ばかりなりしとするぞ。樂みの一の光だになく、望の一の輝きだになく、我が全き軀骸はさながら氷の如く冷やかなりしなり。只、家に達するさへ一通りの困難にてはあらざりき。室に入るや、予は我膝の上に仆れかゝれり、慈悲深き天は予に許すに我最後の涙を以てし、以て我悲しみを和げ給へり。幾百千となき考へ、幾百千となき種々の影像は、我疲れたる精神に附纏へり、終に至りて是れ迄屢〻起りたる彼の考へは、今や我心の中に深く刻み入りぬ——。死！、そは決して失望にあらず、只、此の生活の保つべき價値なきを思へばなり。

予は是れ迄我苦痛をば全く受け盡したり、悲哀の杯は將に其の緣を溢れんとせり——。我

一身は今や一轉變の限界に達したり。幸福の爲には犧牲を惜むべからず。然り、最も親愛なる紗娘よ、御身の幸福の爲には——吾等三人の一は死せざるべからず。而して淮亭郎はいかでか其人たるを躊躇すべきぞ。おゝ愛らしき天女よ、此亂れたる心の憤怒と癲狂とに驅られて、御身の夫を殺さんとする恐ろしき罪深き考を懷きしこと一度にてはあらぬなり。然らば則ち理として予は少くとも罪の爲に死せざるべからず。

其翌朝十時頃、淮亭郎は呼鐘を鳴らして其僕を呼び、己の衣服を揃へべきこと、其の所持せる銀行券を悉く受取り來るべきこと、他人に貸したる若干の書籍を家に持來るべきこと、及び平生己が一週間毎に若干の金を惠み來れる近隣のあらゆる貧窮者に、向ふ二ヶ月分を一度に施すべきこと等を命じたり。其故を問へば、渠は近日長き旅路に上るべき爲なりと言へり。渠は其の室内に朝餐を了へ、後、馬上にて執事の家を訪へり。されど渠は家にあらざりき。淮亭郎は獨り菓園の中を歩みながら、悲しき追懷の涙に暮れ居たり。小兒等は遙早く渠を認め、直ちに其の沈思を妨げ、其周りを踊り戲れながら、

口々に、『明日の翌日の又其翌日は、吾等は姉上より「クリスマス」の贈物を受くるなり』と、さも樂しげに叫び、小兒の性として彼等の待設け居る種々の物を並べ立てたり。淮亭郎は太息して言ひぬ、『明日の翌日の又其翌日には、予……予は……』。渠は何思ひけん、小兒等を代る代るヒシト抱き緊め、歩を轉じて立去らんとせり。されど最も幼き小兒等は、渠を呼留め、無邪氣なる口調にて、其兒が「新年」てふ題にて甚だ愛らしき詩を作り、一は父上に、一はアルベルトに、一は紗娘に、又一は淮亭郎に贈るべき旨を告げぬ。渠は之を聞き、太く感動せり——。渠は小兒の各々に己の持合せ居る種々の物品を與へ、名殘惜しげに悄然として立去れり。家に歸りて、渠は僕をして爐火を盛んにせしめ、己のあらゆる書籍をば革囊の底に入れ、衣服を以て其上を覆ふべき旨を命じたり。紗娘に宛てたる次の書翰は、卽ち此時書したるものの如し。——

第五十九翰

吁紗娘——、御身は予の來るを望まず、御身は予が御身の言に從ひ「クリスマス」まで御身を見ること勿らんと思へり。おゝ親愛なる天女よ、予は今日御身を見ずんば、永久相別るべし。「クリスマス」の夕には、御身は震へる手に此手紙を取上げ、憫れみの涙を以て之を潤ふすべきなり。吁、夏には冬の寒さを忘る、世の樂しめる人、いかでか悲しめる人の心を知らんや、況してや悲しみ極まりて死せんとする人の心をや。吁、紗娘、願くは我心を憫れめ、世に御身の外は我心を知る人とて之れあらざるなり。

渠は其日六時頃、紗娘を訪ひ直ちに渠女の室に突入れり。此時紗娘は只一人にて机に對して在り、淮亭郎の入り來るを見て、渠は決して「クリスマス」の夕まで來るまじきをアルベルトに確かめ置きたるを以て、其心の混雜は一方ならざりし。加ふるに此日アルベルトは出て外にあり、旁渠女は實に淮亭郎の不親切なる訪問に當惑せり。されど渠女は其身の潔白なるを知れば、漸く心を鎭め、涙ながらに言へらく、『淮亭郎よ、御身は言を食めるなり』淮亭郎『予は何等の約束をもなせし事あらず』。紗娘『さりながら、御身は吾等兩人の爲めを思へる妾の要求を諾し給はざるべからず』。淮亭郎は默然として

言なし。渠女は直ちに其二三の朋友に書を送り、來會せんことを望みたり。之れ己の談話の證人たらしむるが爲のみならず、淮亭郎が他人の來れるを見て速かに立去ることあらんを望みてなり。紗娘は、其間、諸種の書籍の談話等を以て其友の來るを待詫びたり。されど家僕歸り來りて、紗娘の友人は皆差閊ありて來り難き旨を告げぬ。渠女は大いに望を失ひしが、其身の恥る所なきを思ひて、直ちに其の精神を回復し、アルベルトの卑しき猜疑の念に抵抗して、確乎たる自信の心を以て其身を固めたり。其初めには下婢をして室に留らしめんとも思ひしが、其れさへも其身の潔白なるに滿足して思ひ止まれり。斯くて渠女は手琴を操りて其の得意なる曲二三を奏し、心地漸く爽かになりければ軈て淮亭郎の傍に坐し、何か渠女の爲に讀み聞かすものなきかを渠に問ひぬ。渠は儼然として答へり、『何物も』。紗娘『其の引出しを開き見よ、御身は御身の譯せしオッシアンの歌曲を見るべし、妾は未だそを讀みしことあらず、思ふに御身の唇より出でなば、一層聞きばえあるべきなり、淮亭郎よ、御身は妾の爲に讀み呉れざるや』。渠は微笑して其机の方に赴けり。されど渠が其の紙を取上げしや、一種不意の感情に打たれたるが如

く、涙ながらに坐に就き、少しく震ひ聲にて讀み初めたり。暫くして渠は次の如き哀れなる條に讀み至りぬ。(此所はアルミルが其の愛兒の死を悲しむ所なり)。

磯邊の岩に只一人、岸打つ波の音につれ、我兒の歎く聲すなり、あはれ行衛もまら髪の、父の助けも空なりき。

磯邊に立ちて夜もすがら、朦朧に青き月影に、我兒の姿見ゆるなり、よしや嵐は強くとも、など誤らんいとし兒を。

殘の星と諸共に、明けゆく空に泣く聲は、いよゝ微かになりにけり、岸の小草をまけかぬる、あゝ、軟風とまがふまで。

哀れ我兒は今いづこ、ありけん日には一目にて、十里の草をも靡かする、其勇ましき顏ばせは——、死ぬる其身はいかにとも、殘る老父のアルミルは、！

山をも捲かんず波の中、漁る舟も出ぬ夜半に、我身一人は岩の上、海原かけてこぎいづる、夢の舟路は吾兒がり。

月まつ宵の笑顏をば、碎く水面を怨みしは、歸らぬ昔となりにけり、人も所も變ら

ぬに、變り果てにし我身かも。

紗娘は玆に至りて悲しみに堪へ得ず、はら〳〵と涙を流し、其手巾を以て顏を掩へり。淮亭郎も紙を投じ、渠女の手を執り、涙を以て之を洗へり。此悲しき物語の爲め、二人は共に非常に感動し、其間には同感の情の外何物も打忘れたるなり。淮亭郎の熱心なる眼と唇は、渠女の白玉の腕に密着せり、渠女は震ひながら室を去らんと思へども、相憐れむの情の切なる、つれなく振り去るに忍びず、涙と嘆息の中に渠女は尙ほ讀み進まんことを淮亭郎に乞へり。淮亭郎は最早や疲れ果て〻泣く〳〵紙を取上げ、震ひながら其後を讀み初めぬ——。

おゝ嵐、など情なく起しつる、つなぐ甲斐なき玉の緒は、秋の梢の桐一葉、夜半の露にも散るべきを、など情なく起しつる。

されど狹霧は朝のみぞ、明くれば來なん旅人が、ありし我身を思出し、遇ふ人毎に尋ぬるも、消えにし我身は空なれや。

淮亭郎は己の位置によくはまりたる此話を讀みて、其の胸を及もて貫かるゝ思ひせり

——。心も半ば狂亂し、紗娘の足下に其身を侗と打伏し、渠女の兩手を執りて初めは其目に、次に其額に押當てぬ。紗娘は此時初めて渠の危險なる企を知り初めたり。此祕密の恐れは殆んど其の感覺を奪ひ去りぬ。渠女は柔かに淮亭郎の手を握り、己の胸に押しあつれば、精神ムラ〳〵として一種言ふべからざる嬉しさを感じぬ。渠女は徐々に其頭を淮亭郎の方に傾くれば、燃ゆるが如き其の紅顏は端なくも男の頰と相觸れぬ。此の感情の高まりたる時に當りて、渠等は互の愛情の外は何事をも判らず。淮亭郎は其腕に渠女を抱きて、其轟く胸に壓し付け、渠女の震へ居る唇に幾度となく熱心に接吻しぬ。『淮亭郎！』。渠女は微かなる震ひ聲にて叫びながら、其頭を背けぬ。『淮亭郎』、渠女は再び叫びながら、纖弱き手を以て渠を押退け、二三歩引下りながら、威と愛とに輝ける眼を決めて渠を凝視め、再び『淮亭郎』の名を呼びぬ。ハッと思ひて渠は遙かに飛退き、恐る〳〵跪きぬ！。渠女は身震ひしながら戸口の方に退きて、怒りを交へたる柔かき聲もて次の如く渠に言ひ告げぬ。『之れ最後の時なり、淮亭郎よ、御身は二度と妾を見る勿れ』。斯く言ひ了りて此上もなき憐れみ深き一目を不幸なる戀人に與へながら、急ぎて其室に入

り、内に閉籠りぬ。淮亭郎は其腕を擴げ、之を留めんとせしかど、事已に遅かりき。暫しの間、渠は椅子に凭りて、茫然として悲しげに太息つき居たり。やゝ久うして、夕飯を持ち來れる家僕の足音を聞き、初めて立上り、室内を歩めり。家僕の去るを見て、渠は紗娘の室の戸にたどり行き、微かなる聲にて呼びぬ。『紗娘よ、紗娘よ、單にイマ一語、只、最後の別れを！』。渠は耳を側てぬ。されど何等の答も聞かず。再び渠は言ひ再び渠は耳を側てぬ。されど尚ほ何の効もなし。かくと見るより、渠は絶えなんばかりの聲を震はして呼びぬ。『我愛する、我最も愛する紗娘よ、いざさらば、未來永久の別れぞや』。

身神共に全く疲れ果てゝ、淮亭郎は市街の門に近きぬ。門番は兼てより渠を知りたれば異議なく通したり。夜は暗くして咫尺を辨ぜず、凄まじき嵐につれて、雨まじりの雪降りまきれり。十一時頃、渠は家に達しぬ。渠の從僕は、渠が髪を亂して帽子をも戴かざるを見たり。されど故らに知らぬ樣して過ぎたり。僕は又扶けて其衣を脱がする時、其太く濕り汚れ居れるを見たり。帽子は其後山の頂にある岩の角に懸り居れり。いかにして渠が此暗き夜、まかも嵐の中に斯る險阻なる山を攀ぢ得しや、人皆疑ひ怪しめりと云ふ。渠は寢床に入りて翌朝遅くまで眠れり、渠の僕が朝餐を渠に持行きし時、渠は書翰を認め居れり。そは紗娘に宛てたる先の手紙の續きにてありしなり。

第六十翰

最後に向て予は吾眼を開きぬ。吾眼は決して此後朝日の昇るを見ること無かるべし、雲はそを禁ずるなり。又再び御身の天女の如き容貌を見ること無かるべし——。死は之を禁ずべきなり。死！、まて死とは何物ぞや。他なし、永遠の眠のみ。人はヨク死を說けども、要するに皆之れ狹隘なる人智の迷說のみ、吾等は吾等の生活の始め終りに就ては少しも知る所あらざるなり。現今の處にては、予は我有なり、否寧ろ紗娘御身の有なり、されど悲夫吾等は間もなく——、恐らくは永久相別るべし。されど否、否、紗娘、吾等は吾等が現在の生活を知り居るが故に、我精靈は決して滅し得べきに非ざるなり。死！、されど紗娘よ、死とは暗き、狹き冷やかなる墳墓の中に埋もる事なるぞや。予は嘗て我愛する友の葬儀に會したるこ

とあり、予は棄の柩に墮ひ、墓の傍に立ちて棺の墓穴の中に落ちたる音を聞けり。上より投けかくる土塊につれて、棺は悲しげなる洞然たる響を返し、其音は次第〳〵に幽かになりて墓は遂に塡充せられたり。其時予は地上に吾身を投じ、其哀しさは我胸の裂くる程なりし。吁、當時予は斯の如きもの亦等しく吾が運命なるを覺らざりき。吁、空然たる人生や、死、墳墓、又之れ何を意味するものぞ。

我が最愛なる紗娘よ、予を赦せ。昨日！昨日！、吁、彼の危險なる瞬間に吾が生命は直ちに絶たるべかりしなり、予は其時幸福に死せしならん。何となれば、御身は予を愛し呉れたればなり。おゝ天よ、御身は予を愛せり！、予は此考へのみにても心は天上に浮べるが如き思ひあるなり。我が此唇は御身の唇の貴き溫かさを以て鄰けり、此胸は今尙ほ御身の胸より通ひたる快樂に感ずるなり——。されど思へば思ふほど我身の罪深し——。赦せ、親愛なる紗娘よ——。あゝ赦せ！

然り、予は思ふ、予は御身に愛されたりと。予は御身が最初に予に向けたる眼付にて之を見、御身が吾手を握りたる時、之を知りたり。されど予が御身に別れたる時、若しくは御身

がアルベルトの傍にあるを見る時は、あらゆる我が疑ひ、我が恐れは舊に復するなり。御身は覺え居るや、彼のいつぞやの夜會にて、人の爲に妨げられて談話することをも、御身の手を與ふることをも、共に叶はざりし時、御身が予に送りたる一輪の花のことを。予は歸りて其夜の半は此愛情の贈物を飾りて過したりき。されど之を以て昨日予が受けたる快樂に比すれば何物ぞや。此全き宇宙も、御身の愛らしき唇に對する事能はざるなり。御身は予を愛せり！、此腕は御身を擁したり、此唇は御身に接せり、御身は吾有なり——。然り、紗娘、御身は永久我有なり。予は固より知る、アルベルトは御身の夫なるを。然るとも又何の妨ぐる所やある。渠は生涯御身の夫たり、故に此世の中にて御身に戀慕するは之れ元より一の罪たるを免れず、予は自ら吾身を罰すべし、されど天にありて御身は吾有たり、予は御身に先ちて我が大父の前に赴き、御身の來るまで望を繫ぐべきなり、御身の來る其時は、予は天使の翼に乘りて飛んで御身を迎へ、共に永久の生活を營むべきなり、之れ決して夢にあらず、又妄想にあらず。記臆せよ——、吾等は此後とても生活すべし、吾等は再び相見るの時あるべし。